
僕達が生きる明日へ

愁真あさぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕達が生きる明日へ

【Zマーク】

Z0592A

【作者名】

愁真あわぎ

【あらすじ】

そこは、今から何百年も先の未来。中学を卒業する浅乃木悠町は、卒業式のその日、幼なじみのはじめと立ち入り禁止区域で不思議な少女と出会った。その不思議な少女の謎を追つ。SFファンタジー?

序章（前書き）

時は西暦3000後の話。人類は地球を捨て他の星に住み始めた。
まだ開発途中の禁止区域でその少女とは出会つ。

翌朝、悠田はいつものように早めに起きて機械的に昇つていく太陽を見ていた。

背後には、今の事件やら政治問題等を淡々とが読み上げる女キャスターの声がTVから聞こえていた。

そんなものには田もくれず悠田は、ぼんやりと空を眺めていた。すると、珍しくリビングから家政婦ロボットのミラハが自分を呼ぶ声がして振り向き、TVモニターに触るとモニターから女キャスターの姿は消え、代わりに旧式ロボットが現れた。

「なに?」

「お早うございます。悠田さん。はじめさんがおいでです。」

「え? はじめくんが? … 分かったすぐいく。」

と言つモニターを消し、手早く制服に着替えて机の上の鍵を持ってリビングに出た。

洗面所で顔を洗い、朝食もそこそこに表に出ると見慣れた姿がこちらに背を向けて立つっていた。

「はじめくん? どうしたの? こんなに早く…珍しいね。」

と声を掛けると、背を向けていた青髪をツンツンにして固めた少年は振り返った。

「よつ…卒業式、一緒に行」と思つてな。」

「…でも、まだ早いよ。」

「…じつ実はよ。『ラルロッド（通学用未来型バイク）が潰れちまつてよ…乗せてもらおうかなあ…って…。』

と言ひ彼に悠呂は大仰に呆れた顔を見せた。

「…それ、本氣で言つてんの？2人乗りは禁止つて校則で決まつてるでしょ。」

押し問答の末に1時間半後、2人ははじめの運転で卒業式会場に着き担任にこいつひどく叱られ、罰として卒業式後の片付けをさせられた。

序章（後書き）

え…全く素人で乱文になりつつあります。SFファンタジーに仕上げるつもりですが…頑張りますんで宜しくお願ひします。

第一章

すっかり、暮れてしまつた卒業式会場を2人は出た。

「…はじめくんのせいだよ。よりによつて卒業式の日に校則違反だなんて…。」

「ううせえな～。」

そう答えるはじめをきつと睨み、一人ツカツカと駐輪場へ向かうとはじめもつにてきた。

それがあからさまにしかめ面で振り返ると、はじめは照れくわいに頭を掻いて

「もう、卒業したんだし…帰りは2ケツでもいいだろ?」

今度は悠臣の運転で2人は暗くなつた帰り道を走つていた。

「もう、はじめくんの『タタタタ』には巻き込まれたくないよ…。」

「つんだよー仕方ねえだろー」ラルロッジがぶつ壊れちゃつたんだから。

そのはじめの答えにムツとして、悠臣は「ラルロッジ」を宙に止め、車体を乱暴に揺らした。

「うわっ!危ないっ危ないつてー止めろー止めりつてー落んだろつー!」

「もう嫌だよー!降りてよおー!」

「はあ？」じんなとこに置き去りかよ？ってわわつ危ないってーぬあ
つ！」

と車体から落ち、尻餅をついた。

その音に悠斗は振り返ると乗つてゐるはずのはじめがいないことに気づき慌てて車体を地に降ろして、自分も降りた。

「だつ大丈夫？はじめくん！」

「イテテつ…大丈夫つてお前がやつたんだろ？」

「「」めん…」

と言つ悠斗の肩越しに白い何かが見えた。

「ん？…おいつ向こうに人がいるぜ。」

「えつ？」

と振り返ると暗闇の中に何か白いものがぼおと浮かび上がつてゐる。

「なんか、おかしくねえか？あそこは立ち入り禁止区域だぞ？」

とこうはじめの声を後ろに聞きながら悠斗は、立ち入り禁止区域へ向かう白い人影をじつと見ていた。

第一章（後書き）

なかなか展開を発展させるのが難しいです。でも、頑張ります！！

悠田は、昨夜のあの人の影が気になつて一睡もできなかつた。確かあそこは、まだ開発途中の土地でしかも立ち入り禁止区域だ。関係者以外は誰もあそこへは近づかないはず。

それにと悠田は思つ。

あのシリエットはどう見ても、男性では有り得なかつた。何故あんな所に、あんな時間に女性とおぼしき人影が…。と、寝返りを打つた時だつた。

また、リビングから家政婦ロボットのミラハが呼んでいる。睡眠を取つていない体は重かつた。

ゆっくりベッドから起き上がると、重い足取りでリビングに向かつた。

「ミラハ、何?..どうかしたの?..」

「お休みのところ起つてしまふません。はじめさんがあいです。」

「えつ」

と言つとつボーリングの時計に手をやつた。時計は午前6時を少し過ぎたところだつた。

「…分かった。着替えるから中に入つてもらつて。」

と言い残すとノロノロと部屋に戻つて行つた。部屋で着替えて再びリビングに戻ると、あの見慣れたツンツン青頭が不慣れにソファーに腰掛けっていた。

「お早う、はじめくん。どうかしたの?..こんな朝早く…。」

と声を掛けると弾かれたように顔を上げ、軽く手を上げて挨拶した。

「よつ…。」

その表情は固い。

悠田は首を傾げながら真正面のソファーに腰を掛けると、ミラハが

スツとお茶を出してくれた。

それに口をつけると突然、切り出してきた。

「悠臣ー…もう一回あの場所に行つてみねえか？」

「えつ？」

「俺、あれが気になつて寝れなくてよお。なんか、変だつたじゃん

…。」

口に含んだお茶を「クンと飲み込んで悠臣は、カップを置いた。

「そうだね…僕も…気になつてたんだ。」

第一章（後書き）

まだまだこきまわよ
あ

悠田のコラルロッジで2人は、昨夜のあの場所を目指した。着いたそこは、広い原っぱでその先にフェンスがあり

「立ち入り禁止区域」

と大きな字で看板があった。

昨夜は暗かったのでこんな場所だったのかと2人はただ、辺りを見回していた。

はじめの提案でフェンス先まで行き、中を覗いてみた。

「ん、中も対して変わった所はねえな。」

「やうだね、向こうも原っぱだ。」

と2人が会話を交わした直後に
「いてつー！」

「！ーーー！」

誰かに足を蹴られたのだ。

何事かと振り向いてみると、そこには幼稚園位の年頃の男の子が2人、悠呂達を睨みつけていた。

「なつー、いきなり何しやがんだー、いてえじゃねえかー！」

とはじめが怒鳴ると男の子達は身じろぎもせず

「つむさーいつーおまえ等こそ何しに来たんだー！」

と言い放つたのだ。

それに悠呂が驚き、はじめと田を見合わせると男の子達の視線に合
わせて屈んだ。

「君達、お母さんほ？」

と話し掛けると男の子達はフイッと無視して何処かへ走つて行つた。

その後ろ姿を見送つた先に、一人の少女が立つていた。

年の頃は自分達と同じくらいだ。

その足元にあの男の子達はしがみついている。

それに気付いて悠斗はゆっくり立ち上がつた。

第三章（後書き）

いやあ、なかなか難しいです。でも、この後どうなんの？ 続きが早く知りたいっていう風にしたいと思つております。

柔らかい風に、その少女の白銀の長い髪がサラサラとそよごだ。それに悠田が見入っていると、しきりにフロンスを覗いていたはじめが振り返えり声を掛けた。

「おいつ 悠田、どうした？」

「えつ…ああ。あれ…。」

と悠田は彼女が立つ場所を指差した。それにはじめは田を向けてみた。

その彼女は、あの男の子達を従えてこちらに真っ直ぐ向かってくる。その様子に2人はキヨトンとしているが、田の前で立ち止まった。

「あなた達！ここへ何しにきたのー！」

とこきなり怒鳴られた。

「あつ？何つて…つうかあんたこそ何だよ？」

そういうはじめに彼女は、あの男の子達と同様に睨みつけてくる。「あのつ…あなたはこことの関係者が何がですか？」

と聞くとはそれには何も答えず

「早くここから立ち去りなさいー！」

と一方的に言い放った。それに、はじめはカチンときたのか「はあ？こきなり何だよー！」

「はじめぐる、落ち着いて…。」

となだめて悠呂は彼女に向き直った。

「確かに…僕達は立ち入り禁止区域に来てしまって悪い事だと思つよ…。でも、君の注意の仕方はないんじやないか？」

と言つと彼女は悠呂を見ていきなり突き飛ばした。

それに、はじめはびっくりしていると彼女は

「ここにはもう絶対一度と来ないで…さつさと帰つて…」

と凄い剣幕で言つた。

それに尻餅をついた悠呂は目を丸くしていた。

第四章（後書き）

……。うへん……乱文氣味だ。読みあらへていぬんなさい……。

「しつかし……なんだつたんだ？あの凶暴女！おつかねえつたらありやしねえ！」

怒り散らすはじめをよそに悠田は生返事を返した。

あれから悠田達は、渋々あの場所を後にしのだ。

今ははじめの運転でコラルロッドの後部座席に乘つている。

「ねえ……はじめくん……明日もあそこへ行つてみようよ。」

と何か考えた風な表情をしていた悠田は切り出した。

「はつ？……別にいいけど、どうした？いつものお前なりもつ嫌だよー。巻き込まれるのはじめんだあーて血つのことよ。」

「……うん。」

相変わらず生返事が返つので、

「……まつ俺もあのまんまじや納得いかねえし、付合つてやつが

「

「えっ…大丈夫だよ。」

と悠斗は運転席に移動し、コラルロッジの起動スイッチを押してアクセスを開けた。

はじめは何か言いたげだったがそれには触れず

「おいつ明日はどうすんだよ。」

と聞いてきた。一瞬なんの事かと考えたがすぐにわかり

「今度は僕が迎えにくる。明日の昼前、家を出る前に一度連絡を入れるよ。」

「わかった。んじゃまた明日な。」

とはじめは背を向けて家中に入つて行つた。

第五章（後書き）

なかなか書き出せませんでした汗。でも、読者人数が少しづつ増え
ていくのが嬉しい愁真です照

第六章

家に帰った悠呂は、コカルロッヂを駐輪場にしまつて何か思いふけつた様子で中に入った。

「お帰りなさい。悠呂さん。…はれ? 服が汚れますか? どうなさいました?」

玄関に入るなり、ミラハが声を掛けってきた。

「…なんでもないよ。シャワー浴びてくる。」

そのまま真っ直ぐにシャワールームに向かった。ミラハはそんな悠呂を黙つて見送った。

脱衣所で服を脱ぐとすぐ浴室に入り、マンホールのような円盤の上に立つと悠呂の体がフワリと浮いて薄い膜のようなものが円盤の周りを囲つた。

すると、何処からか水蒸気のようなものが出てきて悠呂の体を洗い流し始めた。

それに合わせて体がゅうくりフワフワと回転し始める。

それに身をまかせ、悠呂は今田のあの彼女の顔を思い出していた。
(…何故。…あそこにあるんだらうか? それとも、はじめくんの言つ通りただ危ないから…。)

帰り際、はじめとこんな話をした。

「…はじめくん。今の、どう御ひつ?」

「ん? どうひつ?」

「さつきの彼女達…。」

「あ～～あのおつかねえ女なつー。」

「…変…だと思わなー?」

「あつ?変つて何が?」

「あそー!近寄るなつて言つてた。」

「ああ。ただのお節介やあなんじやねえの?危ないから近寄るなあつてやつ。」

「それ…だけなのかなあ。」

「他に何があんだけ?」

「わからんないけど…。」

「……考え過ぎなんだよおまえはー。」

悠斗は、まだこちらを見つめてる彼女達に手をしづらかせつゝ
「やつ…なのかな…。」

「やつ…ほりー…俺が運転してやつから早く乗れよー。」

と言われるまま悠斗は黙つてはじめ運転のパワフルロジカルの後ろに
乗つた。

何か考へてる風の悠斗の顔をじょじょと見つめ乗れよー。
何か乗つた。

何か考へてる風の悠斗の顔をじょじょと見つめ乗れよー。
何か乗つた。

悠吾は、シャワーを終えゆっくり扉を開けた。
(あそこには何がある…誰も知られていない何かが…。)

第六章（後書き）

いやあ……なかなかじつじて書を出せなくてこんなに遅くなつたりやいました。でも、どうか読んで下されまし。

物事を考えている内に朝になってしまった。

天井を眺めていた悠呂の上で、田覓まし代わりにタイマーをセットしていったテレビが時刻になつて、今朝のニュースを告げ始めた。それに、重く粘る体を起こして消し、ベッドの傍らで腰を降ろして軽く息を吐いた。

そして、しばらくだるそうに俯くと、意を決したよつに立ち上がり、寝着のままダイニングへ向かった。

ダイニングに出ると、家政婦ロボットのミラハがもうキッチンの側に立つていた。

「おはよう。ミラハ。」

悠呂の声にミラハは振り向いて、驚いたよつこ声を掛けってきた。

（実際は表情など読み取れないのだが）

「悠呂さん！ 今朝は随分とお早いですね？」

洗面所へ向かいながら、悠呂は答える。

「うん……今日もはじめくんと約束。」

と洗面所に消えていく。それにミラハが新しいタオルを持つてついてきた。

「そうですか…朝食は如何なさいます?」

ミラハから渡されたタオルで顔を拭きながら、

「うん…あんまり食欲ないんだけど…一応軽く食べとく。」

「承知しました。」

と言つてミラハは先にキッチンに戻つて行つた。

悠畠は、タオルを置くと自分の部屋に戻り、服に着替えて再びダイニングに戻つて来た。

そして、キッチンに行かずその側のテレビ電話の画面に触れ、はじめのフルネームを呼んだ。

すると、感知したのか電話の呼び出し音が鳴る。

「はい」

と画面に映つたのは、はじめの母親だった。

「あらあ 悠畠くん、おはよ。」

「おはよ。おはよ。おはよ。おはよ。」

「はじめね？ ひょいと待つててね。」

と壇つと保留の美しい音楽と
「しづらくお待ち下さい。」

の画面が現れた。数秒後、はじめが画面に現れた。

「おはよ。」

「おはよ。起きあたた？」

「こやあ……実はさつき起きた。」

「そう。僕これから朝食食べてからさつち行へかり、うさと30分
『ひこひづり』行く。」

「OKー。んじやつ待つてるぜ。じやあな。」

と画面は途切れた。

第七章（後書き）

未熟者ですが…最後までお付き合い願えれば…。ご意見感想もお待ちしております。

悠田は、朝食を終えると自分の部屋に戻り、机の上の鍵を持つと早々に玄関に向かつた。

そして、駐輪場への行くと、いつもの様にコラルロッドに跨つた。エネルギータンクを調べ、減つてないのを確認するとアクセルを開け、そのまま真っ直ぐ飛び出し一路、はじめの家に向かつた。はじめの日が前に着くと、当の本人はもう準備を整えて家の前で待つていた。

「「ごめん、待つた？」

「いやつ全然。」

悠田は、はじめの周りをキョロキョロ見てから
「…まだ、直つてないの？はじめくんのコラルロッド。」

「まあな。昨日、やつと修理だしたからな。まつ…高校の入学式までには直つてるだろ。」

と言つと、勝手に後ろに跨つた。それに何も言わず悠田は発進の準備をする。

「行くよ。」

と後ろに跨つと

「おう。いつでも行つてくれ。」

と答えると一気にアクセルを開け、禁止区域へ向かつた。

今日の天気は穏やかだった。

顔に撫でる風はしかし、ヒンヤリとはしていたが暖かに降り注ぐ太

陽が、それを打ち消してくれるようだつた。

「なあ？」

と声を掛けたのは、後ろからだつた。

「お前、なんであそこがそんなに気になるわけ?まつ……俺も気になる分けじゃないが…。」

その質問に、少し間があつた。

「……僕も……良くわからない。ただ、漠然と感じたんだ。」

「感じた? 何を?」

「……わからない。」

「はあ? わかんねえのかよ?」

「……わからないうから、また行つてみたいんだ。」

と静かに答える悠斗の背中を見て、はじめは軽く息を吐いた。

「へいへい。あんまし興味を抱かない悠斗ちゃんが珍しいこと……とことん付き合いますよ。」

と茶化してみたが、いつものように食いついて来ないので、不思議に思った。

第八章（後書き）

とりあえず読んでいただいて、どこがどう面白いとか、面白くないとかご指摘でもかまいませんし、ただの感想でも構いません。メッセージお待ちしております

禁止区域に到着した悠呂達は、誰にも気づかれないように木陰にコラルロッドを止め、そこから様子を見る事にした。

「…昨日となら変わりはねえな。相変わらず、向こうの景色も原っぱだな。」

「うん…。」

と一人は会話を交わすとそれに視線を向けてみる。

何も変わりがないと視線を戻そつとした悠呂に、はじめは慌てたよう声を掛けてきた。

「おーっ！悠呂！あそこ…あそこ見て見ろよー。」

とはじめが指差す方向に目を向けてみる。

「警備兵だ…。」

とはじめは声をひそめて言つて、悠呂は無言で頷いた。

「なんでこんなとこに警備兵がいんだ？..」

「禁止区域だからじゃないかなあ？」

「禁止区域だからって…じゃあ、何で昨日はいなかつたんだよ？」

「…それもそうだね。」

と一人は固唾を飲むように警備兵のこのフロンスを無言で見つめた。

「悠呂…。」

「ん？」

「お前の予感……的中してつかもな。」

と話すはじめの生真面目な横顔を見て悠岳は、強く頷いた。
「んっ？ 警備兵が動いたぞ？」

と言つはじめの言葉に、悠岳は視線を警備兵に戻した。
そこには姿勢正しく敬礼をした警備兵が、誰かを迎えているように
も見える。

警備兵が向ける視線の先を辿ると、昨日の少女が一人の老人の車椅子
子を押している姿が見えた。

「おいつーあれつて……。」

と言いかけたはじめを遮るように

「しつ…静かに。」

と制した。

その少女は、警備兵と一緒に三言話を交わすと警備兵の手で開られたフェンスの向こうに歩いて行つた。

「あの子…昨日、僕を突き飛ばした子だつたね。」

「おう…しつかし、あのフェンスの向こうに何があんだけ？ あんなじ
いさん入れて…。」

「…うん。気になるね。」

「悠岳…どうする？」

少し考えて

「もうじきらく様子を見るよ……動くにしても、あの警備兵がいた

んじや。」

ところにななく真剣な面差しの悠岐の顔に半ば、驚いてはじめは頷いた。

「しかし悠岐、俺達だけで動くのは危なかねえか？」

「…やうだね。でも、調べてみて対した事じやなかつたら？」

「おまえ… つほつ本氣かよ？」

と云つたはじめを悠岐は、真つ直ぐ見た。

第九章（後書き）

前置き長かったので、これからガンガン行こうと思つてます。引き
続き、ご意見、ご感想お待ちしています。どうか宜しくお願ひします。

夕方までそこで粘った悠呂とはじめは、警備兵の様子を窺っていた。
「はあ～まだ、ここにいんのかよお～俺腹へつまつたよお。」

と木にもたれてボヤく、はじめをよそに悠呂は警備兵の動きに注目していた。

あれから、人らしい人の出入りは何か運んできたらしい配達員と、あの少女と車椅子の老人だけだった。

故に、さつきから立ちっぱなしの警備兵は暇そろそろあぐびをしている。

「ねえ。はじめくん、どうして今更警備兵なんて置いたと思つ？」

と木にだるそろそろもたれるはじめに聞いた。

聞かれた本人は

「ほえ？」

と間抜けな声を出し、悠呂と違う方から顔を出し警備兵を見て話しだした。

「そりや…俺たちが覗いてたからじゃねえのか？」

「それだけで？」

「あのなあ～俺に聞かれてよくわかんねえよー。」

「しつ！誰かこっちにくる！」

どうやら、警備兵の交代かなんかで休憩を取るらしいあの門番が人と話を交わしながら、こちらに向かってくる。

「おこつーじうすんだよつ！」

と小声でまくし立てるはじめを押さえて、

「しつ！隠れて！」

とその木に一人、身を隠した。

その背の反対側に警備兵はやってきて腰を降ろした。

「ふう～疲れた。よっこら」

悠呂たちのはお互い同士に口を押さえて、身を縮めて音をたてないように細心の注意をした。

すると、その警備兵は皮袋の中から何か取り出し、草の上に広げて食事を始めた。

二人はその匂いで、すぐに弁当だとわかると、目が血走り始めた。

一人は朝から何も食べていないのだ。

すると、はじめの腹から空腹を告げる音が不意になつた。

「ん？」

と兵士はその音に気づき、辺りをキヨロキヨロし始めた。

慌てた二人は、片手で相手の口、もう片手で相手の腹を互いに押さえた。

「誰だ！誰かそこにいるのか！」

と声が掛かつた。

第10章（後書き）

かなり間があいてしまいました笑読まれた方はよろしければいいんで、感想をメッセージの方へ寄せていたたければ幸いです

悠呂を見つけた警備兵は

「なんだ? お前は?」こで何をしている?」

と厳しい口調で問つてきた。

自分に気を取られている警備兵から、隠すように悠斗はまじめを背に隠した。

「えつ…えつと、」の辺で落とし物しちやつて…。」

「なに?落とし物だと?」

「はいつ、その。」

と会話の隙に悠斗は、後ろ手にはじめに

「うから離れろ」

と合図した。

はじめはそれを見て、こつそり警備兵の死角へ回りその場を離れた。

はじめがその場を離れた事を確認した悠斗は、軽い溜め息をつくと警備兵は不審そうに悠斗の後ろに手をやつた。

「なんだ? 後ろに何かあるのか?」

「あつ…そのつ別に何もありませぬ。」

「座じこな。セヒセヒこじみるー。」

「やつやだなあー何もあつませんよ。せりつ。」

と警備兵に後ろを見せた。

それを確認する為にこちりに来た警備兵は、辺りを検分すると、ピタリと動きを止めた。

それに冷や汗をかきながら様子を窺つ悠臣は警備兵は冷たい眼光で、こちりに向くと、

「あそこへいるのは友達か?」

と指を差したので、そちらに視線を移すとはじめがコラルロッジの座席に座りながらこじみる姿を見つめた。

「セヒセヒです。一緒にこじみてもひつたんです。」

と答えるとまたも不審そうこじみるじと見てこる。

「あつ…あのつ。」

と悠臣が言いかけたのを遮つて警備兵は、またも厳しい口調で聞いてきた。

「で？何を落としたんだ？」

「えつ？」

「え？じやないだろー探しておこてやるー明日でも取りに来い。

「あのつ…えつと鍵です。」

「ん、鍵だな？わかつた。今日のところは帰りなさい。」

と警備兵は無理やり、悠斗を後ろに向かせ背筋を押した。

「あつあつあつー！」

と抵抗しながら悠斗は、警備兵に振り向いた。

「質問なんですかー、ここは立ち入り禁止区域ですよ？」

警備兵は、悠斗を後ろに向かせながら

「ああ。もうだー早く帰りたまえー！」

と押し戻してへん。それに踏ん張りながら悠斗は更に質問をした。

「どうして、おじさん達がいるんです？」

「わからん奴だなあー、禁止区域だからだーさつ早く行けー！」

「ちよつと待つてーだつておじさん達、ソソヘ・ヨロベラコからでしょ？警備してゐるの。」

と聞くと明らかに表情が変わり、押し戻す力も強くなつた。

「さつー早く帰りなさいー！」

と突き飛ばされた。

悠呂は今度は、大人しくそれに従い立ち上るとはじめの方に歩きだした。

（ソロには、何かある。）

悠呂はそう確信した。

第十一章（後書き）

なんだか来ない間に、『小説評価』なる機能がついててびっくりしたのと、かなりのプレッシャーでガクガクの愁真です。評価の程、よろしくお願ひ致します。m(ーー)m

第十一章

振り返り、振り返りその場所から離れた。

警備兵はひりをじつと腕組みしながら見ている。

はじめの元に着くと、すぐさま声が掛った。

「だつ大丈夫か? ひつでえおつさんだなあ。」

「うん。」

と視線は警備兵に向かたまま悠凹は相づけをついた。

「……悠凹、じつすんだ? これから……。」

「……図書館に行く。」

「はあ?」

そつ答えると悠凹は座席に着き、アクセルを開けた。

慌ててはじめは、後ろに飛び乗るとすぐさま、悠凹はコワルロッジードを発進させた。

「おこつー図書館なんて何しこ行くんだよ?」

「調べもの……。」

「はあ? 何を調べんだよ?」

「歴史ー。」

「なあに? そんなもん調べてじつすんだよ? こきなりお勉強会で

むさんのかよ?』

と聞くとこもなり、悠斗はクスクスと笑つた。

『何笑つてんだよー』

『ハハハシ……めぐ。違つよ。周りから固めるんだ。』

と答える悠斗の意を詰りかねてはじめは首を傾げた。
『あの警備兵に質問してみたんだ。どうして警備をしてゐのかつて
…。』

『やつや……禁止区域だからつて答えた…だろ?』

『うん。やつ答えたよ。でも、僕はこいつ言った『おじさん達が、警
備を始めたのは2、3日前からでしょ』って。』

『うえーー?お前つそれつそれつ聞こちやつたのかよ?』

『うん。やつしたひ、明らかに警備兵の顔つきが変わつた…。』

『それつて……。』

『うん。あんこは、何がある。』

『それでどういひ結びへんただよ?』

『……歴史から調べて、何が解るんじやないかと聞いて…30年以
上も放置されたままの禁止区域の謎。』

『うーん。悠斗は車体を右に傾けた。』

「つか。不審に思つたのは2、3日前だろ？それまでは気に止
めなかつたじやん。」

「……僕はずつと氣になつてたよ……中学入学当時からね……あの時に
比べたら最近の禁止区域は何か変なんだよ。」

と悠臣はコラルロッドを止めて、前の物を見上げた。
その先にはドーム型の建物がそびえ立つてゐる。手前の門構えには
『国立図書館』の文字。

「まつ……とじとん付を仰つて言つちまつたから付を仰つてますよ」

とはじめは後ろから降りると、悠臣も降りてコラルロッドを押しながら歩き門の中へ入つた。
その後ろを、はじめは着いていく。

第十一章（後書き）

（汗）ひやー汗びったら評価していただけのかチンパンカンパンな愁真です笑素人同然なんで、評価じたい無理なかも…と落ち込んであります苦笑。

国立図書館の建物に入った、悠岳は入り口の取付口ボットに手を乗せ、指紋照合を済ませた。

何もわからなく、キヨロキヨロしているはじめにも指紋照合を勧めた。

それが終わると、沢山並ぶパソコンの中で奥の隅の一いつ、席のあいた所に腰を掛けた。

「国立図書館つてはじめて入ったぜ… すげえのな。」

「うん。僕はよく父さんときたよ でも、最近は久しぶりかな。」

「うん… しらみ潰しに見ていいつ。」

「うん… しらみ潰しに見ていいつ。」

「うん… うん… もうちょっと。」

二人は、色々ある資料の中を手分けして調べていく。

しかし、めぼしい資料がなく愕然とした。

「はあ… 立ち入り禁止区域はまだ開発されてない土地であり… なんつだよくそつーまた、これがよ。悠岳おーなんか対した資料がないから、もう諦めようぜー。」

「うん… うん… もうちょっと。」

と悠岳の皿と指はせわしく動いている。

はじめは、検索ワードを更に政治と打ち、どうせ関係ないだろ?とボタンを押した。すると、出てきた画面に皿を見張った。

「おっ…おい！悠呂、こっち来てみろよ…」

と手招きする手は宙をわなわなしている。

「どうしたの？」

と覗き込んだはじめの画面には、あの禁止区域で見た車椅子の老人の写真が掲載されたページだった。

悠呂は、思わず画面にカジりついた。

「こっ…これは… あそこで見た老人…。」

と呟くと悠呂は、画面をゆっくりスライドしていく。

そこに、書かれた内容はプロフィールとあの禁止区域を買つたとされる博士だと紹介されていた。

「『アスラビ・尾崎 修造』……医療に携わり、多くのクローン研究の成果で人々を救い社会に大きく貢献した…。クローン…？」

と悠呂はスライドする手を止めた。

「どうした？ 悠呂。」

はじめの声には反応せず、悠呂はその記事を印刷のアイコンにクリックした。

しかし、画面に印刷拒否のロックがかけられていた。

「ちっ」

と舌打ちすると悠呂は、ジャケットのポケットから小型PCを取り出しromeーし始めた。それにはじめは驚き

「おっ…おい！」

第十二章（後書き）

煮詰まりに煮詰まりにました。これから、面白くしてこいつかと思つてますつて遅い？笑

小型PCで、持ち出し禁止の書物を「ポーラーし始めた悠田」はじめは驚きを隠せなかつた。

「おつ…おい…やっぱいつて…。」

「しつ！大丈夫　はじめ君は周りを見てて。」

「周りを見とけつて…。」

とはじめは、辺りを見回すと一度、不正をしないか巡回しているロボットが見えた。

「おつ…おい！巡回ロボットがこいつち来てるぞ…やっぱいつて…。」

「うん…もうちょっと…。」

と悠田の手元の小型PCの画面はメモリー「登録完了」まで後わずかを表していた。

そわそわしている、はじめに巡回ロボットの田が止まつた。

「おつ…おこ…なんかあのロボット、こいつち見てるぞ…。」

「わかつてるよ…あとちょっととなんだ…っていうか、はじめ君の行動が不審に見えるんだよ。もつと普通にしててよ…。」

巡回ロボットは、徐々にこちらに近づいて来ていた。

ギリギリの所で小型PCはメモリー「登録完了」を示し、悠田はそれを胸ポケットに隠し、書物画面を素早く「ミミックに差し替えた。

「オイー・キミタチ、ナニヲシテイル。」

と聞かれ、はじめはPC画面を見た。

すると「ミミックに差し替えていたので、笑顔を向け。

「いえ…何も、これが面白いので続きはないかなって話してました。」

と答えるはじめの後ろで悠田は素早くさつさのメモリーを外し、違うメモリーを差し込んだ。

そのコソコソした様子を巡回ロボットは不審に思い、悠田に話して掛けた。

「ソノノキミ、ナーラシテイルンダネ? ソレヲ ワタシニ ミセナ
サイ。」

「えつ…これ…ですか?」

と悠斗が躊躇いを見せたので何も知らないはじめは、慌ててフォロ
ーに回る。

「いやつ…こいつ、高校上がるから勉強用にメモ帳持つてきただけ
つすからりあ。」

と言つぱじめのフォローローも虚しく、悠斗は素直に小型PCを巡回ロ
ボットに見せた。

それを手にしたロボットは、暫く検分するとそのまま悠斗に返して
その場を去つて行った。

それを見送つた悠斗は、手慣れたよつとて自分の席のマジを消し、は
じめに出来るよつとて促した。

何がなんだか、わからなのはじめは同じよつとてを消し悠斗の後
を追つて図書館を出た。

駐輪場でパラルロッドを出す悠斗は、はじめは問い合わせた。

「おこ…どうなつてんだよ?」

「あ…あれね。」

と言つて悠斗は、パラルロッドにむづくり跨り、後ろポケットから
小さなメモリーカードリッヂをはじめて見せた。

「…て、もしかして…。」

「…ひ…こつものメモリーとすつ替えただけ もつ乗つて。」

第十四章（後書き）

続きをばせかせかと、書いてみました しかし、また煮詰まるやも
⋮ f ^ _ ^ ; その時はご勘弁を

国立図書館を後にし、自宅についた一人は、すぐさま悠畠の部屋に入り小型PCのメモリーを自宅のPCに「ペーーした。

「なあ…悠畠、あの爺さん…すげえ偉い人間だつたんだな。」

と言ひはじめを横目に悠畠は再び、ノペーーした画面を見ていた。

「おいっ…聞いてんのかよ?」

と悠畠のベッドに腰掛けると悠畠は、背中を向けたまま

「…うん。聞こてるよ。」

と生返事を返した。そしてすぐには杖をついて考え込み始める。

「どうしたんだよ?」

「うん…なんか…見たことあるんだよね…『アスラビ・尾崎 修造』

。」

「なにで?」

「それが…思い出せないんだよね…うーん。」

と再び考え込み始めた悠畠の背中に溜め息をついて、はじめは枕元に積んであるメモリーファイルを手に取ると、何個か床に落としてしまった。

「やべっ…」

と慌てて拾うと、いきなり悠畠は立ち上がり

「わかった!…思い出した!父さんの書斎だ!…」

といきなり部屋を出て行つたので、はじめは慌ててメモリーファイルを置き後を行つた。

「おいっ!…いきなり出でいくなよ!」

と書斎に着くと、悠畠は何やらガサガサと探しものをしていた。

それに呆れたかのように肩をすくめると、はじめも書斎の中に足を踏み入れた。

部屋の中は古い、メモリーファイルが山のように積んであった。それを見上げながらはじめは

「おいつ……こいのかよつ勝手に……。」

と聞くと悠咲は探しものをしながら

「うん……まあ怒られちやつかもね……でも、父さんも母さんも仕事で
かれこれ4、5年近く帰ってきてないし……。」

「……そうか、相変わらず新星開拓の仕事は進んでないのかもな……。」

とはじめが埃にまみれた一つのメモリー ファイルに触れた時

「あつた……これだ……。」

と埃まみれのメモリー ファイルを手にしていた。

「なんだよ……それ？」

「うん……。」

とこうと父親の書斎机の上のPCを立ち上げ、そのメモリー ファイルを起動させた。

「何だ？」

とはじめが覗き込むとそこには、一つの論文らしき画面が現れてい
た。

「ん?……なんだよこれ?」

と聞くと悠咲は、一番上の文字をクリックし拡大した。そこにはある老人の名があった。

「アスラビ……てつおい……これは……。」

「そつ……アスラビ・尾崎 修造が出した論文が掲載された一部だ
よ……。」

と二人は、その下をスクロールし読みでゆく……そして、ある事実
に目を見開いた。

「なつ……なんだよこれ……こんな事が……あつていいのかよ……。」

「……うん。」

第十五章（後書き）

f ^ _ ^ ; やつとの思いで書きました… まだまだ、甘ちやんな私
であります… なんとか、面白くしようと試行錯誤しています。こ
れからも微々たる力ではありますが頑張って書きますので応援よろ
しくお願いします…

ホタルのよう、ぼうと光る物の中を悲しそうな表情でじっと見つめる少女がいた。

周りは静かで薄暗い、彼女の見ているものはなんなのかはよくは見えなかつた。

「……ら。……いら。」

と声がして彼女は、はつと我に返つた。

「せいら……星羅……どこだい？」

老人と思しき声が奥から聞こえてくる。彼女は、静かにその場を後にした。

鉄の扉をそつと開けると車椅子のまま机に向かう老人の背中があつた。

「お呼びでしょ？お父様。」

と彼女はその背中に話しかけると、老人はこちらに顔を向けた。

「おお……来てくれたか。行き詰まつてしまつた……少し外の空気を吸いたいんだが……。」

と話す老人は、真っ白い髪をたくわえ微笑ましく目を細めている。彼女がそこに居てくれる事が心底嬉しいようだ。

一方、『星羅』と呼ばれた彼女は、こちらに顔を向ける老人の机の上に飾られている写真立てを見て少し顔を曇らせ、老人から目を反らした。

「ん？どうした？星羅。」

と心配そうに聞く老人に

「いえつ……。」

と答えると静かに、彼に近づいて車椅子を引いた。

薄暗く長い廊下を星羅は、黙つて出口に向け車椅子を押していると、老人が話し掛けてきた。

「……星羅……最近、子供達はどんな様子だね？」

「…みんな、元気ですわ。」

「そ…か…。」

と言つと老人は、右手をすつと挙げたので星羅は車椅子を止めた。

「お父様？」

「いやつ…いい。進んでくれ。」

と言われたので星羅は再び、車椅子を押した。

出口が見えてきた辺りで老人は彼女を振り返り

「星羅…なにかあつたのか？」

と聞いてきたので星羅は、驚きを見せると顔を少し曇らせ俯いた。すると外側から警備兵が鉄の大きな扉を開けたのでまばゆい光が襲つてきた。それに目を細め、車椅子を外へ押した。

外は晴天だが、心地よい風が吹いていた。星羅は車椅子を押して、敷地を歩いた。

「なにか…あつたのだな…誰かに何か言われたのか？」

と聞かれ、星羅は精一杯明るい声で

「いいえ、お父様。」

と答える。

「じゃあ…なぜ、お前はそんな悲しそうな顔をする?..」

と言われ、星羅は足を止めた。心地よい風が、彼女の白銀の長い髪をなびかせる。

彼女は俯き、机の上にあつた写真立てを思い出していた。

「いえ…つ別に、なんでもないですわ…お父様。」

「…。」

そういうと、再び車椅子を押し老人のお気に入りの場所へと歩いた。

第十六章（後書き）

（・・・・） 読者のアドバイスを受け、少し違う角度から書きました！ これで、少しばかり面白く深みのある作品に仕上がるかなつと…（・・・） しかし、どう人丸出し…お恥ずかしい…頑張りますのでこれからも宜しくです

二人は、その文字内容に息を飲んだ。

「これって……。」

それに、コクリと頷くと悠呂はその一文を朗読し始めた。

「このまま研究を続けていけば、あの何百年も前に失敗した人間のクローンを作り出す事も可能ではない……。」

二人はしばし沈黙した……。しかしその沈黙を先に壊したのは、はじめだった。

「でも……今の法律では過去の事もあるから、医療に関わる臓器や皮膚以外はクローンは作っちゃ駄目なんじゃねえの？」

そう言う、はじめの顔を見上げ悠呂は頷くと再びPCに顔を向け、そのメモリーディスクを抜くと『新聞』と書かれ黄ばんだラベルのメモリー・ディスクを取り、再びセットする。

「それだけじゃないんだ……ちょっとこの記事も見て……。」

と画面をスクロールし、その中の小さな記事を探し出すとそこをクリックし拡大して見せる。

そこには、『アスラビ・尾崎 修造、医療界から追放』と書かれた記事に悠呂の父親が編集したのか、違う記事で『いまだ手付かずだった開拓土地を一人の資産家購入』とあった。

「これって……あの禁止区域の事か？」

と聞くはじめに悠呂は

「多分そうだとと思つ……なんで父さんがこんな記事を持つているのかは謎だけど……あそこで……もしかしたら……。」

「って言うか……お前……なんでおじさんがこんな物持つてんの知つてんの？」

そう聞かれた悠呂は、顔をじりじりに向けてニッコリ笑うと

「探し物を探す名目でちょこちょこと……ね。」

その顔を見たはじめは、呆れ顔で溜め息を落とす。

「お前…」いつのだけは積極的だよな…いつもは弱々なのにな…。

と言われ悠呂は少しムッとしたが、すぐに顔を画面に戻しPCを消すと

「あそこ…もつ一回行ってみない?」

と聞いてきた。それにはじめは片眉を上げて

「禁止区域か?」

「うん。」

「…なんか…更に危険リスク上がつてねえ?…」ってかこの事、政府は知つてんのかな?知つてて黙認してんのか?「

「どうだろ…良くわかんないけど…。」

少し考える風に腕組みしたはじめは、暫く何事かを考え

「…いいぜ!乗りかかった船だ!俺もなんか気になるしょ」と言つはじめを悠呂は、弾かれたように見た。

当の本人はワクワクしている様子で、ニヤリと笑つている。それに悠呂も少しニコリとすると

「明日、朝早く行ってみない?」

「ああ、いいぜ。俺、脚ねえから迎えようしくなつ」

「うん…じゃあ。そつち行く前に連絡入れる。」

そういうと、互いに顔を合わせ強く頷いた。

第十七章（後書き）

長らくお待たせしました。プロットを練つておじました。つてのは嘘でゲームで現実逃避しあつました苦笑 m(_ _;) m すんません。

星羅は父親の寝息を聞き、寝返りを打つた。

そして眠る姿を確認すると、静かに体を起こし部屋を出た。軽く身支度を整えると、一人闇夜に消えて行った。

一方、悠呂ははじめを玄関先で見送り中に戻ると一通りの生活習慣を終え早々に床についた。が、あの場所が気になり、のつそりとベッドから起きると身支度を軽く整え、こつそり自分の部屋からキッキンを窺つた。

キッキンでは、ミラハが充電をしているらしく、暗闇に赤く目を光らせて動く気配がなかつた。

それを確認すると、悠呂はすぐさま地下に降りてコラルロッドに跨ると禁止区域へ走らせた。

一人、警備兵にも見つからぬフェンスの一つに辿り着いた星羅は、じつとその場で思い詰めたように俯いていた。

暫く俯いていたが何か意を決した様に顔を上げ、フェンスに手を掛けた時、後ろから何か機械音らしき物が聞こえたのでとっさに木の陰に隠れて様子を窺つた。

立ち入り禁止区域に到着した悠呂は、すぐにエンジンを切り跨つたまま警備兵の目に触れぬ様、暗闇の中へ入つた。

そこで暫く辺りを窺い、コラルロッドから降りると田の前のフェンスに静かに近づいた。

（……夜は意外に、暗闇があるせいかバレずに済みそつかな……）
と身を低くして周りの様子を見てみる。そして、フェンスを見上げた。

（……難関は……これかな……テッペント高压電線とかなんか仕掛けあんのかなあ……ちょっと登つてみようか……どうしよう……）
とあちこち見ながら、登つて調べるかどうか逡巡していると……。

「あなた……こんな所で何をしているの?」

と声を掛けられ、悠呂は肩を震わせた。

「……答えなさい。」

と女性だらう声に、悠呂は恐る恐る振り返つてみる。

そこには、あの卒業式の帰りに見た白い服に身を纏つた女性と思しき人物が、木の陰からこちらに向かつて歩いてくる。

少し、恐怖に後退りした悠呂はしかし、暗闇に目を凝らしてみた。
脚はある……幽靈ではない様だ……。

その女性は、悠呂の目の前で立ち止まつた。

「……あなた……確か、こないだの……。」

と言われ、悠呂は彼女の脚から視線を上げた。

「あつ……きつ君は……。」

と言つと彼女の顔は瞬時に、あの時の様に険しくなつた。

「あなた……何しにきたの?」

その表情に気圧されながらも悠呂は反論した。

「きつ……君こそ、こんな時間に何をしてるのさ?」

「わつ……私は……。」

と口にいもると彼女は、すつと表情を変え視線を反らした。

第十八章（後書き）

（＊、＊、＊） はあ～なんと申しましょつか……物語に展開を
もたすことの難しさ、それを文章で表す難しさをつくづく感じまし
た……はあ～小説って奥が深い……

交代を待つ警備兵は、大きな欠伸をかまし

「今日も何事もない」

と独りごちた時、右腕にはまつた腕時計型テレビモニターがブルブルと反応した。

慌てて居住まいを正し、テレビモニターのボタンを押した。

すると、画面に現れたのは険しい顔をした隊長で更に驚いた。

「隊長！ こちらは異常ありません！」と敬礼をすると、画面に映る隊長は渋い顔で敬礼し

「緊急事態発生だ！ 星羅お嬢様がまた部屋におられぬそだ！ そちらには来てないか？」

と会話をしている所に丁度交代の若い警備兵がやつてきた。

それにチラリ目をやり、すぐに画面に向かって

「はっ！ こちらにはお見えになつておられないかと…。」

「うむ… こちらも全力で探す… そちらもくまなく探せ…」

「はっ！ 了解しました！」

と返事をするとすぐに画面は切れた。

「なにかあつたんありますか？」

と若い警備兵は聞いてきたので

「緊急事態発生だと… 星羅お嬢様を探せ…との命令だ。」

と言つとその警備兵も若い警備兵も肩をすくめて

「またか」

と言わんばかりにしてみせた。

「文句は言つてられん… お前はあちら一帯を。」

と指示をすると無言で敬礼だけをし、指示された方向へ若い警備兵は走つて行つた。

星羅は答えに窮していると、正門辺りが騒がしくなつたのに気づいた。

「なつ…何?なんか騒がしいナビ…。」

と悠呂が正門の方を見て言つた、

「！」

と悠呂の腕を取り、フーンスの一つを指した。

「えつ?…あつ…ちよつ…ちよつと待つてよ…僕のコラルロッジ…」
星羅は、悠呂の指した方を振り返ると辺りを見回しコラルロッジの
少し離れた場所にボロ布らしき物を見つけ、駆け出した。

それを手に取ると、迷わずコラルロッジに被し、戻つてくるや否や
再び悠呂の腕を取ると、フーンスの一つの前に立ちやつとフーンス
を押した。

「えつ?」

と悠呂が驚いた声を出していると、フーンスが扉の様に開き彼女は、
先にすつと入ると強引に悠呂を中へと導いた。

「えつ?…えつ?ちよつ…ちよつと…君…。」

「こつちよ…背を屈めて…。」

と言つと少し離れた所の地面にしゃが込み、彼女は取つ手を持つよ
うにして地面の一角を蓋のよう剥がした。

「!…!…!」

「さつ…入つて!」と彼女が促したのは地下へ続く階段だった。

「えつ?…でもつ…。」

と躊躇つていると、彼女はまた悠呂の腕を取つて

「あなた!捕まりたいの?」

と語氣荒くいふと有無を言わせず中に引つ張つて入つて行つた。

第十九章（後書き）

キー（。。）タ… 今回は、ゲームをやりながら、おおーと閃きがきましたので、こう展開をせてみました せてせてこれかうじつなるやら ウシャシャシャ

彼女に促されて入ったそこは、蓋を閉めてしまつと薄暗く狭かつた。真つ暗という訳でなく、左右にほんのりホタルの様に明かりが下に続いていてその先には奥に続くであろう鉄の小さな扉が見えた。一人は階段に段違いで座り身を縮めていた。

彼女が悠凹より一段上で、先程閉めた蓋型扉に手をやりながら、外を窺つている。

「ねえ……君、どうして僕を匿つてくれたの？」

少し響く自分の声に内心驚きながら悠凹は、一段上の彼女に問うた。その声に、一瞬肩を強張させた彼女は一段下の悠凹に振り向いた。

「……それは……。」

そう言葉を詰まらせるといじこか悲しげな表情で視線を逸らした。

「…………。」

何も言わず彼女は、再び上を向いた。

そんな彼女に、何があるなと思ひながらもそれ以上は聞かなかつた。

しばらく、沈黙していると先程までバタバタと走る音がしていたのが止んだ。

彼女はそつと蓋型扉を開け表を窺うとすぐ閉めて悠凹を振り返る。

「あなた……コラルロッヂに乗つてきたのよね？」

「うつ……うん。そうだけど……。」

「……それで、ここを離れるわよ。」

「えつ……？……ちよつちよつと待つてよ……。」

と悠凹が止めるのも聞かず彼女は一人、飛び出して行つた。

悠凹は、慌てて蓋型扉を開け辺りを窺つてから彼女の姿を探した。すると彼女はもう、コラルロッヂの場所まで辿り着き被してあつたボロ布を剥いでいた。

「ああ……積極的だなあ……もつ……。」

と独りごちて、悠呂も再び周りを見回し安全な事を確認すると、そこを飛び出した。

「君ね！無茶にも程があるよー。」

と文句をたれると彼女は無表情で「ひらりを振り向いた。

「なつ……何？」

と問うと何かに灯りを照らされた。

「…………」

悠呂は慌ててコラルロッジへ跨るとエンジンを起動させる。その側で彼女が何故か、ぼーと突っ立っていた。

それに気づいた悠呂は、自分でも驚く位厳しい口調で「何やつての！？早く後ろに乗つてつーーー！」

と叫んでいた。

その声に彼女は身を固くすると、すぐに顎いて後ろに乗つた。

そこへ丁度、警備兵が何やら叫んでいる声が聞こえた。

「おこつーーーそこのお前！何やつ…………ーーー？」

と近づいて来た警備兵が後ろに乗る少女に手を止めて固まつた。

「今だーーー！」

悠呂は思いつ切りアクセルを捻つた。

「いひこらつーーー待て！貴様！」

と車体に手をかけられそうになつた時、車体が宙に急浮上する。警備兵の手は見事宙を搔いた。

第一十章（後書き）

キー（。。） - タ 今度は、お茶碗を洗つてゐる時に閃きました
(。。) つうか、早くこれを完結にして次の作品に移りたい気
持ちでいっぱい…（。。）しかし！展開が難しいので難航つす
ウシャシャシャ

悠呂達を取り逃がした警備兵は、しばし茫然としていたがすぐさま右腕にはめた腕時計型モニターの呼び出しをした。すると、すぐに応対があった。

「どうした？お嬢様は見つかったか？」

と先程の隊長が姿を現わし警備兵に聞いた。

「たつ大変です！隊長！星羅お嬢様が何者かに連れ去られました！…」

「なに？…どういう事だつ？」

と隊長の顔が険しくなった。その質問に警備兵は

「そつ…それが、良くわからないのですが…連れ去った人物というのが少年でして…。」

「なに？少年だと？貴様…見たのか？それは確かなんだな？」

「はいっ！私が見ましたので…。」

うーんと唸ると顎に手をあてた隊長は、仕方ないといふ感じで警備兵に

「直ちにその少年を追え！お嬢様を攫われたのはマズい！」

と言われて警備兵は敬礼をし

「はっ！」

と返事をするとすぐさまモニターチャンネルを切り替え追尾命令を出した。

禁止区域を出発した悠呂はとりあえず自宅を目標していた。

後ろに乗る少女は、何も言わず自分にしつかり掴まっている。

スピードが出ているせいか服をばたつかせている夜風が少し肌寒い。すると、自分の服をしつかり握る彼女の手がピクついた。

「？？？」

「……おつ…追っ手よ…」

「えつ？」

そう言われ、悠田は弾かれたように後ろを見た。

すると数台の新型変形仕様の未来型バイクが、ライトを煌々とこちらに当てて向かつて来ている。

悠田は慌てて車体を傾け、細い裏路地にコラルロッドを走らせる。

「きやああっ！」

急に車体を傾けたので、後ろに乗る少女は悲鳴を上げ、更にしつかり悠田に掴まってきた。

「ごつ…ごめん…大丈夫？」

「う…うん。なんとか…。」

と悠田は視線を彼女から後方に向け舌打ちをした。

追つ手のバイク達は、車体を細身に変形させ更に追つてくれる。

「…ですが…変形仕様の新型バイクだね…。」

と正面を向き直りながら独りごちた。

悠田はどつしたのかと辺りにせわしなく視線を向け逃げ道を探していると…地面にぽっかりマンホールの様な穴の上を通り抜けた。
(あれだ…！…！)

悠田は、急にヒターンをかました。

後ろの彼女は、悲鳴を辛うじて飲み込んだが追つ手に突っ込む車体に驚き

「ちよつ…ちよつと…あなた…何を！？」

と言つとコラルロッドはかまわず追つ手に突っ込み走つていく。

追つっていた追尾班達は、いきなり目標の車体が勢い良くこちらに向かってくるのに右往左往し、混乱していた。

その隙をついて、悠田はコラルロッドをマンホールらしき穴に向け、勢い良く中に走らせた。

第二十一章（後書き）

（・・）SFなのでアクションシーンも欲しいと考えていますが…なんせ主人公は学生の身、銃ぶつ放すううみたいなのはこのご時世…未成年の殺人事件が多発しているのに考えさせられ、カー アクションくらいに留めました 次回もお楽しみに

悠呂は、勢い良くマンホールらしき穴に「ラルロッド」を中に走らせたが車体は下に急降下していく。

「うう……うわああああああつ……」

車体は暗闇に飲み込まれていく

した。

とその中の隊長らしきフルフェイスの様な仮面をした男が、後ろに控える同じ様な格好の2人に問いただした。

「はう！……只今、付近を捜索中です。」

「そこの中の獵りが荷札をひいて答へた

とその隊長らしき仮面の男は苛立つた様子で指示を出した。

十一

と後ろに控えた2人は敬礼をするとその場をすぐさま離れ、自分達のバイクに跨ると他の隊員に混ざり捜索を開始した。

下に落ちていく感覚に意識朦朧としかけた悠長だったが、気を取り直しハンドルグリップを握る手を強め、足元の非常用浮上ペダルを出すと思いつ切り踏み込んだ。

車体は、下に落ちる力と反発しながら下降速度を徐々に弱め、大きな水しぶきを上げて止まった。

八九
心

と安堵の溜息を零し、後ろを振り返った。

と声を掛けると彼女は、悠斗の背中に額を埋めて踏ん張っていた力を解きゆっくりと顔を上げた。

「……えつ……ええ。なんとか……」

と力なく彼女も溜息をついた。

そんな彼女をみやつて、悠臣はゆづくり自分達が落ちてきた穴を見上げた。

「うわっ……穴があんなこちつちやい……そんなに深いとこだつたんだ……。」

と声を上げると、後ろの彼女も同じように上を見上げた。

「……そうね。」

2人は暫く黙つたまま上を見上げていた。

「……追つ手……ここまで来るかしら……。」

「う……うん。わからないけど……とりあえず、ここを動いて。」

そういうと、悠臣はコラルロッジのグリップを回しゆづくり車体を走らせた。

中は真つ暗で、コラルロッジのライトが当たらぬ所は本当の闇だつた。

どうやら、コラルロッジが走る下は水のようだとしか判らない。徐々に先を進めていくといくつかの分かれ道があるのがわかる。

辺りを見回しながら悠臣は、呟いた。

「ここは……下水道?」

同じように星羅も辺りを窺つている。

「しかも、なんだか……古いような……今は使われないのかなあ……夜道で良く判らなかつたけど……住宅つてあつたかな?」

「私も、追つ手に気を取られて周りを見てなかつたから……判らないわ。」

「逃げるの、必死で勢い良く飛び込んでじゅつたけど……。」

と言つと星羅は不安そうに悠臣を見上げてきた。

「これからどうするの?」

そんな彼女の、不安そうな顔を見つめて悠臣は、

「……なんとか、僕の家の方向に走つてみるよ。」と笑顔を向けた。

第一十一章（後書き）

（　　：） 携帯での編集には限界を感じます… 文字数が入らず
最後の方はカツツし、次回にまわす所存です… はあ…

「ここか？間違いないな？」

と隊長らしきフルフェイスの男は、一つの穴を覗き込んで問う。それに答えたのは同じような格好をして最新型バイクに搭載されている機能で何かを検索しながら

「間違いないかと・・・あの少年はこちうに突進してきたので。」一方、悠呂達は道もわからない下水道をゆっくりと進んでいた。そしてどうしようかと躊躇つたが、意を決して後ろの彼女に話し掛けた。

「あのつ・・・質問していいかな？」

自分の声が響く。少し彼女の返答を待つた。がしかし、返事が返つてこなかつたので、

「あのつ・・・答えたくなかったらいいんだけど・・・。」

と言つと彼女は、微かに

「うん」

と答えた。

「あのつ・・・その・・・あの老人とはどういづ関係？」

少し間があつたが、彼女は静かにそして端的に、

「・・・親子。」

とだけ答えた。

「え？・・・へつへえ～そうだつたんだ。」

と驚いたが必死にそう返した。彼女は何も話す様子がないので質問を続けてみる。

「きつ・・・禁止区域には、何があるの？」

少し声が裏返つたが聞いてみる。

しかし、これはいくら待つても彼女の答えが返つてこなかつた。

悠呂は、コラルロッドのスピードをまた落とし、彼女を振り返つた

が暗闇で表情を伺い知る事は出来なかつた。

悠呂は溜め息を零し前を向こうとした時、遠くで微かに機械音が聞こえた。

悠呂は慌てアクセルグリップを回し、スピードを上げた。

コラルロッドを走らせながら、振り返つてみると遠くの方から豆粒程のライトらしい物がグングンこちらに向かつてくる。

悠呂は、コラルロッドのスピードの限界を知り一つ角を曲がると横穴にコラルロッドを滑り込ませエンジンを切つた。

第一二三章（後書き）

（＊、＊、＊）“編集きつつい……どうしても、話の切り替え場所に改行を入れてはいるがならないよ……

第一十四章

修造は、自室で紫煙をくむらせていた。

部屋の外は騒がしい。

娘の捜索にと警備兵を呼んだからだ。修造達の家は研究所より少し離れた場所にある。

娘がベッドにいない事に気付いたのは、夜半過ぎトイレに用を覚まし隣にいる筈の娘の名を呼んでも返答がなかつたからだ。

またか、と思い長年信頼の置ける友人の一人、アジユラーチ村瀬警備隊長に連絡を入れたのだ。

彼は自分が医師会から追放された時、唯一自分を信じついてくれた中の一人だった。

もうかれこれ彼との付き合いも二十数年になる。

修造は、今はボタン一つで動く車椅子を自室の机へと向けた。机の上に飾つてある写真立てを手にする。

研究所の机にも同じものがあるがあれはこの写真とは別の時に撮つたものである。

そこに写る娘の笑顔に、修造は目を細めた。

しかし、その笑顔の彼女と今居る娘の顔は同じなれど、髪色は全く異なつていた。

そして、修造は静かに目を閉じ、遠く昔に聞いた彼女の声を思い出していた。

「・・・お父様、泣かないで・・・。」

そう話す娘の顔色は悪く、白い病院のベッドに横たわっている。

「心配なさらないで・・・私は大丈夫ですわ。簡単に死んだりしない。」

そう言って白く細い指先で、自分の頬に流れる熱いものを拭つてくれ

れる。

あの切ない笑顔が今も蘇つてくるようだと修造は思った。
不意に目頭が熱くなる。そつと写真立てを机に戻した。

数年前、まだ幼い星羅にその写真の人物は誰だと聞かれた時は、内心焦った。

「お前の姉さんだ。」

と教えてやると、幼い星羅は首を傾けて

「ふう～ん。」

と言つただけで更に質問をしてくる事はなかつた。

両目頭に溜まつた涙を左手で摘むように拭うと、慌ただしく自室のドアがノックされた。

「どうぞ。」

と返答し、入つてきたのは長年見知つた顔だつた。

「ん？ 娘は見つかつたかね？ アジュラーチ隊長。」

しかし、目の前の彼の顔は堅い。

「どうかしたのかね？ 君のそんな顔は何年ぶりか・・・。」

と言いかけた修造の声を遮つてアジュラート隊長は声を荒げた。
「暢気な事を言つてる場合ぢゃないぞ！ 修造！」

そんな彼を修造はふつと笑つて

「また、娘に出し抜かれたのか？ 村瀬。」

ファーストネームを呼ばないのは、2人の親密性がわかる。

「そんな事ではないつ！ お前の娘が何者かに連れ去られた！」

その言葉を聞いて修造は、吸つていた葉巻を床に落とした。

しかし、すぐに真顔になりいつもの穏和な顔より険しい顔で車椅子を大きな窓に向けて進ませた。

その後ろをアジュラーチ隊長は、修造の落とした葉巻を拾い灰皿に捻入れながら。

「連れ去つた奴は、乗り物に乗つて逃げたと聞いた。すぐに追尾班を向かわせた。」

と言つと修造に背を向け部屋を出ていった。

第一十四章（後書き）

(*^-^*) b 今回は、じいさんの様子を書いてみる事にしました。これで全体的な描写がわかるようになるといいなあ～と思います

「あ……遅いっ！遅すぎる……何やつてんだよつ……悠田はつ……」

昨日、こちらに来る前に連絡をいれると悠田は言っていたのに一向に入る気配のなさにはじめは一人苛立ちを募らせていた。

「くそつ！仕方ない！」

と言つと立ち上がり表に出でていった。

移動手段がないので、悠田の家まで歩いて行くことにする。

幸い、近所で歩きだと3・40分というところだ。

怒りに地団太を踏みながらはじめは向かう。

悠田宅に着くと、一呼吸をして呼び出しブザーを押した。

すぐに応答があり、自分だとわかつたのだろう。

玄関ロックが解除された音がした。

いつもなら家政婦ロボットのミラハが顔を出すこと訝しんでドアの開閉ボタンを押すと、物凄い勢いでロボットがあちこちに動き、右往左往している。

「・・・ミラハ？」

と恐る恐る呼ぶと、まるで泣きつぶつぶるかのよつて、はじめの元にロボットは走ってきた。

「はつはじめさん…どうしましょつ…どうましょつ…」

「あ～ミラハ？ ちと落ち着こいぜ？」

「いつこれは、失礼しました。ロボットとあつう者が…・・・いついえそれどころじゃないんですつ…」

「何があつたんだよ？」

と聞いてやると、鉛色の顔を上げ一つ口クンと頷くと語り始めた。

「昨夜は、私の月に一度の充電の日でして…・・・何せ旧式ですから充電完了は今朝でした。私のメール機能に御主人様から受信がありましたので、悠田さんにお伝えしようと呼び出ししたのですが応答

がなかつたので部屋に行つてみたり、ベッドがもぬけの空だつたのです。」

「なんだつて！？ いつから居ないんだ？」

「さあ～？ 恐らくタベの内に出て行かれたのではないかと……。

「はじめしよう……。」

（あいつ、一人で禁止区域に行つたんだ……。）

とはじめは爪をキリリと噛んだ。

ミラハは、思い出したようにはじめをリビングへと通し、ソファーに座るよう促した。

はじめが苛立ちながら色々と思いを巡らせていると、いつ注いだのかテーブルに温かい紅茶をミラハがそつと置いてくれた。

「ところで、はじめさんはじめ言つたじ用で？」

「ん？ …… ああ～ちよつと悠斗と今日出掛けようつがあつてさ……。」

「そうだつたんですか……はあ～。」

と口ボットなので表情はわからないが落ち込んだ様子を見せた。
（あいつ、一人で行きやがつて俺は脚がねえんだぞつ！ つたく～）
と苛立ちを募らせた。

「はじめさん、どうなさいます？」

「ああ～帰つてくるまで待たせてもらひつよ。」

「いつになるか……。」

「いこよ。」

と会話が途切れると玄関のドアが開く音がしたと思ったら、いきなり後ろから誰かに抱きしめられた。

「んなつ！ …！」

その抱きついてきた人物は「ともあうつに頭をナデナデしながら「あ～大きくなつたなあ～。」

と一人、感激したと言つ感じで一向に離れてくれる様子がない。
というか気持ち悪い。はじめは自分からその気持ち悪い人物をひつペ返した。

「なつ何すんだよ！？いきなりっ！？気持ちわりい／＼な！」

ひつぺ返された当の本人は、はじめの顔を見てキヨトンとしている。その横で一部始終を見ていたミラハは何事もなかつた様子で

「御主人様・・・お早いですね。」

と言つた。

「えつ？御主人様つて事は・・・おじさん？」

とはじめは目の前のすつとんきょううな男に指を差し聞いた。

するとその男は、マジマジとはじめの顔を見て頭をポリポリと搔くと「君・・・誰だっけ？」

と間抜けに聞くのではじめは少し憮然とすると、呆れた口調で

「スレッジ・桐矢 はじめです。」

と告げると田の前の男は、ああ～と言つた感じに胸の前で軽く手を叩いた。

第一十五章（後書き）

(=^_^=) 長らくお待たせいたしました (^_-^;) つうか
またまた現実逃避してただけだけど・・・次回作の方は次々ポワン
ポワン浮かんできてああしようこうしようとストーリーが浮かんで
くるだけど・・・これを完結してからと思い日々新しい作品の意欲
と戦い中

ヽ(。、。)ノ

「思い出したぞっ！ その青い髪！ 生意気そうな顔！ お前はあのつ泣き虫寝ションベン小僧のいっちゃんだな？」

と言われて、はじめは一気に顔が火照つてくるのがわかつた。

と問い合わせると、それを遮るかのように悠品の父親は話始めた。

「あれは……確か出勤前だ。俺がお前の家の前を通るとな、なあ、なんかガキがわあわあ泣いてやがったんだ。それで何事かと思って家のなかをちらりと覗いてみたら……ふふつお前が下半身丸出して泣いてたんだよ……。」

と話しが始まつたのではじめは赤面し、俯いた。それでも、彼の話は続く……。

「なんでかと思つて辺りを窺つたらあ～お前の母親が布団干してんだよお～なあ～んか辺な地図が書いてあつたなあ～せやはははは！」

「二つちゃん、ホシシ、口の辺なれやんと言わなきゃダメでしょー。」
と茶化していくのでせじわせ

「こいつやんつて呼ぶなー。」

と怒鳴つた。すると更に更に悠呂の父親は話を続ける。
「お前え～うちの悠呂を良きいじめたら？ 確かあれは… そつそつ…。」

とまだまだ続く彼の話をはじめは赤面しひきながらやり過ごしてい
ると彼の話声が遠く感じ、はつと我に返ると声は止んでいた。
じつしたのかと顔を上げると田の前にいた筈の悠田の父親の姿が忽
然と消えていた。

「あー…あれへ…おじさんへ…どうした？」

と首を巡らせていると奥の部屋から「ラハ」を呼びながら、部屋着に着替えた彼が現れた。

「おーい…ミラハちゃん?俺の部屋、誰か入っちゃったの?」

「ああ~私は入るなと言われてますので入っておりませんが…。」

と会話を交わす二人に田をやりながら、はじめはドキリとした。

「ふ~悠田ちゃんが入っちゃったのかな?」

と言つとはじめの目の前のソファーに腰を下ろした。

話を逸らす田的もかねて、はじめは彼に質問してみた。

「おじさん、なんで帰ってきたの?」

そう聞かれて悠田の父親は、紅茶を飲む手を止めた。

「なんでって…何年ぶりかに息子に会いに来た…。」

と言つと紅茶をすすつた。

「なんで? だつてまだ冥王星の新星開拓プロジェクトは終わつてないぜ?」

と言つと、田の前彼は紳士に格好をつけて飲んでいた紅茶を噴水の様に吹き出した。

それにはじめは驚いてくると、悠田の父親はミラハを手招きして何や~りに~に~に~話始めた。

「ちよつと~んミラハちゃん…俺、今そんな仕事しちやつてる事になつちやつてる訳え?」

「ええ~まあ~。」

「あんのつタコ親父! 今度いつぺんたこ焼きにしてやるつ~。」

と謎の言葉で怒鳴ると、せりつとこちらに向いて彼は質問してきた。

「とにかく…いつちやん…悠田は? とにかく君はここで何をしているんだね?」

と聞かれてはじめはまた、ドキリとしたが平常心を装い何食わぬ顔で質問に答えた。

「いつちやんは止めて下さい…俺は、今日悠田と遊ぶ約束をしていて…それで来てみたらいなかつたので帰つて来るまで待たしてもらつてるんです。」

と黙つと先程までのアホ面を一変わせ、浴室に顔を向け再び正面を向くと、じつとはじめの顔を見て、一つ溜め息をこぼし顎に手を添えた。

はじめは、なんだか内心ドキドキしていたがなんとか顔に出せば、その様子を見守つた。

すると、彼が何か口を開きかけるとドーンからか呼び出しついで電子音が鳴り出した。

はじめはどこから鳴つてこるのだろうと探しっこると、悠斗の父親の右手から小型モニターが出現した。

モニターの中に一人の若い男性が現れると、悠斗の父親は更に渋い顔をして

「ここには掛けてくるなと言つたはずだ！」

と先程の間抜け声が嘘の様な凜々しい声でその若い男性に怒鳴ると、中の青年はすみませんと返した。

そのやりとりを見て、はじめは田の前の彼はただものではないと語つた。

第一十六章（後書き）

(・ー・・) 逃避しまくつて気がついたら2ヶ月経つぢやつてた
あははつ
○(^ - ^) ○まつ こんな奴ですがこれからも末永く宜しくお願
いします
m (ーー) m

「おいつー見つかったか？」

「いえつ…まだ…。」

「くそつーこここの地図はダウンロードしたんだろつー。」

「はいつしました…だけどいつも横道が多いと…。」

「つべこべ言わず探しー！」

そんな会話を壁越しに聞きながら、悠呂達は息をひそめ様子見をする。

「おいつーそつちを探せー！」

と怒声と共に機械音が離れていく。

二人は安堵の息を洩すとズルズルとその場に腰を下ろした。

「はあー…君、大丈夫？」

と声を掛けてみたものの、コラルロッドの明かりをすべて切つてしまっているので彼女が見えない。

しかし肩の辺りにフワフワと何か、かかるものがあつてそれで彼女が頷いているのだと確信した。

「これからどうしよう…。」

と咳きながら悠呂は辺りを窺つたが、真つ暗で何も見えず平衡感覚も失う感じだ。

一つ息を吐くと、壁から少し顔を出し先程まで追尾班がいただろつ辺りを見てみる。

この横穴よりはうつすら明かるいそこには誰も見えず、耳もそばだててみたが何かいる気配や音はしなかつた。

「…………。」

悠呂は手探りでコラルロッドを探した。

「なつ…何をするの？」

と彼女の震える声を聞いて悠呂はとっさに手を引いた。

「あつ…ごめんつーどつか触つちゃつた?」

「「ううん、違うの。あなたはどこも触ってないわ。紛らわしい言い方して」「めんなさい。今から何をしようとしているの？」
「はあ、良かつた。ドキリとしたよ。」」真っ暗でわからぬ明かりを点けてみようかと思つて…。」

「……大丈夫なの？」

「うん、多分。一応外の様子を見てみたけど誰もいないみたいだし…。」

と説明しながらも悠呂はコラルロッジを探し固いものに触れてそれだと確信すると、手慣れたようにライトを点灯させた。

あらかじめ、中に突っ込む形で入れたコラルロッジだから明かりは横穴の奥を照らし出した。

しかし、奥が深いのだろうか明かりがあてられているのに先が見えない。

「…先が…見えない…。」

と悠呂が呟くと、隣にいた彼女が

「…という事は…まだこの先があると…」

「…そう…かもね。」

「どうするの？」

と彼女が見上げきた。悠呂は奥を見たまま、彼女の問いに答えなかつた。

（もしこの先に行つても…出口は見つからないかもしね…最悪、追尾班と出くわすかもしれない…でも、このまま逃げまわつても…一か八かやってみるか…。）

とそんな思考に悠呂は、はつとした。

先程から自分でも驚く様なこの思考と行動はなんだ？今までの自分なら信じられないことだ…。そう思つ何だか知らない高揚感が湧いてくる。

「行こう。」

そう言つと悠呂はコラルロッジに駆つた。

「えつ…でも…。」

「一か八かさ……やつなつたらなつたらでその時考えよつよ……やつ乗つて。」

と言つと彼女は一瞬躊躇つ素振りを見せたが、何か決心したかのように大人しく後ろに乗つた。

「じゃつ行くよ?」

「ええ。」

と言葉を交わすと、悠呂はアクセスを回した。

走らせてみたものの、そこはただひたすら真つ直ぐ進むだけで横道が一つもないのに、少し焦つていた。それは後ろに乗る彼女もうらしく、腰の辺りを掴む彼女の手は少し震えていた。

しばらく走らせていると、何やらうつすら明かるい場所に出た。

その明かりで辺りの様子がくつきりわかり、そこの広さも窺えた。

「なんだろ? この場所……。」

と首を巡らせていると後ろの彼女が何かに気づいたらしく声を掛けってきた。

「ねえ? うえ? ほら? ……上を見て。」

「ラルロッドをそこで停止し乗つたまま言われるままに見上げてみた。」

「… …出口?」

「わからないけど……なんか…木蓋みたいなのが光が漏れてるみたい…。」

「… ……。」

「出られるかしら…。」

そう呟く彼女の声を聞きながら、悠呂はゆっくり視線をおろし残りの燃料を確認した。そして、再び上を見上げ決心した。

前進から浮上に切り替え、ハンドルグリップから足下のペダル操作に切り替えた。それに気づいた彼女は、

「ちょっと…ちょっと何をする気なの? ?」

と聞いてきたが悠呂は上を睨みながら

「しつかり捕まつてて！」

と言つと足元のペダルを思いつきり踏み込んだ。

「ラルロッヂは、勢い良く浮上を始める。

「やああつー！」

悠呂はその勢いに構わず、その木蓋らしきものに頭から突っ込みその蓋を突き破つた。

少しクラクラしたが思いつきり外に飛び出した。

(*^-^*) ヽ 今回はパツと思いついたので忘れぬ内にチャチャ
ツと書こちやいました。
ヽ(。ヽ。) ノニの次はまたぱつたりと書かなくなるかも~うく
へえ~

第一一十八章

「なんでもそんな事になんだよつ……」

と悠田の部屋にほじめの怒声が響く。ほじめの田の前のベッドには俯く、悠田と星羅。

「お前つーその子連れ帰つてきちゃマズいだろがつ……」

「ひつ…じめん…」

「俺に謝られても困るつ……」

と怒鳴ると星羅はびくつとして悠田の腕にしがみついた。

「つつか…あんたつ…あんたもなんでノロノロついて来ちゃつたんだよ……。」

「ひつ…じめんなさい…。」

と彼女は、自分が仕出かした事の重大さに氣づいて更に震えた。そのやり取りを、悠田の父親はドア口で腕組しながらじつと聞いていた。

「俺をほつぽつて、勝手な事しやがつて!」

と青筋を立てて怒るほじめの肩越しから悠田は黙つてこりを見ている父親に目を滑らせた。

「おまえつ聞いてんのかつ…」

と言われて悠田は視線をはじめに戻し頷いた。

「おまえつ…」

とほじめが喋りうとしたのを遮つて悠田の父親は静かに、そして凄みのある声で聞いてきた。

「彼女は、あのアスラビ・尾崎 修造の娘ではないのか?」

と聞かれて、三人は一気に固まつてしまつた。

「… なんだな?」

と聞かれて答えたのは当の本人だつた。

「はいっ…私は、アスラビ・尾崎 修造の娘です……。」

と少し声が震えていた。しーんと静まる部屋に父親の低い声が聞く。

「悠呂、これはどういう事だ？」

悠呂はそつ尋ねる父親を振り仰いだが彼の強い眼差しが痛くてすぐに視線を逸らしてしまった。

黙っていると、どうなんだと父親はまた低くそして威圧感のある声で聞いてきたので顔を上げると、彼の強い眼差しに根負けしてポツリポツリと話始めた。

「じつ…実は、卒業式の日の帰り……。」

と全ての事情を、静かに語る。父親はそれをじつと聞いている。はじめは、先程までのアホ丸出しの彼とのあまりのギャップの違いに啞然とした。

全ての話をじつと聞き終えた父親は、腕組を外すとツカツカと悠呂の前に行き有無も言わさず襟首を掴んで持ち上げた。それに悠呂は驚き目を見開くといきなり襟首がくつと締まった。苦しさに目を閉じていたらいきなり背中に痛みが走った。一瞬、何かわからず目を開けてみると父親達のいる部屋が遠のいて初めて自分が投げ飛ばされたのだとわかった。

父親は物凄い剣幕で、こちらに向かって歩いてくると再び襟首を掴んだ。

「お前はなんて危険な事をすんだっ！！人様に迷惑までかけて！！こんなに心配までかけてっ！！」

と怒鳴られた。何故だかわからなかつたが、目頭に熱いものを感じてとつさに顔を背けた。

「「めんなさい…。」

と震える声でそれだけを言った。

父親は乱暴に襟首を離すと、腕のボタンを何やらいじりながら玄関に向かい、そのまま外へ出て行つてしまつた。

その場でうなだれないと、はじめと星羅が駆け寄つてきた。

「おいつ悠呂！大丈夫か？」

「…………うん。」

第二十八章（後書き）

（ ）今は少ない、父親の愛情表現を表してみた文章です 果たして最近ではこんなに真剣に怒ってくれる父親は今の世の中に何人いらっしゃるんでしょうか？

第二十九章

父親は、腕時計型テレビ電話の呼び出し音を聞きながら表に出た。

「はい、こちら秘密警察、諜報部。」

とキビキビした女性の声で応答した。その声を聞き、父親は腕を顔の前まで上げた。

「俺だ。さつきはすまない。悪いが桐矢に変わってくれ。」

「あつ、これは…浅乃木警部。おはようございます。桐矢警部補ですね？少々お待ち下さい。」

と笑顔を見せた女性の画面は、すぐに青い髪をした青年に変わった。「はい、スレッド・桐矢…あつあれ？先輩？あのつおはようございます。」

と驚いた表情を見せた。

「けつ…お前も警部補に昇進かあ～。」

と悪態をつくと画面の中の青年は照れながら頭を搔いた。

「ちつ…胸くそ悪いが報告だあ。お前の後輩の情報は確かだ。」

と浅乃木が言うと、目の前の青年は表情を変えた。

「つと言いますと…あの情報は…。」

と言つ青年に浅乃木は頷いた。

「なんだか知らんが…俺の息子が連れてきた。おまけに四年ぶりに家に帰つたつてのにお前によく似た顔が家にいやがつた…。」

「えつ…俺によく似た？」

と画面の中の青年は困惑顔で問うてきた。

「ふんつ…まあいい。報告は以上だ。」

とさつと通信を切つてしまつた。

浅乃木は報告を終えると、一つ溜め息をついて家の中に入った。

中に入るとソファーに息子、並んで星羅が座り、一つ掛けのソファーにはじめ、その側にミラハが立つていた。それを見回して、また溜め息をつくと頭を搔いて息子の座るソファーの向かいに腰掛け

た。

そして、改めて息子の顔を見ると。

「…大きくなつたな。悠呂」

と笑んだ。その父親の顔に悠呂は目を輝かせた。

「あの…お…お帰りなさい…父さん。」

と母の前の息子は、恥ずかしそうに言つので浅乃木は

「うん」

とだけ言つて頷いた。

いつの間に用意したのか、ミラハがテーブルに茶器を揃え紅茶を人數分、カップに注いでいる。

「とつ…ところで、父さん…いつ帰つてきたの？」

と聞いてきたので、ミラハから受け取つたティーカップに口をつけ、口に含むとカップをそつと置いた。

「今朝だ…そしたら…こいつがいやがつた。」

と嫌そうに、はじめを指さした。指を向けられた本人は憮然とこちらを見据える。

「悠呂が見当らんから、どう行つたか聞いたらこいつ知らんとぬかしゃがつた。」

とまたも嫌そうにはじめを見ながら、お茶をすすつた。

その視線を受けてはじめの眉尻がピクピクしている。

その怒りを押さえ込むかのようにお茶をするはじめを、悠呂は苦笑いでやり過ごすと、再び父親に話し掛けた。

「そつ…そつだつたんだ…でつでも、どうしてこひ…」

と悠呂が言いかけた言葉を父親は遮つた。

「その先は、この青頭ツンツンと同じ質問だ。」

「へつ? あつ青頭ツ…ツンツン?」

と父親に聞くと父親はうんうんと頷いた。

「ちよつと! おじさんつ! なんなんですかつ! こいつとか、青頭ツンツンとかつ!」

とはじめが食いつくと浅乃木は、にやりと笑つて。

「んじゅ～いっちゃんのが良かつたあ？」

と茶化すとはじめは赤面して。

「やめて下さい！」

とティーカップを乱暴に置いた。

「えつ？ いつちゃんて？ へつ？」

と悠田が聞くと浅乃木はあるね…と話さうとしたところをはじめが割つて入つた。

「なつなんでもないつ！ なんでもないぞつ！ 悠田…」

と迫り来るはじめの顔に圧倒され…。

「うつうん…。」

としか言いようがなかつた。

「それはさておき…。」

と浅乃木が紅茶をすると、星羅をちらりと見た。

「……気が進まないが、彼女がここにいる以上、話さない訳にはいかないな。」

と静かにカップを置き手を膝の上で組んだ。

第二十九章（後書き）

（一） 佳境に入つてまいりました。完結内容はもう決めてる
んですけど…そこまでいきつく為に、こつからの作業が困難でつ…あ
さぎの苦惱は続く…フルプル

修造は、なかなかはからぬ捜索に苛立ちを募らせていた。唯一信頼するアジョーラーチ村瀬の口から出た言葉。

「何者かに連れ去られた！」

その言葉に驚愕した。その途端に甦る愛しい娘の声。

「お父様…心配なさらないで…私はどこにも行かない…」

あの胸の痛みが再び甦る。

もう一度、あんな思いはしたくない…。そう思い、修造は無意識に記憶の中に入つてゆく。

あの時、娘の亡骸の前にずっと立ちつくしていた。

「…もう、こんな思いは沢山だ…。」

そう決め、娘の亡骸から自慢だった長い髪の一房にハサミを入れた。そして、その髪に縋り誓つた。

「お前を…もう何処にも行かせやしない…。」

そして、修造は医学会から退き研究に没頭した。前から追放だ、なんだと言われ見切りをつけようと想つていたのでその流れにのつた。

そして自分の得たあととあらゆる最新技術を注ぎ、彼女をこの世に蘇らせた。少し、薬等の副作用で髪の色が抜けてしまつたが、生まれたその子はまさしく彼女そのものだつた。途中、テロメアの短さを心配したが自分が得た技術がそれさえも克服した時には、天にも昇る思いだつた。

しかし、その子が成長するにつれ彼女は彼女ではなかつた。姿形は昔のまま、しかし性格等は少しずつ異なつていつた。修造は、それでも良いと思つた。自分が生きている内に彼女が傍にいてさえくれるのならそれで良いと…。

その為にも決して、彼女の出生だけは秘しておかねばならない。彼女の悲しむ顔は見たくない。何より知れば自分から離れていつてしまふかもしれない。修造は他の研究員、警備兵や研究室に出入りするありとあらゆる者に口止めをし、徹底した。

ある時、何処から聞きつけたのか一人の資産家が修造の元を訪れた。何でも先日、大事な一人息子が病で他界したと言つ。その資産家は、藁にも縋る思いで修造を訪ねてきたのだ。

「貴方は、病で亡くなつた娘さんを生き返らせたとか……。」

「…………。」

「どうか、どうか息子を！ 貴方の娘さんの様に生き返えさせて下さい！」

「…………何処から、そんな話を……。」

「…………どうか！ どうかお願いします！」

と資産家の彼は、修造の足元に迫りすがり何度も何度も頭を下げた。

「…………しかし。」

「金なか幾らでも出す！だから……だから……お願いします！……どうか、どうか息子を！」

修造は、自分の愛する娘だけが生き返つてくれるだけでそれで良かった。

しかし、何度も何度も頭を下げる彼の姿に修造は、自分の姿を重ねてしまつ。

「…………わかりました。」

と答えると資産家の男は神でも見たかのような表情をした。

「…………ではっ。」

と言つ言葉を遮り修造は言い放つた。

「ただし、条件があります。」

その言葉に資産家の男は少し笑顔を引いたが、すぐに顔を引き締めた。

「条件？……いいだろう。なんだね？その条件とは？」

と言つ資産家の視線から修造は背を向けた。

「…貴方は、私が今どういう立場か…ご存知ですか？」

と言つ問いに、資産家の男は

「わかつてゐるとも」

と答えた。

「…そうですか。それならば話が早い…貴方にも私の片棒を担いで
いただきたい。」

「……それは…？」

「わつ……」この研究の資金…いやつ支援していただきたい。
と言つとじばらく資産家の男は黙つたが

「…わかつた、良かる。支援させていただきつ。」

「…交渉…成立でよろしくですね？」

「ああ…。」

それから修造は、その資産家の後ろ盾を得て更なる高みへと研究を
続けていった。

しかし、その頃から娘の様子がおかしくなつた。

いつも悲しそうな顔で、自分の研究を見つめるようになつたのだ。
まさかと思い、誰かが話したのかと皆に問い合わせると、誰も話して
いないという。もしかすると、彼女は自分の出生の秘密を薄々感づ
いているのではないかと思うよになつた。そして、彼女は夜に
徘徊するようになつて修造は益々焦つていた。

しかし、フリフリと亡靈の様に出歩くが朝になれば必ず自分の元に
帰つてくる事に安堵した……。

しかし、今回は違つ血ら出て行つたのではない。誰かに連れ去られ
たのだ。修造は胸を引きちぎられる思いで、アジョラー・チ村瀬の報
告をまたた。

第三十章（後書き）

（Ｔ－Ｔ） 全体の描写を考え、この小説の更なる高みへ……私は
……私は……。

まだ薄暗い早朝、星羅は悠田宅の玄関前に出た。冷たい風に息をはけばまだ白く流れる…もう春だというのに。

階段状になる玄関の先に星羅は腰を下ろし、白銀の長い髪をそよがせ夜明け前の薄紫色の空を見上げた。

「……おはよー。早いね。」

と声を掛けられ、星羅はビックリして振り返った。

そこに立っていたのは焦げ茶色の小さじブランケットにくるまつて寒そうにしている黒髪の似合の少年だった。

その少年は、優しい笑顔を向けると傍に寄ってきて自分の横を指さすとこう聞いてきた。

「……座つていいかな?」

「……うん。」

と応えるとその少年はフワツと自分の横に座つた。

「まだ、このくらいの時間帯だと寒いねえ。」

とその少年は腕を寒そうにすると、じりじりを見た。

「君は、寒くない?」

と聞いてきたので、

「少し……。」

と言つて体をさすつてみると自分でも驚く程冷たかった。

「あつ…ちょっと待つてもう一枚、ブランケット取つてくるよ。」

と彼はまたフワリと立ち上がった。何故か彼が自分から離れてしまうことに、少し不安をおぼえて気が付くと彼の手を取つて首を横に振つていた。

（行かないで…。）

の意味だと思う。しかし、彼の笑顔は私が遠慮しているのだと思つてゐる。

「……じゃあ、はいっ。」

と彼は自分のくるまつていたブランケットを渡してくれた。

「……えつ、でもっあなたが……。」

と黙りと彼は笑つて

「いいよ。」

と黙りと再び横にフワリと座つた。

すると、一瞬を見つめたまま話始めた。

「昨日は……僕、びっくりしちゃつた。」

「えつ？」

と彼を見ると彼はクスリと笑つて……。

「父さんの話……僕、父さんは普通の職業で母さんと一緒に新星開拓に行つたんだとばかり思つてた……ふふつ。それがいきなり帰つてきて、秘密警察だつて言われても普通信じないよね？」

と彼は幸せそうに笑つた。そんな幸せそうな横顔が見たくなくて視線を逸らした。

「……それが……君のお父さんを監視する為だつたなんて……。」

と彼の言葉が途切れたので再び横顔に視線を向けると、彼の顔は悲しそうだつた。その悲しい横顔が自分の今までの悲しさと重なつて、胸が重くて痛くて苦しく耐えられなくなつて俯いてしまつた。

「……どうしたの？……まだ、寒い？」

と彼は覗き込んでくる。私は無言で首を振つた。そして、顔を上げて彼の顔を真正面から見た。

(この際、すべて……すべて話してしまつたら……楽になるかもしけない……。)

目の前の彼はキヨトンとしている。

(でも……でも、こんな事この人に話したつて……。)

「あのつ……寒いなら、中に入つた方が……。」

「……今……から話す事、誰にも言わないで……。」

「えつ？」

と問い合わせる彼を無視して私は、話し出す。

「……私は……もしかしたら、ここにいてはいけない存在かも知れない……」

「…………それは。」

また問い合わせのを無視して先を続ける。お願い、全て話させて……お願い。

「私は……私は……」

声が震える。認めたくなくてずっと言葉にしなかった言葉。

「クローンかも知れない……！」

「えつ…………？」

彼は驚きの声を上げたがそれ以上は何も言わなかつた。

『自分はクローンかも知れない。』

誰にも言えなかつた事を言えて安心してしまつたのか、怖かつたのかたちまち震えが立ち上つてきて目頭が熱くなつてくる。見られたくなくて俯いた。

そんな私を彼は黙つて見てる。恐らく驚きと、そんな事を告白されて困惑しているのかも……。でも、彼は違つた。

「…………大丈夫？」

その優しい声が信じられなくて、顔を上げたら目に溜めて隠してたものが溢れた。そんな私の顔に彼は心底びっくりした顔をしていたと思つ。何故なら私は彼の胸に縋つて泣いていたから。

（――：）新事実発覚！！なつなんどつ－悠呂くんの髪の色は
バリバリアジア系の黒髪なんですねえ～彼はノーマルジャパニーズ
種なんですねえ～ええ～本編で解説できないつけをここで払つてお
ります…ええ～はじめくんはですねえ～この物語では一般種の三種
混合種となつてます。日本人+アメリカ人（外国人全般）+火星人
なんですねえ～。星羅ちゃんの白銀は珍しいのです。まつ副作用だ
しね。以上あさぎでした。

「自分はクローンかもしれない。」

と田の前の彼女は涙を零した。悠呂は、一瞬何の話なのか意味を捉え兼ねていた。

それに、ついて出た自分の言葉が…。

「大丈夫？」

ほとんど無意識に出た言葉だつた……。そして、彼女は今自分の胸で泣いている。

突然の出来事過ぎて悠呂の頭は収集がつかず混乱していた。自分の胸で泣きじゃくる彼女の長い髪に茫然としながら触れそこではっと我に返り慌てて、彼女を自分からそっと離した。

「あつ…あのつ…そのつ…まだつ時間も早いし、もう少し寝てた方がいいよつ。」

と言つと彼女は小さく頷いた。

そんな彼女に手を貸して立たせると、ゆっくりした足取りで客人用の寝室へ連れて行つてあげる。

彼女の手は冷えきつて氷の様に冷たかった。その冷たさが彼女の悲しみも語つてこようで悠呂は何だか胸が痛かつた。

彼女を寝かしつけ、ひとつ溜め息をつくとリビングに行きソファーにドサリと腰を下ろした。

『私は、ここにいってはいけない存在かもしれない。』

彼女の悲しそうな、何かをこらえているかのような震える声が耳に蘇る。

悠呂は、狂乱したように髪をグシャグシャ搔き巡るとそのまま頭を抱えてうなだれた。そこへ、間抜けなあぐびの声がして悠呂は顔を上げた。

振り向くと、腹をボリボリ搔きながら寝ぐせのバッヂリついた父親が立っていた。頭をワシワシと搔くと悠斗の傍のいつものソファーに腰を下ろした。

「おっ…おはよー…父さん。」
と挨拶をすると、皿をシヨボシヨボさせてやつと息子の存在に気づき一カツと笑うと、

「おお～おはよー悠ちゃんは早起きだなあ～あははっ。」
と返すとすかさず、

「ミラハちゃんあ～ん～お茶あ～！」

とキッキンに声を掛けた。

「お前も飲むだろ？」
と聞いてきたので頷いた。

ミラハが一人分のお茶を用意してくれる。その様子を悠斗はじっと見ていた。ひとつのかップが父親に手渡され、自分にも手渡された。その温かいカップを手で覆うとぬくもりが染みてくる。カップの中の黄金色の紅茶が自分の姿を映している。それをひとくち口に含むと、紅茶の芳香が鼻を通る。

その香りが、気分を落ち着かせてくれる。悠斗は紅茶の色をじっと見ながら父親に質問してみた。

「父さん…この世に人のクローンって存在すると思つ？」

父親は静かに紅茶を飲みながら

「どうしてそんな質問を？」
と逆に聞いてきた。

「いやつ…別に…。」

とカップを揺すり、チャプチャプとカップの中で揺れる紅茶を眺めていた。

そんな悠斗に父親はちらりと視線を向け先程と違った声色で

「人間のクローンを作ることは、禁止されている。これは、この何千年前かの経験があつての事だ…そんな事はあつてはならない。」

そう言い切る父親に無言で返し、立ち上ると自室に下がり服に着替え外出の準備をすると再びリビングに戻った。

その様子を父親は、不信に思い声を掛けた。

「おいつ…どこに行くんだ?」

と聞かれ、悠呂は背を向けたまま

「今日、はじめくんと約束があるんだ。」

「約束?」

「そう、今日ははじめくんのコラルロッドが修理から戻ってくるから

…。」

と準備を進める。

父親は、顔をしかめたが

「…。」

と行ってコースを見始めた。

コースを告げるキャスターの声を背で聞きながら、悠呂はコラルロッドの鍵を握り決意すると地下へと勢いよく向かった。地下に着くと、コラルロッドに鍵を差し入れ、エネルギータンクは充分か画面に出し、次にライトを点けたり消したりして点検、次にコラルロッドに跨り浮上ボタンに切り替え、足元のペダルを出すと少し踏んで浮き上がるか確認する。一通り点検を終えると、悠呂は顔を引き締め、アクセスを回し地下駐輪場から飛び出して行った。

（Ｔ－Ｔ）長らくお待たせ致しました。なんとなくスランプ気味での文章ですので、面白味に欠けると思われますが、どうか完結まで末永くお付き合い願いたいと思います。…愁真あさぎより

地下から飛び出したものの、何やら視線を感じて後ろを見てみると父親が玄関に立ちじりじりを見ているのに気がついた。

「……！」

悠斗はそのまま禁止区域に向かう道を止め、はじめの自宅に向かう直線の道をそのまま走らせた。

ある程度コラルロッドを走らせ、自宅が見えなくなつた辺りで一度止めて自分の自宅にある方向を振り返つた。

「ふう～…びっくりしたあ～。……あ～これからどうしようかな…また道に戻るのもなんだし…。」

とはじめの自宅のある方向を見て閃いた……が少し、顔を曇らせた。

「……あんまり、気が進まないけど……これしかないかな…。」

そう呟くとコラルロッドのアクセルを回し、いつも遅刻ギリギリのはじめが見つけたと言つ中学校への近道を使ってみることにする。

しかし、毎回自慢の様に聞かされたその“近道”とやらは“道にして道にあらず”だった……。

最初に曲がった先はいきなり他人の家の前で。

「うつうわっ！」

そこ地下駐車場のような場所を通り、教えられたとおりにそこを突き当たりにはぼっかり穴があいていて、その穴に入ると。

「うつうわわっ！なんだよつ！こじつ…」

入った穴は真っ暗な隧道、そこをひたすら走り明かりが見えてきたと思つたら。

「ふう～やつと……でぐつ……ん？」

何やうりぼんやり鼠色の巨大な物が迫つて見えて、それがどこかの地下まである建物の壁である事に気づき。

「あわわわっ……。」

慌てて浮上ペダルに切り替え、浮上する。

浮上したそこは、またまたどこかの家の玄関先で、今度は教えられた通りその家の脇にある民家と民家の間、コラルロッドを斜めにしないと入れないような細い道を渋々に入り、延々と続く民家の裏道を走つて、気味が悪いピンクの蛍光色の家を発見する。

「……あんまり、とやかく言えた義理ぢやないけど……この色……一体どうやって出したんだろ……ある意味興味深い……。」

その家を左へ曲がると、静寂しきっていた民家の立ち並ぶ裏道に騒々しい音が蘇つてくる。しばらく先へ進むとその音が更に大きくなり、見覚えのある禁止区域の前を通る通学路の大通りに出た。そして、ゆっくりコラルロッドを止めて先程自分が来た道を振り返る。

「……たぶん、僕……一度とこの道は使わないと思つ……。」と大仰に顔をしかめた。

禁止区域付近に着くと、近くにある建物の側にコラルロッドのスイッチを切つて止め、壁を背にそっと様子を窺つてみた。まだ、朝方だというのにかなりの数の警備兵が警備にあたつている。

悠吾は、正門辺りに視線を向けてみる。

正門の辺りの警備兵は肩からライフル型ショックガンを下げていた。

それを見て生唾を飲み込んだ。

そして、そのまま正門から視線をゆっくりと動かし、前に一度星羅に囲われたことがある隠し通路だらう場所のあるフェンスの辺りを見てみる。その辺りにも同じように肩からライフル型ショックガンを下げた警備兵が2、3人ウロウロしている。どうしたものかと、

辺りを見回していると一人の警備兵がこちらを見た気がしたので、慌てて顔を引っ込めた。

ドキドキが止まらない。口から心臓が出てきそうな感じだ。数十秒待ち、大きく深呼吸をしてから再び壁を背に様子を伺い見てみると辺りを警戒しながら一人の兵士がその場を離れ、別の場所へ歩いていく。そこで、悠呂はふと気づいた。しかし、それに確信が持てなかつたのでしばらく様子を見てみる。

間違いない。一定の間、あの3人が辺りの見回りの為にあの場所が手薄になる事がある。そう確信した悠呂はその機会を待つた。

一人の兵士が辺りを慎重に見回りし、その場を離れて行く。しめたつと思い他に人がいないか確認すると一気に飛び出し、素早くフェンスの一つに触れ禁止区域内に入り、きつちりフェンスを閉め草が生い茂るところへ駆け、身を屈めて再度辺りを確認した所で一人の兵士がまたこちらに歩いてくるのが見えた。危機一髪だつた。

それをやり過ごし、素早く芝生の一つに手を差し入れ、蓋型の扉を探し当てて速やかに潜入した。

蓋型の扉を閉めると、下に続く階段の一つにペタンと座り込んでしまつた。潜入に成功した安心からか急にカタカタと震えが立ち始める。悠呂の鼓動はまだ激しく治まらない。ブルブル震える自分の両手を見てみる。緊張？いやつ高揚感？そんな問いに自嘲を漏らし、震えるその手で顔を覆つた。

（。A。。；）携帯では何文字書けるか不明なので初めて1800文字、打つてみました。途中で切れたりしてたらごめんなさい。本文はですね、毎回有り難い事に読者の方の寄せていただいておりますメッセージから「主人公、もっと頑張れ！」と言ったお言葉をもらいまして、悠呂くんを今回は採用したわけであります。はい、最終章まで細々とですが、頑張っていきますので皆様、よろしくお願い致します。

はじめが既そつに歯を磨いていたと、母親が後ろで何か呟んでいた。寝起きのぼおとした頭では良く聞こえないが、匕つや匕分を呼んでいた。ひつた。

「はんはほお～（なんだよお～）」

と返事をすると、母親の声がハッキリ聞こえてきた。「はじめ～聞こえたの？誰か来たみたいだから、ちよつと出でようだい。」

「はんへほれは…（なんで俺が…）」

「今、ちよつと手が放せないのよつーお願いつー！」

とこう返答が返ってきた。匕つせまた、撮り溜めしたメロドラマか何かを見ているのだね…。いつなると母親はテロでも動かない。

「はあ～…。」

仕方なくうがいをしてタオルで口を拭いながら、かじりつくよつてテレビを見る母親の居るリビングを通り、テレビモニターで誰か確認もせず直接玄関の開閉ボタンを乱暴に押し、対応に出た。

「はこはいっじぢらさん？」

と少し苛つきながら玄関に出て、そこには作業服を身に纏つた青年が爽やかに笑んで立っていた。

「何？」

と聞くとその青年は顔色一つ変えず、笑顔のまま帽子を取りペコりとお辞儀をすると

「お早う御座います！此方、スレッド・桐矢様のお宅で間違こいざ

いませんでしようか？」

と聞いてくるので、

「ん？…ああ、そうだけど？」

と答えると田の前の青年は、更に鬱陶しいほど爽やかな笑顔を向け

「私、ルンゲ修理工の配達専用ロボット、ビスラチョと申します。修理の依頼を承つておりました、コラルロッドが今日出来上がりましたのでお届けに参りました！」

と更に更に営業スマイル。はじめはその精巧過ぎるロボットの笑顔に少し引きながら

「はつ…早いな。」

と一言。それを聞いでのいか聞いていないのか、田の前の青年ロボットは笑顔のまま

「受け取りにサインを！」

と言つて右股の側面をパカリと開け、指紋照合機を取り出しあじめの前へ。

引きつった笑顔でそれに対応、右親指を照合機に当てた。

照合機が照合完了の音を出すと車（ここでは今現在の車と異なる）に積んできたコラルロッドをおろし、どこがどう駄目でどう修理をしたのか簡単に説明をしてくれた。そして、一通り説明し終えると速やかに帰つて行つた。はじめはそのロボットの車を見送つた後、修理から却つててきたコラルロッドを車庫に入れ、自分は家の中に戻つた。

家に入ると、テレビを見ていた母親が

「誰だつたの？」

と聞いてきたので自分の部屋に向かいながら

「修理屋。」

とぶつきりぼうに告げ、そのまま自分の部屋に入った。そして、服

に着替えて隣の部屋を覗いてみる。しかし、弟のいる気配がしないのでリビングにいる母親に

「母ちゃん！ ゆきるはあ？」

と大声で聞いてみる。すると母親は同じように大声で

「今朝、『デート』とか言つて早くに出て行つたわよ～！」

「ああ～ん？ デートだあ～？ あいつ何様だよ～！ 兄貴を差し置いて彼女を作るなんざあふてえ野郎だつ～！」

と弟の部屋の扉を蹴つた。

はじめはつまらなそうにリビングのソファーの一つに腰をおろすと、母親の小言が飛ぶ。

「ひひひ～～ドアを蹴るんじやないよ～～まだローンが残つてんだからひ～～」

「はこはい～～」

と小言を聞くのも嫌で立ち上がり、逃げるよつに外に出た。しばらく玄関先でぼお～としたがつまらず車庫に向つて、ピカピカに直つたコラルロッドが目に入り、色々検分する。それでもすぐに飽きてどうしようかとコラルロッドに跨つたままぼお～としているところ。

「～～」

コラルロッドのスイッチを入れるとそのまま車庫から出て悠斗の自宅方面へ行く。

悠斗の自宅前に着き、ルンルン気分でコラルロッドから降つると玄関にある呼び出しボタンを押した。すると、対応もなくすぐに扉が開いた。

「？」

応対に出てきたのは悠斗でもなく、ミリハでもなくましてや父親でもなかつた。白銀の髪に線の細い体の少女… そう星羅だつた。はじめは、一瞬びっくりしたがすぐに氣を取り直し、

「よつ… よお～！」

とぎれりちなく挨拶をすると、田の前の彼女は不思議そつに首を傾げ

た。

「悠呂、いるか？」

と構わず聞くと星羅は目を丸くした。はじめはその意味がわからなくて

「うえつ？ いないのか？」

と聞くと彼女はコクンと頷いた。

「どこ、行つた？」

と聞くと彼女は、首を横に振つた。はじめは何だか嫌な予感がした。そこで2人固まつていると、星羅の後ろから間抜けな声が掛かつた。

「星羅ちゃん、誰だい？」

と聞きながら、悠呂の父親が現れた。玄関まで来た父親もはじめの姿を見て、驚いたがすぐに顔をしかめた。それで、はじめは悟つた

…また何かあつたと…。

第三十四章（後書き）

（＝^_^＝）何だか、ポンポンとストーリーが頭の中に出てきたので迷わず書きました まだまだ、湯水のように湧いてくるので今内にじやんじやん書きまくります

「おじさんっ！ 悠呂がいなにって？ ビーいつたんすかっ！」

とはじめは悠呂の父親に聞いただした。悠呂の父親は、額に手を当て仕方のない奴だと言わんばかりに溜め息をついた。この様子じや自分 の予想が当たる… みぞおちの辺りがキュウと苦しくなつた。

父親は、指の間からチラリと皿をこちらにやり話してくれた。

「今朝早く、お前のところへ行くと出て行つた… しかし、少し様子がおかしかつたんだあいつが出て行く姿を玄関で見送つた…。」

「おっ俺んちに？… おじさんっ 確かに俺んちに向かつたの見たのかよつ！」

「ああ… 確かに真っ直ぐ、お前の家に向かう道へ行つた。」

「んじやつ… なんで来なかつたんだよつ… いやつ待てよ… もしかして…。」

と言つとはじめは口を閉ざし顎に手を当てた。考え方ことを始めたはじめを見て悠呂の父親は、腕時計型テレビモニターをいじりながら部屋の隅へ歩いて行つた。

（あいつ… もしかして、あの道を…。）

と考えていろと

「ああ。俺だ… あいつを頼む。」

と言つ声がして顔を上げた。何やら話す悠呂の父親の後ろ姿を見て、星羅の方へ目を戻すと彼女は青い顔をして自分と同じよつた父親の様子を見ていた。そしてはじめは、自分の足元に皿を落し堅く両拳を握つた。悠呂に腹を立てていた。初めに禁止区域を探ると言つた時、最後まで自分も付き合つと言つたのに… また何も言わずに知らせずに一人で危険なところへ行つた… また置いて行かれたその事に腹が立つた。せめて一言いつて欲しかつた…。

そんな思いを巡らせて いると、奥から悠呂の父親が怒鳴る声がした。

「そんなこたあわかつて いるつ…！… だから言つてんだよつ！

と怒鳴る悠田の父親の様子を見て今すぐビリビリ出来る雰囲気ではないと悟った。

はじめは、また足元をしばらく見つめ、次に自分の乗つて来たコラルロッドに目を移すと顔をしかめた。まだ何事か言い争っている悠田の父親を見て、きびすを返すと迷わずコラルロッドに跨つた。スイッチを入れようとした時、後ろに誰かが乗る振動がして振り向くと星羅が乗つていた。

「……おいつ。

と言つと彼女は強い眼差しを向けて

「私も行く。」

と願い出た。

「……でも、おまえつ……。」

「お願い！……」になつたのも私が原因のひとつなんだものつ……。と更に強い眼差しで言つてくるので、はじめは

「……わかつた。」

と前を向くとスイッチを入れた。

「しつかり掴まつてろよ……俺は悠田みたいに安全運転じやねえからなつ！」

とアクセスを回した。

「あいつ……それはわかつてない。しかし、今を逃すと……。」

と悠田の父親が話していると、どこからかコラルロッドの機械音がした。

「……まさかつ！』

悠田の父親は慌てて玄関に出ると

はじめが後ろに星羅を乗せ、今にもコラルロッドを発進させよつと浮上しかけていた。悠田の父親は慌てて飛び出つ

「おこつ……待て！』

と手を伸ばしたが、間に合わず二人を乗せたコラルロッドは浮上す

ると、凄いスピードで走つて行つてしまつた。

それを茫然と見送つてゐる悠呂の父親の右腕から声がする。

「先輩！先輩！どうしたんですか！先輩！」

それに気づいた悠呂の父親はゆっくり右手を上げ、その中の人物を見るとふつと笑つた。

「つたく…お前の従兄弟も俺の息子も、血の氣が多いつつかへなんつうか。」

「へつ？」

とテレビモニターの中の人物が問い合わせ返すと悠呂の父親は息を吐き「はあ…お前の後輩潜入員に伝えろ！俺達の可愛い潜入員が三名追加されたつてなつ…。」

と言つと通信を切り、再びテレビモニターの通信を繋げた。しかし、テレビモニターに映つた人物は先ほどの青年ではなく威厳のありそうな禿頭の中年男性だつた。

（・・・）え～最終話に向けて内容を詰めていっております。しかし、そんなに上手くまとまるかが心配です。一体、何章で終わるんでしょうか：作者ながら謎。（。A。：）って言つかさつき飛行機に電波もつていがれて、ここ打ち込んでいる最中に画面が真っ暗になつて超おびびつた！（Ｔ－Ｔ）全部書き直さなきゃならないかもと焦つた焦つた…飛行機、乗らなくて恐るべし…。

画面に現れた禿頭の男性は、じぱりへりぱりに気付く様子もなく誰かと会話中だった。それに構わず悠畠の父、浅乃木は画面に向かって声を掛けた。

「お早う御座います！澤田課長！」

その挨拶にやつと画面が繋がつている事に気付いたら顔を向けた澤田は

『何だ』と言わんばかりの不機嫌な表情をした。そしてこちらに近づくと表情を一変させる。

「お～君かあ！久しぶりじゃないか？もう何年になる？」と破顔する。それに浅乃木は嘘臭い笑顔を作ると

「かれこれ、4、5年半ぶりって感じでしょうか。」

と応えた。すると澤田は柔和な顔で

「そうかそうか」

と頷き続けて質問をしてきた。

「それで、柚比と悠畠は元気にしてたかね？もう会ったんだろう？」と聞いてくる。それに浅乃木は内心苛々しながら、再び笑顔で

「はい…悠畠とは。」

と応えると澤田は顔を曇らせ

「柚比とは会つておらんのか？」

と残念そうな声を出した。

その質問に顔を引きつらせながら、浅乃木は

「ははは」

と笑うと、頭を搔きながら

「嫌ですなあ～上の息子は課長の御命令で、他星の潜入隊員に任命されですっ飛ばされたままでよお～会えるわきやありません。」

と言つと

「やうだつたか」

と澤田は笑う。

「そんな事より……。」

と浅乃木は顔を引き締めると、澤田も笑顔を引いた。

「私が長年、調査していた件でありますが……。」

と浅乃木が話し始めると澤田は黙つて話を聞き始めた。

「アスラビ・尾崎 修造の裏が取れました。」

と浅乃木が切り出すと明らかに澤田の表情が変わった。

「それは本当か？」

「はいっ……確かに。尾崎に支援していた資産家達の足取りも掴め、その内の一人をつづいてやつた所自供しました。」

と話すと澤田は顔の力を込めたまま笑った。

「やつとか……なかなか尻尾をつかませなかつたあの男……。長かつたな……。」

と咳くと、澤田は浅乃木を見た。

浅乃木は難しい顔をしたまま続ける。

「それで、そのアスラビ・尾崎の研究所にこの数年に渡り、数名の潜入隊を警備兵に紛れ込ませスレッド・桐矢が動向を探らせております。」

「うむ。それは報告を受けてある。」

少し、浅乃木は報告を躊躇した。

「じつ……実は……非常にお話し辛いのですが……。」

「？」

「その研究所に、今朝……その……。」

「ん? どうした?」

と聞かれ、再び頭を搔きながら浅乃木は

「うちの息子と、桐矢の従兄弟、それに尾崎の娘が勝手に潜入した模様です。」

とあつけらかんと告げた。その内容に澤田は一瞬ボカンとしたがす

ぐさま卓を叩き

「なつなつ…なんだとつ…！」

と大声を上げた。

「それでですねえ、刑事課からの応援要請をとお願いしたく……。

とこれもまたあっけらかんと浅乃木は話す。

それに対し、澤田は顔を真っ赤に震えていたがすぐに溜め息をつき、ドカリと椅子に腰掛けた。

浅乃木は応援要請の答えをしばらく待つた。当の本人は顎に手を当て渋い顔で何やら考え込んでしまっている。数分後、澤田は口を開いた。

「一応…上に掛け合つてみてやるが、あまり期待するなよ…。」
と言つと浅乃木は、眼鏡をクイッと人差し指で上げるとニヤリと笑つた。

「ええ。それで十分ですよ…課長、それでは？」

と聞き返すと澤田は強く頷いて

「いよいよか…あの男を追つて一十数年…時効というものが改正されていて良かつた…ふふつ。そちらの件は令状を申請しといてやる。失敗のないようにしてくれ…。」

そう言つと画面は切れた。浅乃木はすぐさままたどこかへ画面を繋げた。

繋がつた先は、再び諜報課。画面に出てきた受付の女性は浅乃木を見てすぐにわかつたのか何も言わずとも青髪の青年に画面を変えてくれた。

はじめの従兄弟、清は驚いた表情のまま現れた。

「はいっ…先輩、今度はなんすか？」

と聞くが当の浅乃木はニヤリと笑つただけで何も言わない。それに清は訝しんでいると

「桐矢警部補！」

と後ろで受付の女性が呼ぶ声がした。

振り向くと、彼女は電話がきていたりジェスチャーをした。清はそ

れに頷くと、再び真正面に向き直り浅乃木に話しかけた。

「先輩、すみません。なんか俺に電話が入ったみたいで…あのつ繋げたままちょっと待つてもらえますか?すぐに戻ってきますんで…。」

といふとすぐさま席を立ち、画面から姿がなくなると椅子だけがグラグラと揺れているのが映つている。

ニヤリと笑つたまま浅乃木が待つていると血相を変えて、清は画面に現れた。

「せつ先輩!たつ逮捕状がつ逮捕状がつ…。」

「清、落ち着いて話せ。」

と浅乃木が言つてやると、清は自分のデスクに置いてある茶を一気に飲み干し、深呼吸した。

「先程、課長から連絡がありまして…。」

「うん。」

「アスラビ・尾崎 修造の逮捕状の申請が、今し方受理されたそうです。」

と聞き終えると、浅乃木はふつと笑つた。

「ふうん。だそうだ清。」

「せつ先輩知つてたんすか?」

「さあ~どうだかな。」

「先輩!」

と言いかけたのを遮つて浅乃木は訊く。

「その他の事はなんか言つてなかつたか?」

と言つと清はぶすっとした顔をしながら

「いいえ、特には。

「そつか…まつまだ早いか…。」

と言つと浅乃木は面白そうに口端を上げて笑つた。

清はその表情に呆れて溜め息をつくと、

「それで…課長が作戦についてのまとめを資料にして送れつてこと

なんで…。」「

と切り出すと浅乃木は

「わかった。ほんじゃあ俺もそっち行くわ。」

と画面を切ると、そのまま地下駐車場に置いてある車に乗り込んだ。

（・・・）え～長～くお待たせいたしました。読者様、あけまして
おめでとうございます。（<A>；）年末にインフルエンザA型な
るものにかかりまして、正月早々寝込んでおりました。（。A。；
）恐るべしインフルエンザ～皆さんも気を付けて下さいまし！
（＝^_^＝）本文の方はラストに向けて話を徐々に詰めているつ
もりです。皆様最後までお付き合いくださこませ

悠呂は気分を落ち着かせると、階段を降りきり人が1人入れるか位の幅の鉄扉の前に立つた。

ボンヤリ光る間接照明に照らされたその扉は、鉛色をむき出しに冷たい印象を与えた。

「？」

自動扉だとはがりに思つていた悠呂はなかなか開く様子のない扉を不思議に思つた。自動扉ではないのならと扉横左右を見回してボタンらしき物を探してみたが見あたらず、仕方ないので冷たい鉄扉のあちこちを触つてみた。右側の辺りに丸い窪みを見つけ

「何だろ？？」

と手を中に入れてみると、半円形の突起物が中にしまつてあつたのでそれを窪みから立ててみた。しかし、扉は開く様子もなくどうしたものかと力チャ力チャと弄つていると、何かの拍子に扉は音を立てて少し開いた。

悠呂はドキドキしながら扉の隙間を覗いてみた。中はこの場所同様にぼお～と光つている紫色の蛍光灯が等間隔に天井に並んでいて、細長い廊下を照らしている。その不気味さに気後れしそうになる気持ちを何とか奮い立たせて扉を手前に開けてやると、ギィーと嫌な音を立てた。

恐る恐る中に入ると、一層不気味さが増す。取つ手から手を離し身震いしていると後ろで勢い良く扉がバタンと閉まつた。

「うひ～うわあ～！」

驚いて尻餅をついてしまつた。

閉まりきつた扉を見て悠呂は溜め息をついた。

「はあ～なんだ…扉の閉まる音だったのかあ～。いつもは自動扉だから…扉が閉まるところな音を出すなんて…知らなかつた…。」

そう言つと、悠呂は座つたまま改めて周りを見回してみた。

天井には不気味な色の蛍光灯、左右は圧迫感のあるコンクリート打ちっぱなしの壁、周りは静かで耳の奥がキーンと鳴つている。扉側に向いている体を捻り、後ろを見ると同じまで続いているのが細長い廊下がある。

悠呂は深い溜息をつくと体を正面に戻し、体育座りをしてその膝に顔を埋めた。この何も聞こえない空間が、改めて自分の行動の意義を問う。

（僕は……なんでここにいるのかな？こんな危険な怖い思いまでして……？スリルを味わいたいだけ？それとも興味から？……一体何してんの？……後悔……してるのかな？僕……。）

『……私は……もしかしたら、ここについてはいけない存在かもしれない。』

悠呂は、ハッと顔を上げた。

『私は……私は……クローンかもしない！』涙をこらえ震える声で自分に話した星羅の顔と声が脳裏によぎった。自分の存在があつてはならない物だと……苦しんできた彼女……。

悠呂は勢い良く立ち上ると迷いもなく、細長い廊下の奥を目標に歩き出した。

（……僕は……僕は何を弱気になつていたんだ……家を出る前に……決心したんだ！あいつに……アスラビ尾崎に、一言いつてやるんだって！そう決めたんだ！）

悠呂は堅く拳を握つた。

細長い廊下はどこまでも続いていて、ようやく突き当たりに辿り着くと先程と同じような扉が現れた。今度の扉はボタン式のようで扉の横の壁にちゃんと操作ボタンがあつた。

今まで誰にも見つからなかつたが、次はどうなるかわからないので

一応扉に耳を当て中の様子を窺つてみる。何も音がしないので、壁に身を隠しながら開閉ボタンを押した。そして、壁に背をつけながらそーと中を覗いてみる。色々な所に目を向けてそこがどうやら何かの倉庫だと分かつた。

その証拠に、大きな鉄性だろうか？棚に荷物が一杯積んである。誰もいない事を確認して中に入つてみると、意外に中は奥行きが深く広かつた。悠呂は高い天井を見上げながら、一步一歩と奥に進んでみる。途中で何かツンとするような匂いがしきた。

「…消毒液？…なんだろう？薬品の匂いがする…。」

とりあえず、匂いのものを探し棚に積んである荷物の一つに目をやつた。

その荷物にはラベルが貼つてあり、理科の実験で使つた事があるようないよな薬品の名前が書いてあつた。

「…これは…もしかしたら、クローランに使つ薬品なんだろうか？」そう呟くと、大きな鉄製の棚に同じような荷物が整然と並ぶさまを見上げて、背筋をゾッとさせた。

何だから気持ち悪くなつて早くここから出ようと出口を探していると、ボソボソと何やら話す人の声がして慌てて手近にある大きな荷物の陰に隠れると、すぐに足音が2つこちらに近づいて来る音がする。悠呂は、ドキドキしながら近づいてくる足音に気付かれぬよう息を潜めた。

（・・・）え〜…一応書く」とはまとめてノートに『こんなん』で書いてやつておるんですけど…書き込みになりますといわゆる清書つてやつなんで、ノートに書いたものとは多少変わつてきます。ノートではこうかいてあるが書き込みはより読みやすくとか、分かりやすく説明加えつとかやつてネチネチやつてる内にま〜これが飽きてくるんですね〜笑それで手を休めてテレビなんかつけてしまつて、見入つてしまつと手をつけずにズルズルと今日に至るわけです…計二日つて感じです…はい…すみません汗これからも宜しくお願ひします！

悠呂が身動きせずに潜んでいると、話し声が段々ハツキリと聞こえる位置まで近付いて二つの足音は止まつた。

「おいつ…聞いたか？」

「何を？」

「星羅お嬢様の話だよ。」

「ああ～あれだろ？なんかいつもの夢遊病じやなくて連れ去られたやつ…。」

「そうそれ。なんかあ～警備兵の話を聞いたやつたんだけど、連れ去つた奴つてまだ子供だつたらしいぜ？」

「はつ？何だよそれ？」「まあ～ちょこちょこつと聞いた話しなんだけどやつ。なんかまだ少年で…ほらつなんつたか…通学に使うバイク…ほらつ…えつと…あれあれ。」

「口ラルロツドつてやつか？」

「そうそう～それそれつ～それで、なんか後ろに星羅お嬢様乗つけて逃げたらしいよ。」

「ふ～ん…。」

と話す内容から、この建物の中では星羅の事は連れ去り事件になつてゐるようだ…。悠呂はその話に少し焦つた。そんな話になつてゐるとは予想外だつた。

悠呂は呼吸を整えて一人に気付かれぬよう、そあ～と様子を見てみる。

そこには短めの白衣、（よく歯医者さんとか着てゐるような物）に下は黒いズボンといった格好からどうやらこの研究員のようだ。一人の眼鏡を掛けた男性は、話しの続きをしながら鉄製の棚に並ぶ荷物のラベルを上から順に探すような仕草をしている。もう一人の

茶髪で細身の男性は、手近にある荷物の箱を開け、中から何やら液体の入った瓶を二つ三つと取り出していた。

探し物をしていた眼鏡の男性は田舎での荷物が見つかったのか

「あつた」

と呴いて棚から箱ごと重そうに取り出すと、体を揺すって持ちやすいように抱え直し向きを変えて歩き出した。

それを見た茶髪で細身の男性は、瓶を一、二個脇に挟むと更に箱から一個、瓶を取り出し蓋を閉めて眼鏡の男性に続いた。

その茶髪で細身の男性が

「あつそうそう。」

と切り出した。

「なんでもアスラビ・尾崎所長、かなり立腹らしいぜ？」

そう聞いた眼鏡の男性は荷物を抱えたまま振り向いて

「そりゃそりゃうなあ～かなり娘に入れ込んでるものな。」

「それだけじゃなさそうだぜ？あの敏腕なアジュラーチ隊長がその子供を取り逃がしたってんでかなり時間が掛かることにもお怒りみたいだぜ？」

「うへえ～うえ～うえ～。こちにもとばっかり来なきゃいいけどなつ。」

そんな話をしながら一人は出口だらう方へ歩いていく。もう少し詳しく内容を聞いてみたいが、遠のいていく一人の声は小さくなつていく為、諦めるしかなかつた。悠呂は、二人が歩いて行つただらう方向に目をやり、少し身を乗り出して一人の背中を見つける。そして歩く先に更に目をやり、出口の場所を確認した。

その直後、出口だらう場所から光が漏れていのが何かに遮られた。

「？」

と思つてゐるとその遮つた影が

「大変だつ！～！」

と大きな声を上げた。それに驚いた悠呂は、物音を立てそうになつたが慌てて荷物の陰に身を隠した。

荷物をもつた一人が

「どうした？」

とか

「何があつたのか？」

と口々に大声を立てたのが聞こえた。

（侵入したのがバレたのか？）

と焦つたが急を告げにきた男の声を聞いて違うとわかつた。

「ここがヤバいんだ！いいから！お前等も早く来いっ！」

と言われ二人は

「わかつた！」

と声を揃えて答えるとすぐに三人分の走り去る足音がして、そして扉が閉まる音がした後は再び倉庫内に静寂が戻つた。シンツとした倉庫内に物音一つ聞こえないことを知ると、再び荷物の陰から身を乗り出して誰もいないことを確認し、素早く飛び出して小走りに出口を目指した。

扉の前に到着するとすぐに扉の両脇の壁を確認する。どうやら右側に操作ボタンがあるので、ボタン式開閉ドアだと認識する。ドアのボタンの確認をしている間も何だか外は騒がしい、悠呂はその内容が知りたいのもややあつて扉にそつと耳を当ててみた。表では、バタバタ何人か走る音とそれに混じつて切れ切れに声も聞こえる。

「ヤバいぞ……が……でバレたら……。」

「……が裏切った……。ちきしょー！」

良くは聞き取れないがどうやら、大事があつたらしい……。悠呂は、これは『しめた』と思つた。

この騒ぎに乗じてアスラビ・尾崎のいる最深部の部屋まで行けるのではないかと考えた。

しかし、今出て行つては捕まつてしまつ……騒ぎが少し収まつてから

アリスは、ついに組織に達し、ついで倉庫に潜む事にした。

第三十八章（後書き）

（・・・・）え〜長〜ら〜くかな？お待たせしました…えっとずつ
とどう展開するか思案中でした…はいっ嘘です…ごめんなさい
（TーT）実は全然思いつかなくて、小説本を本屋に漁りに行つた
りしてました…これほんとつゲームなんか今回は一切してません！
後、それとここに投稿されている他の先生方の小説を敵情視察（良
い意味でよつ！）も兼ねて読み漁つておりましたつ！こんな私です
が…どうか…（^□^・）見捨てないで〜

はじめは星羅を後ろに乗せている事も忘れ、禁止区域へ向けてコラルロッドを物凄いスピードで走らせていました。勿論、女の子を後ろに乗せて走るなんて生まれて初めての事なのに、そんな事は頭の片隅にもなかつた。

そんな事より悠斗の心配…いやつほんとんど怒りで、『あいつに会つたら一発殴つてやるうか…それとも飛び蹴りをくらわしてやるうか…』とそればかりぐるぐる考えていて、後ろで星羅がいくつ話しがけても、全然気付かないでいた。

そして、田の前に障害物が見えて思いつきり避けた時に自分の腰に手をまわしている誰かの腕がクツとキツくなつて、改めて星羅の存在を思い出した。

「あつ…！」めん…大丈夫…か？」

とスピードを緩め後ろを向いた。

しつかり、はじめの腰に抱き付く形でいた星羅は緩くなつたスピードに気を許し力を抜いて顔を上げた。

「ふう…ちょっと…ううん…かなり辛かつた…。」

と不満顔で口を尖らせた。

「いやあ～…わりい。考え方してたら、夢中になつちやつて…。」

と照れくさそうに頭を搔いた。そんなはじめの顔を星羅はじつと見て…。

「多分…こんな事になつたのは…私のせいね…私があんな事言わなければ…こんな事には…『めんなさい。』

と震える声で言つた。

その表情と言葉に一瞬、驚いたはじめはすぐに真面目な顔になつて

「なんであんたが謝んだよ…謝られる意味がわからんねえ…」

とすぐに視線を逸らし前を向いた。

そんなはじめに星羅は

「だつて…あたしがつ…。」

と言いかけたのを遮つてはじめは、少し怒つているような口調で星羅に背中を向けたまま

「何をあいつに話したのか知んねえけど…でもつー一番わりいのは、後先考えずに飛び出して行つて…俺を…いやつ…みんなを心配させてる悠田だつ…！」

と言つと、怒りでかはじめの背中は少し小刻みに震えていてそんな背中が、彼と悠田の絆の深さを物語つていたのが星羅には、羨ましいようすで申し訳ないような複雑な気持ちにさせた。

禁止区域、もとい研究所付近に到着した二人は少し離れた建物の陰にコラルロッドを止め、様子見をした。

正門から、フェンスにかけて相当数の警備兵が厳重に周りを固めていた。

「ふえ～かなりの数がいるなあ～くそつ…！」

とはじめはボヤきながら壁に背を預け、外を見ていた。星羅はその様子を見て、何か方法はないかと辺りを見ると、ふつと何かが目に入つた。なんだろうとその物に静かに近づいて行き、クッキリその物の形を捉えてはつとした。

外の様子を見ていたはじめの肩を叩く者があつて

「ああ？」

と振り向くと、星羅が緊張した面もちで何か言つたやうに立つていた。

「何？なんかあつたのか？」

とこの状況に苛立つはじめは少しキツい口調で問いかけた。

「うん…ちょっと…こっち…来て。」

と星羅は手招きしながら、先に歩いて誘導する。訳のわからないはじめは星羅の後について行つた。

歩き出してすぐの所で星羅はこちらを向きながら、どこかを指さし

ていた。

「？」

とその先を辿ると、見たことのあるコラルロッドが何かから離すよう置いてあった。

「……」

思わずはじめは、そのコラルロッドに駆け寄った。

「……」

「うん……やつ……じゃない？」

と星羅の言葉を聞いて、すかさずはじめはコラルロッドの運転部にあるボタンを操作し、ある画面を出した。

そう、このコラルロッドを支給される時に最初に打ち込む所有者データ。その画面には悠斗の顔写真入りのデータが表示されている。「あいつ……、こんな所に……所有者データの存在忘れてんじゃねえのか……あの馬鹿……」

と呟くとはじめは、座席部のクッションに思いつきり拳を叩きつけた。

そんなはじめを見ていた星羅は、はっと気付き改めてそのコラルロッドを置いている場所を確認した。

「……」

星羅は、はじめがさつき様子を見ていた反対側の壁、そのコラルロッドの置いてある側の壁の隙間へ駆け寄り、そこから外を見た。

「……おつ……おい? どうしたんだよ?」

と星羅の行動を見ていたはじめは不思議そうに声を掛けた。

「……まさか!」

そう声を発した星羅は何を思つたのか、そのまま外に飛び出して行つた。

「……おいつ! まつ待つ!」

あまりの事にはじめも釣られて自分も出でてしまった。

第三十九章（後書き）

（ 〇 ） 今回は…はじめきゅんと星羅ちゅわんのお話し…（ － ） 愁真…頑張りました…さてさて、この一話に収縮してはじめきゅん話を詰めようと思った愁真ですが…編集、付け足し等々をしている内にですねえ…

（ － ） いんなんなつたらやつた…（ * ^ - ^ ） らな～の～でつ次回 もこの続き…はじめきゅんと星羅ちゅわんのお話しになります

（ + _ + ） お楽しみ！

はじめが見ている光景は、まるでTVで見るスローモーションのようだった。目の前を走り去つて行く星羅の後ろ姿、自分達に気付き群がるようにこちらに駆けてくる数人の警備兵達。全ての動きがゆっくりと、はじめの瞬き一つ一つでコマ送りのように場面が次々変わつてゆく。

その内の一コマに、星羅が何人かの警備兵に囲まれ、それを振り切ろうとするがその中の一、三人に捕まりもがく彼女の姿が見えた。それまで現実を把握できず客観的に見ていたはじめだが、はつと我に返り彼女を助けなければと気がつけば走り出していた。

「は～な～しい～…。」

とその走つた勢いのまま、はじめは足に力を入れ飛躍した。

「やがれっ！！！」

目の前で星羅を囲つて居た一人の警備兵の横面めがけて、はじめは飛び蹴りを食らわした。

蹴られたその男は、

「ぐあっ！」

と呻き声を上げ、少し飛ばされる形で地面に倒れ伏した。

それを目の当たりにした、もう一人の警備兵は、ギョッとして星羅を捕まえた手を引き寄せ後退つた。飛び蹴りから着地したはじめは、

「だ～か～ら～…！」

その足で星羅を捕まえているこの警備兵の隙だらけの懐めがけて、

「離せ～つ～つ～て～ん～だ～…。」

頭から突っ込んだ。

「よ～！～！」

思いつきり腹に頭突きを食らつたその警備兵は、

「ぐふつ～～～！」

と声を上げ、はじめと共に後ろに少し飛ばされ仰向けに倒れた。その拍子に警備兵の手から離れた星羅もまた、勢いに釣られ尻餅をついた。

「きやつ……！」

その警備兵の上で四つん這いになつてゐるはじめは、頭をブンブンと振つた。意外とこの男の腹は堅かつたのだ、頭がクラクラする。はつと気づいたように顔を上げ、星羅を見つけると

「今の内だつ！早く行けつ！」

と促した。

痛そうに腰をさすつていた星羅は、はじめを見て
「でもつ…あなたは？はじめくんはどうするの？」

と訊いてきたので、

「俺も後からついていくからつ！早くつ！」

と急かした。すると彼女は頷き、ゆつくり立ち上がると背を向けた。そして一度こちらを振り向くとすぐに顔を戻し走つて行つた。それを見て、はじめもゆつくり立ち上がり後を追おつと踏み出したその時、目の前に大柄な警備兵が立ちふさがつた。

「！！！」

はじめは、その大きく横に手を広げた大柄な警備兵を、睨みつけ

「どけよつ！」

と無理に行こうとする。しかし、大柄の警備兵はテコでも動こうとせずかわりに

「少し落ち着け…」れには……わけつ…。」

ガスつ……！

「 エ * % & つ … ! ! ! 」

はじめの蹴りが、彼の股間にクリーンヒット。大柄な警備兵は言葉にもならぬ呻きを上げつづくまつた。

「どけつて行つただろつへんじやくなつ」

とうづくまる大柄な警備兵を避け、その先へ行いつとして足が止まつた。フーンスの近くで再び警備兵と揉み合つ星羅。

「くつそつ！あいつら！次から次へと…！」

殆ど、溜め息混じりでそこへ向かおとして誰かに肩を掴まれた。

「！？」

『またかっ！』と思ははじめは後ろを振り返り……

絶句した。そこには見覚えのある、自分と同じ青い髪をした青年が苦笑いをして立つていた。

「…ひ…清…兄…ちゃん？」

その見覚えのある青年の背後から、間抜けな聞き覚えのある声がした。

「あ～あ～。俺等の可愛い後輩達をこんなにしけつてえ～。」

はじめは、清の後ろに手をやつしてみる。先程倒した大柄の男の傍にしゃがんで、彼の腰をポンポンと叩いてやつている細身の中年男性。

「おひ…おじわん…。」

そのはじめの声を聞いた悠田の父親は、ズボンのポケットから手を入れたままゆっくり立ち上がりながら近づいて、ポケットから手を出すと

「よくも…まあ…。」

と言ことながらゆきへつひへひに近づいて、ポケットから手を出すと

はじめの肩に手を置いた。

「ここまで暴れまくつちゃつて…だあれに似たんだか…。」

と大仰に傍に立つ青年に悠呂の父親はチラリと目をやつた。

「ちょっと…ちょっと先輩つ！俺のせいなんすかつ？」

と清が抗議すると、悠呂の父親は顎をしゃくらせて

「はあーい…この事件が解決したら始末書、お前が全部書け！」

と清の前に指先を突きつけた。

「そつ…そんなあー！ズルいですよつ先輩！」

そんな二人のやりとりをはじめは、ぽかんと見ていた。

ギヤーギヤーと一人がやり取りしているとキビキビした声が割つて入ってきた。

「お疲れ様ですっ！浅乃木警部！桐矢警部補！」

と一人の年若い警備兵が二人に敬礼した。

その意外さにはじめは驚いた。

第四十章（後書き）

(*^-^*) 予告通り、はじめきゅんが暴れたりました しかし
し…(T_T) アクションシーンって表現するのって難しい…シク
シク。(-_-) 今回も、打ち込みながらあーでもないこーでも
ないと編集しもつての執筆だったのかなり時間がかかりました
…(^_-^;) 途中で逃避行しちゃつたりなんかもしましたが、無
事四十章を書き上げる事ができました m(_ _)m これからも
頑張りますので応援の程宜しくお願ひします

星羅がある少年に連れ去られてしまつて以来、私（修造）は自宅に戻らず研究所に詰めていた。しかし、研究に手がつく筈もなく自室でただただ廃人の様に机上に飾つてある娘の写真を瞳に映していた。

何時間かに一回、研究員が食事を持つて来たり、研究内容の指示を仰ぎに来たりしていたが、私はそれにも一切応えずにはいると、次第に入りする数も減つていった。

そんな中、静かに部屋に入つて来る者がいた。
また研究員だらうと見向きもしなかつたのだが、私の姿を見るなり大きな溜め息をつき、聞き慣れた靴音を鳴らしながら傍に歩いてくる。

「何時間…いやつ何日そうしているつもりだ…修造。」

若い頃と変わらぬ低い声で問いかけながらいつもの様に後ろに立つ。私はゆつくり後ろを振り向いた。そこには自分と同じように歳を重ねた老齢な顔、しかし私を見る彼の瞳は昔のままで真っ直ぐこちらを見て離さない。私は初めて会つた時から彼の力強く、正義感に満ち溢れたこの瞳^めが苦手だった…何か自分が責められているような…。彼から視線を逸らし、真正面に向き直ると机の引き出しから葉巻を取り出して、火を点けた。

煙りがゆつたりと周りを包む

そうするといつも黙つて彼は灰皿を差し出してくれる。そんな彼の気遣いが、なんだか安堵する。ひと吸いしてからその灰皿に灰を落としてやる。

「村瀬……覚えているか？」

そんな切り出して私は話し始める。

あれは確か、まだ名の通つた病院の研究チームに在籍していた頃、総合研究長から呼び出しを受け、研究長室に行つた時だつた。当時、すでにその課のチーム長を就任していた私に研究長は言つた。

「アスラビ・尾崎君、君のチームの研究がなかなか良いと聞くよ。」

「はいっ……ありがとうございます。」

「ふむ。ところで君は何故私に呼び出されたのか分かつていなさいだるう……。」

「…………はい。」

「ふむ。今の研究……はどう言つた物か君には理解できているかね？」

「…………はい。」

「ふむ……では、話そつ。今の研究が成功すれば、君にその課の研究長の座を譲るうつと思つ。」

「えつ……？……あのう本当にですか？」

「ああ……頑張りたまえ。」

その言葉に興奮したが、次の言葉でその気持ちの一瞬にして凍りついた。

総合研究長は顔の前で手を組み、鋭い眼孔でこう言い添えた。

「今の研究の更なる高みへ……ひいては3000年前に失敗した我らの望み……人のクローンを作り出す……アスラビ・尾崎君、任せたよ。」

頭を深々と下げ、研究長室を後にした。

『研究長の座を譲る』

その意味が分かったような気がした…しかし、すでに娘の具合が悪くこの病院に入院をさせていた。研究長に就任すれば莫大な研究費が貰えるのは確実。もしかしたら、娘の病に効く薬の開発も夢ではない…。

そういう思いもあって研究長就任の件を引き受ける事にした。

そんな時、私付きの警備兵が変わったのだ。私の研究の危うさを考慮し総合研究長が送ってきたのが彼、アジュラーチ・村瀬 澄三。彼も副隊長の座を譲られたばかりで私の元に送ってきた。言わば、捨てゴマ同士と言つたところだろうか…。

彼は、私の自室に入つてくるなりビシッと背筋を伸ばすとかかとを鳴らし、スッと敬礼をして配属の挨拶をした。

「初めまして、アスラビ・尾崎教授。今日から配属になりました。アジュラーチ・村瀬 澄三と申します。」

そう言つて見つめてくる彼の瞳は、力強く正義感に満ち溢れた目で警備兵に最も適した男…といった印象を受けた。私はこれからしていかなくてはならない法律ストレスの研究の後ろめたさもあってか、真つ直ぐこちらを見て離さない彼の瞳をまともに見る事ができないでいた。

「あつ…ああ。これから、よろしく頼むよ。」

それから、数年後私のチームの研究は順調に進んでいた。そして、

ある日再び総合研究長に呼び出しを受けた。

研究長室に行くと、そこには他課の研究長及びチーム長が数を揃えていた。何事だと総合研究長に田を向けると、彼はただ入室を勧めてくるだけだつた。

仕方なく勧められるがまま、一つのソファーに腰を下ろすと、総合研究長は話始めた。

「君に来てもらつたのは他でもない……、畠と話しをしていたのだが……。」

と総合研究長は、自分専用の椅子に腰掛けると、いつものように顔の前で手を組んだ。

「君に、今的研究の論文を書いて貰いたい……勿論、君の名でだ。」

「えつ？……しかしつ……。」

「今の研究の成果を世に知らしめるのだ……やつてくれるね？・アスラビ・尾崎君。」

とんでもない事を言い出した。今的研究をやつしていること事態、法律ストレスなのだ。そんな事をすれば、今までやつてきた研究や教授生命を絶たれてしまう。そうなれば、同時進行していた娘の薬の研究も……。

私は、思いつきり机を叩いた。

「冗談じゃありません！……」

これには黙つていられなかつた。

「そんな事をすれば、マスコミは愚か警察だつて動きますつーましてやつこの病院だつて危なくなりますつー私は賛成できませんつー」

そう反論するも、周りはヒンヤリと冷めた反応を見せた。

そこへ、総合研究長が話出した。

「確か…この病院に、君の娘が入院しているらしいね…。」

「……そつそれが…何か?」

と言つと総合研究長は何とも不適な笑みを見せて

「彼女がどうなつても構わないのかね?確か…その薬も研究してい
るのだる?…君は…。」

やられたと思つた。全てお見通しだつたのだ。

力無くソファーに腰を下ろすと、総合研究長は席を立ち、私の肩に手を置いた。

「頼んだよ…。」

と一言。その言葉を皮切りに、他課の研究長やチーム長は微かに嘲笑しながら退室して行つた。

仕方なく、私はそれに従い論文と同時に研究成果の一部を発表した。

……結果、大いにバッティングを受けた。マスコミは医師会追放だなんだと騒ぎ立てる。私はいたたまれなかつた…。そんな苦しい折りも彼、アジュラーチ・村瀬は私の護衛だなんだといつも傍にいてくれ、励ましてくれた。

そんな最中、私は正義感溢れるこの男に質問をぶつけてみた。

「…村瀬さん、あなた…私が何をやっているか知っていますか？」

マスコミの騒動に疲れ、灰になつたように自室のソファーに腰を下ろしながら訊く。

彼は、ブラインドを降ろした窓から外の様子を見ながら答えた。

「ええ…。」

その横顔は、訊くまでもなく全てを知っている様子だつた。

「なら何故…。」

と訊くと彼はこぢりに顔を向け

「それでも、あなたを守る事が自分の仕事です。」

「そう」の男は言った。真つ直ぐな瞳で…。

それからすぐ、娘の最期を看取ると私は医師会から離脱した。総合研究長の狙いは明らかだつた…責任の転嫁…娘を失つた今となつてはもうどうでも良い…。

私は自室で職場の整理をしながら、黙つて片隅でいつものように立つ村瀬に言った。

「もう…私の護衛はする必要はない…村瀬さん…元の職場に戻つて下さい。」

しかし、彼は片隅でこぢりをじつと見ると

「アスラビ・尾崎教授…私もついて行きます。」

と言つて私の前にデータを開いて見せた。それは、村瀬が所属していた警備兵所の書類で『退職受理』と赤く記されてあつた。そうか…お前も私と同じ捨て『ゴマだつたな…』と改めて思い出した。

それから、職を失くした私達であつたが私は莫大な退職金をつき込み『D-3ブロック』の立ち入り禁止区域の土地を買い取つた。村瀬も退職金で自分の警備兵所を立ち上げた。

「私は、お前が理解出来なかつた。」

と遠い目で私は、萎れてシミだらけの手に持つ葉巻を口に含み、煙を吸つた。

すると、アジュラーチ・村瀬はフツと笑い。

「なんだ…いきなり。」

と言つて窓際に歩きだした。

私は遠い目から、机上の写真立てに目を落とし続ける。

「私についてきたつて……その先どうなるか…わかつていた筈だ。」

村瀬は、昔と変わらず背筋をシャンと伸ばして手を後ろに組んだ姿で私に背を向けている。

しばらく間があつた。

「私は…あなた付きの警備兵になつて…あなたをずっと見てきまし…そしてあなたの人柄に触れた…そんなあなたに私が惚れ込んだんです。だから私はあなたについて来ようと思つた…それがこの先、

どんな運命を辿りつつとも……只、それだけです。」「

そう応えた彼はこちらに振り返った。初めて会った時の様な口調とその真っ直ぐな瞳で……。

私は、初めてその瞳を見返せた気がした。

そんな時、呼び出しブザーがけたたましく鳴った。何事かと、村瀬が私の机上にある応答ボタンを押し、画像が現れた。それは研究員で慌てた様子だった。

「どうした?」

と村瀬が訊くと

「ああ～アジュラーチ村瀬隊長おいででしたか…大変なんですっ！早く来て下さい～」
と言ひ。私と村瀬はお互い目を見合せた。

第四十一章（後書き）

お待たせいたしました 四十一章！ 実は… 四十章まで書いて気づいた事が… 笑（^-^）じいさんの事いつこも書いてへえ～ん！ これじゃあ最後に持つていけないと焦つた愁真は慌ててこの四十章にじいさんの話を突つ込みました笑○(^-^)○これで全体の描写がまとまればよいなつ と思います（。A。；）でも内容的には合つてるのか？とまたまた焦る私なのでした笑

第四十一章（前書き）

あのつ…段々書いている内に調子のつりがつてまた2ページ書いてしまいました。携帯からJ覧になる方読みづらいですよね…」めんなさい

（――・（。・；（――・；）ペコペコ

はじめは、どうして禁止区域を警護する警備兵が警察である悠田の父親へと挨拶するのか？そして従兄弟である清も居て『桐矢警部補』等と呼ばれているのか？全く持つてわからない事だけで、頭の中はパニック状態だった。

気づくとギャー、ギャーと言い合いをしている清の元に近寄り、幼子のように裾をツンツンと引っ張っていた。

それに気が付き、こちらを振り返った清にその疑問をぶつけてみる。
「なあー、なんでの警備兵の兄ちゃんが2人に挨拶すんの？つーか…清兄ちゃんは何で警部補なんて呼ばれてんの？兄ちゃん、受験失敗して十年も家出してたんじゃねえの？」

その質問責めに…そして、最後の言葉に清は絶句した…。

「あははははははー！」りゅーこにゅーせつ…ぶーーーー十年も家出つてつー！
がははははー！」

と悠田の父親が腹を抱えて笑い出した。

傍にいた年若い警備兵も必死に笑いを堪えている。

その場で笑いが止まらぬ様子の悠田の父親と必死に笑いを堪えようとしている警備兵の姿を見た清は顔を赤くすると、はじめの頬を両手で挟み

「お前つーーーそりや嘘だつーつかつどつからそんな話を聞いたんだよつー！」
と詰め寄つた。

清に両頬をサンドイッチ状態にされたはじめは、アグアグしながら

「だつだれつでひまつせきけいせんがう。」

「ふあはつはつはつはつ-ひ-」りりや面白え「ふあはつはつはつはつ-」

と笑いたくる悠呂の父親に清は顔を向け

と怒鳴った

二十九
わ
れ
い
惠
か
た
」

と悠呂の父親は涙を指で拭いながら、笑うのやめた。

「いいか？俺は、受験には失敗なんかしていない。ちやんと警
はじめ

とはじめの両類を挟んだまま、しつかり目を見つめて訂正する。

「うう、う！わがつだつ！わがつだがら……離せよつー・」

と振り払った。その勢いにヨロヨロと清は後退ると頭を抱えた。

「くつそ～お袋の奴う～なんて嘘つくんだつ…たくつー」

そう愚痴る声を聞いて悠斗の父親は『そりでもないぞ』とその場に立つ。

「どういう事です？先輩。」

と聞くと悠呂の父親は頭をボリボリ搔きながら

「恐らく…あのタ「親父の仕業だな…。」

「くつ？部長の？」

と聞き返すと、悠呂の父親は胸ポケットから煙草を出し、火を点けた。そして煙をひと吸いしてから

「俺なんか、四年も新星開拓に駆り出されてる事になつてた…。」

「……先輩のがまだいいじやないですか…。」

と清は恨めしそうに悠呂の父親を見た。

「あははははつ…まつそつだか…あのハゲタ「親父の嘘にや付き合ひきれねえな…。」

と煙草を口にくわえると、

「ん？」

と声を出すとすつと真剣な顔になつた。

「お疲れ様です！浅乃木警部！桐矢警部補！連絡のありましたお嬢さんを確保してお連れしました。」

とキビキビした声が後ろから聞こえたので、清とほじめは振り返つた。

そこには、俯き加減に歩いてくる星羅の姿があつた。

「おう…じ苦労さん…で？中の様子はどうだ？作戦通りにことは運んでいるか？」

と悠呂の父親が眼孔鋭く、後から来た警備兵に訊いた。

すると少しガツチリ田のその警備兵が声を小さくして

「はいっ…何とか…でも、浅乃木警部の息子さんの行方はまだ…しかし…先程、息子さんの物と確認できる乗り物が見つかりましたので…中にいる事は確かかと…。」

はじめはその話を聞いて、やつて見つけた悠臣のパトロールロッドだと気が付いた。

（…）んなに早く見つかるものなのかよ…マジで見つかってたらどうするつもりだつたんだ…あのバカ…。）
と爪を噛んだ。

「ねえ？ これはどういう事なのかしら？」
と星羅がはじめの横に立つ。

「うう…あ…あ…あ。俺も良くわからんねえけど…俺等がここへ来る前、おじさんがどつかに連絡してたから、それがなんか知らねえけど通つたかなんかじやねえかな…。」
「ふう～ん。」

と相槌を打つて、星羅は何やら話す四人の姿に目をやつた。
「…私達…無駄だったのかな…あんな事しなくても悠臣…助けられたのかもね…。」
とポツリと呟いた。

その言葉にはじめはムツとして…。

「無駄なんかじやねえよつ！俺等が騒動起きたなかつたら警察なんて動きやしなかつた筈だつ！それに…ここに来る前に…だつておじさん揉めてて、どうなるかわからなかつたんだしよつ…。」

とはじめは怒氣の籠もつた声で言い捨てた。

「警察が動かなかつたら…俺だけでも悠臣を助けに行つてたわ…。」

最後は力無く呟いて、悠臣の父親達の方に目を向けた。

すると話しあったのが四人の内、警備兵一人が元の場所に戻つて行く。それを星羅と二人見ていると

「おーっ！はじめっ！星羅ちゃん！あつといおひあこで！」

と悠呂の父親が手招きしながら呼んでくる。

はじめは星羅と二人、清と悠呂の父親の立つ場所に行つてみる。悠呂の父親は顎の不精髭を触りながら、何から話そうか…といった感じで口を噤んでいた。

話し始めたのはその傍らにいる清だった。

「はじめ…お前、俺に何で警備兵が俺達に挨拶してんだって質問してきただろ？」

「おー…おー。まだ理由聞いてねえ！」

「それは、長年かけて潜入させた俺達の仲間だからさ…。」

「えっ？」

「えっ！？」

驚きの声を上げたのは星羅とほぼ同時だった。

「まつさつきの年若い奴は最近潜入させた新入りだけになつ。」

「長年つて…どんぐらい？..」

「うーん…そだなあ…こここの警備隊長が警備兵所を立ち上げてからだから…。」

「二十数年前からだ…。」

と悠呂の父親が割つて答えた。

「でも、一度もそんな素振りはなかつたわ。」

と星羅が言つと、悠田の父親は視線をそぞろに向けて

「なかつた……じゃない……時期を見てしなかつた……とこいつ事になる。」

「じゃあ……なんで今更、捕まる気になつたんだよつーもつと早く
すりや良かったじゃねえかつ！」

とはじめが食つてかかると悠田の父親は涼しい視線を向けて

「……そうだな……しかし、この何年もあの爺さんは尻尾を掴ませなかつた。」

「……孤児施設……。」

と星羅がポツリと呟いた。

「……そうだ……事実上、孤児施設として通していた……。」

「そんなのー聞いたことないぜ?」

「つむ……俺が調べて分かつた事なんだが……どうやら資産家がバック
についていて、そいつの名義での運営という裏工作をしていたよう
なんだ……。」

「……そんな事まで俺等に話して大丈夫なのかよ……。」

「まつ……話しかけたもんは仕方ないね……。」

と悠田の父親はおちやらけた。そのおちやらけた親父を見てはじめ
は憮然として続ける。

「で?……確かおじさん諜報部だったよな?何でおたくいりこじいん

の？捕まえるのって刑事課の役回りじゃないの？

その質問には、清が答える。

「作戦会議中に、お前等がここで暴れてるって報告があつたから慌ててきたんだよつー部長もカンカンだったんだぞつー。」

とこきなりゲンコツが降つてきた。

「うひえつー…思いだし怒りはやめひよつー。」

と頭をさすつた。

「話が変わるが…うちの息子はどうやってあの中に入つたんだ？…潜入員に聞いたら誰一人あいつを見たという奴がいなかつた…。」

と悠呂の父親は腕を組んで頭を傾げた。

「言われてみれば…そうですね…一体悠呂君はどうやって…。」

と清も頭を傾げる。それには星羅が答えた。

「…」ないだ…私が悠呂くんに助け出される前に…警備兵に見つかっただけになつて…私とお父様しかしらない裏の入口に潜んだ事があるの…多分…そこから。」

「ほおー…なるほど。」

と悠呂の父親は手をポンと叩いた。その傍らで清が何やら顎に手を添え考へ始めた。

「…先輩、良いことを思いつきました。」

と悠呂の父親を振り返ると、彼は大仰に鼻をほじつていた。

「先輩つーーー真剣に聞いて下さーーー。」

と言わせてすぐに悠呂の父親は何か悟つたような顔になり、

「…分かってるよ。奴らが来る迄の時間稼ぎを彼女にやらせつけて
んだろう？」

「ええ。悠呂君を安全に助け出せ、アスラビ・尾崎を誘き出す方法
…彼女に中に入つてもらうんです。」

「俺はつ？俺はなんかする事ねえのつ？」

とはじめが前に出ると、悠呂の父親はすつといひひひと視線を向け何
か言い掛けたがすぐにこつものおちやらけ親父になり、

「こつちやんは～仲間はずれだよお～」

とドロビンをした。その手をはじめは鬱陶しあうに払いのけ

「「おじさんつ～ふざけんなよつ～俺は真剣に聞いてんだつ～」

と訴えた。

それに、悠呂の父親は真顔になりはじめの肩にポンと手を置くだけ
だつた。それをも払いのけようとした所で清が言つ。

「～、悪いがお前は何もしなくていい…お前が居たら逆に彼女も、
悠呂君も危険に曝してしまつかもしれない。」

…そう言われて、はじめは俯くと

「……くそつ～」

と拳を握り小さく呟いた。

第四十一章（後書き）

（^_^;）え…お待たせしました…あのつほんとはもつと短文でシリアルにしたかったのですが…なんせ前話がシリアルでしかも今日は悠臣の父ちゃんがいるって事でシリアルになりませんでした…でもまつ…前話のシリアルの次なんで休息も兼ねて…（.;口;）こんな駄文と私ですが…見捨てないでえ泣

第四十三章（前書き）

（。 A 。 ; ）あのひ … また長くなつちゃいました… 完結に向けて
なので許してやつて下せこ！

外の騒ぎが収まるまで倉庫に潜む事にした悠田だったが、この騒ぎの中でもここへ入ってくる研究員がいるかもしれない用心する事にした。

取り敢えず辺りを見回し身を隠せる物を探す。すると丁度歩いて2、3歩先に大きな空き箱らしき段ボールを見つけた。それを出口近くで、外の様子を窺える壁際でこの箱を置いていても怪しまれない場所はないかと探してみる。

「！？？」

この箱と同じ様な段ボール箱の群を見つけた。

悠田はその置き場所の周りをじっくり田で追つてみる。

「……なんとかいけそうだね。」

と独り呟くと、空箱の近くを腰を低くして素早く移動した。その箱の中を覗き込み、何もない事を確認するとそれを頭から被つて、取つ手口を中からつづいて開けた。

「よしひー。」

悠田はそのままの恰好で、カサカサと段ボールの群に移動する。
(……何だが、コントみたいだけど…仕方ないよね…。)

そんな事を思いながら、なんとか段ボールの群に到着すると一度空き箱を脱ぎ、壁際にある群の段ボールを除ける。

「……ひー。」

だけようと持つた段ボールはやはり、箱の大きさ通り重かった。

「ふわ〜…、やつぱり重いや…。」

と手の埃をパンパンと叩きながら独りしゃべった。
(…「…」、はじめ君がいたら張り切つてどけてくれるだろ? な…
…いやつ面倒臭え! つてむくれるかな?)

ふとそんな事を思つて、悠呂はハツとすると首をブンブンと振つた。
顔と気持ちを引き締めて、先程の箱の端を掴むとズルズルと手前に引く。

その箱を横によけると、再び空き箱を被りそのまま隙間に潜り込んだ。

壁際だけあって外の物音が聞こえる。どうやらまだ騒ぎは収まる気配がないようだ。

(…一体、何があつたんだ? う…)

壁に耳を近づけてみると、箱の厚みもあつてはつきりとはわからな
い。何か叫んでいるだらう声と、廊下を走る数人の足音と振動、そ
れだけが今わかる情報の全てだった。

(…何だかわからないけど、もしかしたらこれがチャンスかもしれない…この騒ぎに乗じて動いていれば難なくあいつの居る場所に
辿り着けるかもしれない…。)

箱の中で高鳴る鼓動を感じながら、悠呂はこの騒ぎが収まるのを待つた。

何分経つただろうか、ガクンと自分の頭が動いた感覚で目が覚めた
…どうやらこの箱の暗さと狭さ、見つからないだらうとこう安心感で眠つてしまつていたらしい。

(あつ…しまつた…寝ちゃつた…。)

慌てて悠呂は壁際の方へ耳をやり外の様子を窺つ。

…何も音がしない。箱の穴から倉庫内を見て誰もいないと確認する、箱を脱いで今度は直接壁に耳をそば立ててみる。

…やはり、音がしない。

「…収まつた…のかな?」

と弦くと後ろを振り返り、倉庫内の音も拾つてみる。

やはりシーンとして耳鳴りがする位静かだ。

悠呂は、意を決し箱の群から静かに這い出て辺りに警戒しながら、度々棚等に身を隠し出口付近に近づいた。

そこに身を縮めて再度、冷たい扉に耳を当て外の様子を窺つ。やはり、音はしない。

さつと右側の開閉ボタンパネルのある壁に移動し、立ち上がりて壁にぴったり背をつけると開閉ボタンに手を伸ばした。扉はブシュッとエアーが抜けるような音を上げ、ゆっくり開いた。しばらく開けたまま、誰か入つてこないか警戒する。

誰も入つて来ないので、そろりと外の様子を窺つた。

「…ううつ！－」

ずっと薄闇の中にいたせいか外の蛍光灯が眩しい。目をすぼめながら外を見回してみる。

眩しいのもわかる…蛍光灯に次いで、壁や天井までが清潔感を見せる為、真っ白なのだ。

そんな壁や天井から目を離し、だいぶ明るさに慣れた目は左右に伸びる廊下を捉えた。

先程の騒ぎが嘘の様にガランとした廊下だった。

(…今しかない！)

そう思つた悠畠は、倉庫からゆっくり廊下に出た。

左右に伸びる廊下を交互に見て、どちらに進むべきかと悩んだ。

（うーん…どちらだ？）

何度も左右を見ても見当もつかない。

（……よしつ…右だつ…）

と右へ進むことを決め歩き出した。奥へ奥へ進むにつれて一抹の不安がよぎる。

今は誰一人出くわす事はないが、こんな事がずっと続く訳がない。研究員に見つかってしまえばアウトだ。

その思考が自然と目を動かす、どこかにすぐ逃げ込める場所はないかと…。

一つ扉らしき物を見つけた時だった…。

どこからか人の声と靴音が、自分が歩く先の角の方から聞こえてくる。慌てて先程見つけた扉に何の確認もせず飛び込んだ。

あまりの事で心臓も早鐘のように鼓動を打つ。

本当に危機一髪だった。すぐに目の前を通り人の声。内容は良く聞き取れないが低い老齢な感じの声の男性と、なんだか慌てたような口調の…研究員だろうか？年若い声が会話をしながら通つて行った。

2人の声が遠ざかつていつたのを聞いて、悠畠は溜息をつくと空気を抜かれた様にヘナヘナとその場に座り込んだ。

「はあ…危なかつた…。」

と片手で顔を覆うと、はつとした。何も確認せずにここに入つてしまつた事を思い出し、顔を上げ辺りを窺つた。

幸い、人は居ないようだが辺りが静かなせいもあって、何かこの部

屋の奥から聞こえてくる。

もつと良く聞こえるように、悠呂は四つん這いで奥に行つてみる。

今度はハツキリと聞こえる。水を沸かすような「ポポ」、「ポ」といった音。

「……なに？」

悠呂はゆっくり立ち上がって更に奥に進んでみる。

この部屋も、倉庫同様に薄暗いのもあって周りの様子が良くわからぬ。

ない。

何かに躊躇きながら音のする方へと歩く。

進めば進む程、音は大きくなる。

段々と辺りがうつすら明るく足元が見えてきた。本やら資料やらが床に散らばっている。

その資料の一枚を手に取つて見てみると、良く解らない。それをもつたまま、先へ行こうとして足が止まつた。微かだが薬品の匂いがしてくる。

「……」は、実験室？

そう呟くとまた歩き始める。

ぼお～と光る入り口をくぐると、悠呂は啞然とした。

目の前には螢のような光りを放つ大きな水槽が現れたのだ。

悠呂はその大きな水槽を見上げた。

「……ん？」

しかし、良く見てみるとそれは大きな水槽ではなく、壁の端から端までびつしつ並べられた指三本くらいの太さの試験管だったのだ。

「……なんで？」

驚いた悠咲は更に近くまで近づけて、そのズラリと並べられた試験管の内の一本に田をやつた。

「ポ」とする水泡以外に、何かが見えた。

「……何だらう？」

田を凝らしてみると、中で何かがピクピクと動いた。

「へつ……？」

と声を漏らすと、手に持った一枚の資料を落とした。

試験管の中で、再び何かが動く。

「……ふつ……つうつ……うわあああああつ……」

と悲鳴を上げて、腰が抜けたようにその場に尻餅をついた。そのまま、後退うつと足をバタつかせたが上手くゆかない。

「……うつ……」

途端に、胃の中の物がせり上がりてくる感触がして慌てて口を押さえたが、堪らず横を向きもどした。

蛍光色の水の中には胎児らしきものが入っていた。

大量の投薬による副作用なのか、人とは似ても似つかぬ姿に変形してしまっている。

「……かはつ……はあはあ……」

口を拭い、荒い息をしながら悠咲は呟いた。

「……なんなんだよ……！」

第四十四章

アジュラーチ村瀬は、警備兵舎のあるブロックへ急ぎながら研究員ロッヂ武田の話を聞いていた。

「…それが、思いもよらない情報でして…。」

「ふむ。」

「警備兵の中に裏切り者がいて、ここに情報を外に漏洩してみると
いうんですよ……。」

その話に、村瀬は眉を寄せてロッヂ武田にチラリと田をやつ口を開く
「その情報は確かか?」

少し、間があつたがロッヂ武田は『はい』と答えた。

村瀬は眉間に皺をさらに寄せて、先を急ぎながら思つた。

(…何故だ?…何故今頃になつてこいつもボロが出る?…警備兵の
中にいたといふのか?スパイが?…)

無言でズンズン進んで行く村瀬を見て、ロッヂ武田は威圧感を感じ
ていた。

「それで……つ。」

と村瀬が振り向いた時だった。

『うわああああつーー』

「ーーー?」

と村瀬はその場に足を止めた。

武田も聞こえたのだろう、足を止めて声をした方を振り向くとすぐに村瀬の顔を驚愕したような表情で見た。

その視線に村瀬は軽く頷いて、先程歩いてきた第五研究所の方に目をやつた。

人気のないガランとした廊下……。

もう一度、武田に目をやると彼は静かに頷いた。二人は向きを変え、もと来た道を戻り始める。なるべく靴音を鳴らさぬよう……。

第五研究所前にさしかかり、アジュラーチ村瀬はロッヂ武田を右手で制すると彼も村瀬に信頼を置いているのだろう大人しく従い、そこで歩みを止めた。

それを確認した村瀬は一人、静かに研究所の前に移動した。壁に背中を預け、腰のホルスターから小型ショックガン（ここでの設定では、相手を電気ショックで気絶させる…いわば警棒のような役割の銃）を抜き顔の前で構えると、研究所のドアの開閉ボタンにゆっくり手を伸ばした。

プシュッとエアーが抜ける音とほぼ同時に、ショックガンを持つ手に左手を添えて、臨戦態勢で銃を構え扉の前に立つ。

構えた先、研究所の中は薄暗く何も見えないが村瀬はその闇に目だけを動かし、侵入者を探す。

その場は気配を感じないので、ショックガンを顔前に構え直し慎重な足取りで部屋の中に踏み込んだ。

目だけは忙しく闇の中の侵入者を探す。外では不審者が研究所から飛び出て来ないかロッヂ武田が目を光らせている。

村瀬はわざと明かりは避けず、そのまま奥へ警戒しながらゆっくり進んで行く。

実験室の入り口にさしかかり、再び壁に背中を預けてそつと中を覗き見る。試験管の中の液体の明るさで、中がある程度見えるが怪しい人影は見当たらない。

村瀬は壁から背中を離すと、顔前にショックガンを構えたまま実験室の中に入った。辺りを窺いながら部屋じゅうを見て回る。何かに躊躇してとっさに銃を構えたが、それは床に散らばった資料や本の山だった。

すぐに銃を顔前に構え直し、何か盗まれた物はないか色々と調べてみるが特に異常はなく、奥の試験管環境制御室に行こうとした足が止まる。クローン精製試験管の前の床の一つに目がいった。

「…？」

そして、無言でゆっくり視線だけを試験管環境制御室の扉にやる。近付こうと一步足を踏み出した時。

「たつ隊長あー！大変ですっ！」

ロッヂ武田は中に入つてくるなり大声で村瀬を呼んだ。

村瀬は眉根を寄せて振り返り

「何事だ？」

と聞く。するとロッヂ武田は、ズレた眼鏡を直しながら肩で息をして

「おつ…お嬢様が…せつ星羅お嬢様が帰つてきましたーー！」

「何い？それは本当か？」

と聞き返すとロッヂ武田は何度も頷いて

「はいっ…さつき研究員の一人が知らせてくれましたー！」

その報告に驚いたが、試験管群の前の床に振り返り、少し何事かを考えるとロッヂ武田に頷いて

「わかった、私は後で行く……お前はお嬢様をお迎えする準備を急がしてくれ。」

「えつ？たつ隊ちょつ……」

と言いかけてロッヂ武田は止めた。村瀬の表情が固いからだ。

「わかりました……じゃつ先に行つてます。」

と武田は部屋の外に出て行つた。

それを見送ると村瀬は、銃を顔前で構えゆつくり試験管環境制御室に近付いて行く。

そして、開閉ボタンを押した。

再びエアーの抜ける音が実験室内に響く。周りを警戒しながらゆつくり中に入る。

中は更に暗く、制御装置の小さな赤い明かりしか見えない。一步一歩、警戒しながら奥へ進むと何かが目の前を掠めた。暗闇と一瞬のことなので反応が遅れ、何かがショックガンを持つ手に当たりその衝撃で銃を落としてしまつた。

「うひ……」

銃は重い音を鳴らし足元に落ちたようだつた。アジュラーチ村瀬は、冷静に銃を取るうと屈むと何者かに銃を蹴飛ばされ見失つた。

村瀬は銃を取るうとした姿勢のまま、闇を見据えた。誰かがいるのはわかる。息づかいが聞こえるからだ。

「……」

村瀬はゆつくり口を開いた。

「何者だ？」

第四十四章（後書き）

（＊＊＊＊）お待たせ致しました 第四十四章…いや～またまた気がつけば1ヶ月経つてました…本当に申し訳ない…なかなか次の展開が思いつかず苦労しました…こんな遅筆な私ですが、最終話に向けて頑張りますので見捨てず応援のほど宜しくお願ひします

今回は真面目笑

第四十五章

—数時間前—

悠畠の父、清、星羅そして一応おまけではじめ達は中に入つてから作戦を考えていた。そこで不意に疑問に思つた清がそのまま疑問をぶつけてみる。

「……ちょっと疑問に思つたんだけど……悠畠くんは何故ここへ？」

その質問にはじめの顔が曇る。清ははじめの表情を見て聞く。「はじめ、何か知つてるのか？」

と顔を向けると、それには悠畠の父も耳を傾ける。しかしひは、眉根を寄せて

「知りねえよ！」と吐き捨て俯いた。そんなはじめを星羅は黙つて見つめ、そして静かに口を開いた。

「……多分、私のせいです。」

そう言つた星羅に視線が集まる。

「それは……どういふ意味かな？」

と清は丁寧に聞き返すと、星羅は少し口ひもつたが何か決心したよう一度唇をキュッと結ぶと堰を切つたように語り出した。

「……信じられないかもしないけど私は……その……クローンなんです……」

「えつ？」

「つべつ？」

驚きの声を上げたのは清とはじめ、殆ど同時だった。

「やつそれで……恥ずかしい話なんんですけど……私、今朝方悠匂くんにこの話をそのつ……泣きながら話したんです。その時は彼、普通だつたんですけどもしかしたらそれが原因で……」

そう話す星羅に驚きもせず、悠匂の父は窓を見上げながら煙を吹かした。

「おじわんー、なんでおじわんは驚かねーの？」はじめが聞くと、悠匂の父親は何も言わず携帯灰皿に灰を落とすと再び煙草をくわえ

「やつ言えば……」

と窓に出したよつてポソリ呟いた。

「今朝、あいつが変な事を聞いてきたな……」

「えつ？ それで何を悠匂くんは聞いてきたんだす？」
と清が先を促した。

悠匂の父親は、煙を窓に向かって一度吐きそのまま見上げたまま話し出す。

「この世に人のクローンは存在すると思つたか？ とな……何故そんな話をしだしたのかそん時は良く解らなかつたんだが……そんな事があつたのか」

そう話を聞いて清は顎に手を当て考え込んだ。その横ではじめは

先程かわされた質問を再度ぶつけてみる。

「おじちゃん……話逸らすなよ。俺の質問に応えろよ」

「そつそつです！ あのつなんで驚かれなかつたんですか？」
と星羅も悠臣の父親に聞いた。

悠臣の父親は、ずっと空を見上げていた視線を「むら」に向かた。
はじめは顔をしかめて悠臣の父親を睨むと

「おじちゃん……もしかして、全て知つてたのかよ？」

と聞くと、悠臣の父親は煙草を携帯灰皿にねじ入れながら

「知つていたわ」
と田を伏せた。 その態度にはじめは頭に血が昇り勢い良く立ち上

がると

「もしかして……」
うなる事も初めてから知つてたんじゃねえのか
！

と食つてかかりそつた勢いのはじめを遮る様に清が口を開いた。

「そうなると、悠臣くんはアスラビ・尾崎 修造本人に接触を試み
る筈ですね」
と逸れた内容を訂正するように清は話す。

「……兄ちゃん！」

と言いかけたはじめを清は田で黙らせた。 それに不満そうにはじめ
は鼻をフン！と鳴らすとドカリと座る。

その様子を無視するかのように清は話を続ける。

「潜入後は、恐らくアスラビ・尾崎の血塗り向かう筈……星羅さん、」の時間帯は彼は今どこにいるだろ？、「

と清が質問すると星羅は口元に手を添えてしまふへ考え込むと、多分と付け足して

「」の時間帯なら、研究所のお父様の部屋にいる筈です」

と答える。再び清は難しい顔をして顎に手をあて

「なるほど」

と頷いた。そこへ悠田の父親が口を挟んだ。

「それは確実なのか？ そろそろとこう保証はあるか？」
と星羅に聞くと更に横からはじめが口を出した。

「そうだ。お前を攫らわれちまつてまだ動転しててあがけり中を
動き回つてゐかもしけねえじやん」

「それは……なこと思つ。お父様は足が不自由だから

と星羅は答えた。

「ふむ……確かに……。」

そう言つと悠田の父親は正門前に立つ先程の体躯の良い警備兵を手招きして、何やら話すと再びひりひりと床つてきた。

「中で騒ぐを起つてもらつていたが、アスラビ・尾崎は血塗を出

た様子がない。」「

と悠咲の父親は言つた。

「じゃあ？」

と清が聞くと悠咲の父親は頷いた。

「後は中を自由に動ける星羅ちゃんに頑張つてもうつしかない」

やつて悠咲の父親は、星羅を見ると清達も彼女に視線を向けた。皆の視線を受けた星羅だったがその表情は浮かない。

その様子にはじめが首を傾げると、彼女は俯き震える声で質問をしきた。

「もし、悠咲くんを助け出した後……お父様……父はどうなるんですか？」

その質問に一同は口を噤んだ。しかし悠咲の父親はだけは違つた。その質問に淡々と答える。

「中に居る潜入隊に確保させ、刑事課に引き渡す……それから

「先輩ー。」

淡々とその先を続けようとする悠咲の父親にたまりかねて清が止め る。

悠呂の父親は清に鋭い眼光を向け、低い声で話す。

「何だ？」

その気迫に負けず清は応える。

「それは、あまりにも酷です。今話さなくったって……。」

「何がいけない。彼女が知りたがっていたから応えただけだ。それに彼女は家族だ知る権利はある」

「だからって！ これから潜入させよいつと言つ時に、彼女の心を乱すような事をしなくて！」

激しい口論をする一人を見ていたはじめは、その口論の発端となつてしまつた星羅に目を移す。

彼女はこの口論を聞いてか、それとも先程の話の内容でなのか俯いて小刻みに震えていた。

幸い長い彼女の髪が上手い具合に表情を隠し、どんな表情をしているのかはじめの見る角度では良く分からなかつた。

「だつ、大丈夫か？……何て言つていいか……そのつ」

声を掛けてみたもののどう言えればいいのかわからず先が続かない。

そんなアタフタしているはじめに星羅は俯いたま

「大丈夫」と応えた。

しかし、どう見ても全然大丈夫なように見えないはじめは続ける。

「なんなら俺が代わりに……」
と言いかけると星羅は顔を上げ、何か決心したかのような強い面構えではじめを見て。

「大丈夫。ここは私に任せて欲しい。」

そう言って、星羅は無理にでも笑顔を見せた。

とりあえず作戦として、星羅は正面から潜入、中を自由に動ける彼女に悠呂の居場所を突き止めてもらい、彼女と一緒に研究所の外へ刑事課の到着時を見計らい、潜入隊に修造を確保してもらう、そして刑事課に引き渡すと言った作戦が纏まつた。

最後に悠呂の父親は付け加える。

「作戦というのは、スムーズにいけば万々歳だがそう簡単にいかない事もある。時と場合によつては、二転三転する事もある。もしもその時の事もそれぞれ考えておけよ」

その言葉に一同は頷いた。

「それじゃ……行こうか?」

と悠呂の父親は星羅の肩にポンと手を置いた。

「……大丈夫か？」

そつ悠呂の父親が聞いてやると、星羅の表情は堅いが強く頷く。

「じゃあ……行つてきます」

そつ言つと星羅は正門に向かつて歩き出した。その後ろ姿をはじめ
達三人は見送つた。

第四十五章（後書き）

お待たせいたしました 第四十五章！いやあ、頑張りました！後何話かで完結させたいのでなるべく内容を纏めるように練つておりますが、出だしが失敗してますのでなかなか難しい。しかし、私も頑張りますので応援の方よろしくお願ひします m(—_—)m

悠呂は銃を手に、警備兵隊長だらつその暗闇の中の人物と対峙していた。

数分前、自分が大声を出していた事に気付きその場をいち早く後にしようと研究室出口に向つた。

しかし扉に近づいたその体は、近付くのを止めた。

微かな衣擦れの音がしたのだ。何者かが外にいる……そんな嫌な感じがしたので悠呂は出口から静かに離れると、なるべく音を立てないように奥へ引き返し何処か隠れる場所はないかと辺りを見回した。するとあの試験管群の横に扉を見つけ、すかさず中に入り、暗闇の中を手探りで身を潜める物はないかと探す。

そうしている内に、エアーが抜けるような音が外から聞こえてきた。何者かが研究室に入つてきたのだ。悠呂の背中に冷たいものが走る。とりあえず、何かの棚らしき物の陰に身を隠すと膝に顔を埋め、この場が無事にやり過ごせるように祈つた。

しばらく何も音がしなかつたので悠呂はそつと膝から顔を上げ扉がある方に顔を向ける。

（何もないから、諦めたのかな……）

悠呂はその陰から四つん這いに、扉の方へ移動しようとして再び体を硬直させた。

……床についた手から判る。人が歩く振動。

悠呂は、四つん這いを解き再び元の位置に戻ると膝を抱えた。どうか、ここには入つてこないで…… そう祈るしかなかつた。

外から聞こえる。この扉のある場所へ進んでくる足音。向こうも警

戒しながら慎重にこちらに向かってくる音がする。悠呂の鼓動は息苦しい程にドコドコと音を立てている。

扉の外で相手の足が止まつた。もう息ができないほど、鼓動は跳ね上がる。そこへ

「たつ隊長！ 大変です！」

と誰かの呼ぶ声がした。

（隊長？ ジャあ……今、この扉の近くにいる人は……警備兵隊長さん？）

話の内容を聞こうと悠呂は、耳を澄ましてみたがそれ以外は、ごにょごにょと会話を交わすだらう声が聞こえるだけで、内容は聞き取れないでいた。

もしかして……と悠呂は思つ。あの倉庫の中に居た時の騒動と何か関係があるのだろうか？

すぐに会話は止み、足音が遠ざかるとしているのに悠呂は胸を撫で下ろした。

（ふう……やり過げたかな。暫くの人達の気配がなくなるまでここにこよう）

そう思い、天井を見上げた時だつた……傍近くでエアーが抜ける音がした。

「えつ？」

自分の声が掠れて聞こえた。

その警備兵隊長だろう人物がここへ入つてきたのだ。

（どうどうして！？ ここを出て行つたんじや……）

とつたに棚に背を押しつけ、息を殺した。田の前を黒い人影が通る。

「一。」

閉まりかけた扉の僅かな光で、相手の持つ何かが見えた。

（……武器！？）

悠呂はこれはまずいと思った。あの武器を何とかしなければと…

何かないかと辺りを手で探る。

指先に何かが触れた。その物に田をやると棚から落ちたのだろうか？ 分厚い本があった。

迷わず分厚い本を手にすると、相手に投げつけた。すると運良くその一冊が武器を持つ手の甲に当たり、暗いこの部屋にガチャリと鈍い音を響かせた。

（今の中に外へ！）

悠呂は棚の陰から飛び出そうと足を踏み出しだが、一步先にいるその人物は慌てた様子もなく落ちた武器を拾おうと屈んだ。

「！？」

慌てた悠呂は、相手が拾つより先に足で武器を蹴飛ばし、その武器を手にした。

手にして改めてその物が何かを知り、悠呂はドキリとした。手にしつしり重く、引き金のようなものがあるその手触り。

（じゅつ……銃？）

自然と喉が「ククリ」と鳴つた。それに驚いていると、声が掛かつた。

「何者だ？」

凄みのある、落ち着いた低い声……。

その声に悠呂は少し体を硬直させたが、暗闇の中のその人物を見据えた。勿論、応えるつもりはさらさらない。

ゆっくり悠呂はその人物の後ろに廻る。

相手は自分が見えていないのか、田で追おうとしない。

そのずつしり重い手の中の物を相手の背中に突きつけた。相手が一瞬体を強張らせたのが分かる。

しかし、すぐにカチカチと鉄が鳴る音がする。悠呂はなんの音だと手元を見ると、自分の手が小刻みに震えていた。慌ててあいた手で震えを抑えたが、多分この震えは相手に伝わつただろう。

悠呂はなるべくはつきり、低く調子の声で言い放つ。

「そんな事はどうでもいいんだ。あなた、アスラビ・尾崎 修造の居場所、知ってるんでしょ？」

しかし、相手は正面を向いたまま応えようとはしない。

悠呂は構わず続けた。

「連れてってもらうよ。さあ！ ここから出ろ！」

なるべく語氣荒く言い放ち銃でその人物をつづいた。

相手は何も言わず従い、研究室に出る。悠呂もその人物に銃を突きつけたまま、ついていく形で一緒に出た。

研究室に出て、初めてその人物が見えた。あの試験管の中の発光する液体でうつすら照らされたその相手。

自分より頭一つ分背が高く、がつしりした体、髪が綺麗な緑色、チラリと窺い見るその顔は体格から想像も出来なかつたが、かなり年を重ねている人物だつた。

相手は、何も言わずそのまま歩みを進め、第五研究室を出る。悠呂も警戒しながら出た。

廊下に出てびっくりしたのだが、悠呂はつきり外にも誰かいて、もしかしたらこの銃を使わなければいけないかも知れないと覚悟し

ていたのだ。しかし、廊下には誰もおらず物音すらしない。何だか奇妙だと首を巡らしながら、廊下を歩き研究室が見えなくなる角を曲がり、暫くすると前を歩くその人物が顔をこちらに向けた。悠斗は身構えた。

「ふつ……随分、幼い侵入者だな。」

そう鼻で笑う。それに少しムツとした悠斗だが何も言わなかつた。相手は正面に向き直り、歩みを進めながら尚も話しかけてくる。

「そんな坊やが、所長になんの用だね？」

無論、応える気はない。黙つて彼の後を歩く。その人物はまた、チフツといじりを窺い見たが再びふつと笑つて前を向き歩く。

「まあ～いいや、連れて行つてやる。所長のところへくな。」

何か含みのある声でそういうと歩みを速めた。

第四十六章（後書き）

（・・・・）大変お待たせ致しました
かなり間があいてしまいましたが、やっと更新できました笑
主婦業の傍らの執筆で……（罪悪感）

（・・・・）うつ嘘です。確かに主婦業のやることをやつてから執
筆をしようとしたのですが、そのつ意欲を削がれてしまいましてね
(言い訳モード) それで、気が付いたらですね、またゲームのコン
トローラーを握つて逃避してたんですねえ～人間つてほんつと不思
議ですねえ（水野晴郎風）

（・口・）ごめんな～ざい！頑張るから見捨てないでえ泣

少し、こつもよつと詮めになつております。『トトモトセー』。

はじめ達に見送られた星羅は正門に着いた。その場所には、先程悠田の父親と話をしていた年若い警備兵と体格の良い警備兵、一人が立っていた。

「もう、準備はよろしいですか？」

そう柔らかい声で年若い警備兵が聞いてきた。星羅は真正面を向いたまま、ゆっくり頷くと今度は体格の良い警備兵がハキハキした声で補足ですがと話始めた。

「予め、あなたが帰つて来たことは中にふれて回つています。中に入りましたらいつものあなたでいらして下さい」

と軽く説明を加えた。星羅はその説明に同意するように強く頷いた。それを見た体格の良い警備兵は、星羅に背を向け少し前に出ると右手にはめた何かを操作する。すると、軋む様な音をたてゆっくり門が開いていく。

開いていく門にじつと目をやりながら星羅は大きく深呼吸した。

正門が開ききると体格の良い警備兵はこちらに向き直り、右手を揃え額近くに持つていき、敬礼をした。その横でも年若い警備兵が敬礼をし、あの柔らかい声で

「お気をつけて」

と見送つてくれた。

一人に見送られ、しつかりした足取りで星羅は中に入る。

何もない原っぱ、一見、空き地の様に見えるこの場所……。

その中程まで歩いて、立ち止まる。星羅は足元に目をやると、軽く地面から振動が伝づ。

禁止区域の中に入つて行く星羅をはじめはフェンスから少し離れた、小高い土手から見守つていた。

どう見てもただの空き地に見えるその場所に、研究所が存在するのが信じ難く、どうやつて中に入つていくのか興味津々だつた。すると、彼女の立つている足元からゆっくり現れた鉄扉に驚愕した。

「なつ……なんだありや！？」

一人驚きの声を上げていると、後ろに何台かの車が止まつた。何だろうとはじめが振り向くと、丁度一台の車から一人の男が降りてきた。

一人は、清潔感漂うピシッとした淡い色のスーツを着て若く、いかにも助手といった感じの男、もう一人の男は、悠呂の父親と同年代か少し下位の年格好で、髪が伸び放題のボサボサ、髭も何日も剃っていないような無精髭、何となくダルそうな猫背の男だつた。

（うえつ……なんだあいつ等）

はじめが見ていると、猫背の男のドロリとした目と合つてしまつた。

（うわっ……あの、気持ち悪い！おっさんの目と合つちゃつたよ…）

その男二人組は、真つ直ぐこちらに向かつて來た。

（うわうわっ！　うつち来るんじゃねえ～）

しかし、その二人組ははじめではなく、悠呂の父親の後ろに立つた。

（……なんだ？）

しかし、悠呂の父親は顎に手を当てたまま何か考へごとをしているようで、その二人に気づいていなかった。

横に立っていた清がようやく気づき、一人に声を掛けた。

「あつ……これは、『ご苦労様です。澤田刑事、アゲイス刑事……先輩、刑事方が来られましたよ。』」

そう清に言われて、ようやく後ろに振り向いた。

「おう……『ご苦労様。』」

悠呂の父親が声を掛けると、猫背の男はニヤリと笑つて

「偉くご無沙汰してましたねえ……浅之木警部。」

とガラガラの嗄れた声で挨拶した。

「まあな……。早速本題に入らせて貰う。」

と悠呂の父親が言つとその二人は、顔付きを変え話を聞く態勢に入つた。

はじめはそのボソボソと話しているのを背中越しに聞きながら、星羅があの鉄扉に入つて行くのを見守つた。

星羅がその鉄扉に入り、坂になつているスロープの道を下ると人だかりが出来ていた。

星羅の姿が見えるなり、その人だかりは口々に

「お嬢様、お嬢様」

と出迎えくれる。それに有難うと答えながらスロープの坂を下りきると、鉄扉は自動的に閉まり、平坦な道にゅっくり戻る。

いつも出迎えくれるアジュラーチ村瀬の姿がないのに気付いた星羅はその人だからの中、首を巡らし探してみた。

「武田をやつても見あたらず、すぐ傍にいた研究員に聞いてみる。

「村瀬が見えないけど……」

すると聞かれた研究員も辺りを見て

「そう言えば……見当たりませんね。どうしたんでしょう」と首を傾げた。嫌な予感がする。星羅は人だからを突き進んで奥に行こうとした時、一人の研究員に肩を掴まれた。振り向くと、眼鏡をかけたちょっと小太りな研究員だった。

「……？ あなたは？」

と聞くとその研究員は慌てた様子で、星羅の肩から手を離しますせんと頭を搔いた。

「第三研究室、オロダ・高城の元で助手をしているロッヂ 武田といふ者です」

と頭を下げる、すぐに顔を上げ先を続ける。

「隊長は、少し用事がありまして外しております」

「？」

何か胸騒ぎがある。星羅はそう感じたがそれを悟られぬように平静を装い

「そう」

と応え奥に進もうとするとき再び、ロッヂ武田の

「お待ち下さい」と声が掛かった。

「どうして？ 私はお父様に……」

と言つとその研究員が星羅に失礼と耳元に寄り他に聞こえぬような

声でいつ話した。

「……実は、侵入者が入った可能性があります。今、それを隊長が調べておいでです。ですので、お嬢様は安全の為にちりこ……あつ！」

『侵入者』と聞いて星羅はすぐに悠臣だと悟った。ロッヂ武田の話を最後まで聞かずその場を飛び出し走った。

（何とか、悠臣くんと会わなきや……）

そう思つていると、不意に清の声が蘇つてきた。

『わつなると、悠臣くんはアスラビ・尾崎 修造と接触を試みる筈ですね』

それに気付いた星羅は

「お父様……！ お父様は？」

と声を漏らすと、一呼吸に向かつてゅつたり歩いてくる研究員に飛びつき

「お父様は？ 今日はどちらに？」

その星羅の形相に少し、驚きながらその研究員は

「おいでですよ」

と告げると、星羅は有難うと言葉を残し父親の自室へと急いだ。

その途中、第五研究所の前を通り扉が開け放したままになつてい

るのに躊躇ひ足を止めた。

後ろから追いかけてきたロッヂ武田は肩で息をしながら

「お嬢様……」とです。侵入者がいた場所……」

と吐息紛れに話す。星羅は、しばらく扉を見つめると迷わず中に入つた。

「おっ……お嬢様！　まだ中に侵入者がいるかもしません！　危険ですよ止め下さい！」と止めるのも無視して部屋の中に入ると電気を点けた。

部屋の中は資料や本が散乱している、これはいつもの通りだと星羅は気にはせず床や柱にしきりに目を凝らす。

村瀬と争つたかもしれない——

血痕などはないかドキドキしながら探す。もし怪我などしていたら……そう思ひと胸が痛んだ。

必死に床や柱を見ながら奥に入り、ひとつのお場所で立ち止まつた。その床からゆづくり視線を上げ、星羅は小刻みに震える……。

「……悠田くん、これを見たんだ」

そつ茲くと、田の前に怪しく緑色に光る螢光色の試験管群を見て涙を流した。

第四十七章（後書き）

今回は、間隔が少しあが開いておりません。頑張って書きました。一応、完結は50章と思っておりましたがなんせ纏めるのが苦手な愁真です。恐らくプラス5辺りで完結させることになりそうです。それまでお付き合い下さい！完結の暁には評価などしていただけると凄く嬉しいです。長くなりましたが……次回をお楽しみに

第四十八章（前書き）

この章も少し、長めです。読みづらいかと思われますが、ご承下さ
い

悠呂は、目の前の人物に気を張りながらついて歩く。

静かな周りは、二人の歩く靴音が響くだけ。相手は歩調を緩めず自分のペースでグングン歩いていく。背丈の違う悠呂は、それを小走りに追う形で相手の背中を睨みつけながらついていく。すると相手が急に立ち止まり、壁に向かつて何やら右腕を掲げ操作している。何だらうと悠呂も歩みを止め、相手の様子を見ていた。暫くして、急にその壁がバシッと音を立てた。次に電気が帶びたように光るとエアーが抜けるような音を出し壁がゆっくり、左右に開いた。

「！？」

悠呂が驚いていると、相手は再びこちらにチラリと目をやつフッと笑う。

「ああ～どうぞ、こちらが近道になります」

と相手は悠呂を中に促す。

戻かもしれないと警戒した悠呂は彼を睨みつけながら

「あなたから、先に入つて下さい」

と銃を向け先に入る事を拒否した。相手はヤレヤレと言つた感じで両手を上げ、溜め息を零すと

「では、お先に」

と先に入った。それを見届けた悠呂は、警戒しながらゆっくり彼の後に続き、中に入る。

中に入ると景色が一遍していた。先程の全体真っ白な空間から少し落ち着いた色合いに、廊下は冷たい鉄板からフカフカの渋みのあ

る朱色の絨毯が敷いてある。壁や天井にはシックなベージュ色の壁紙。

その雰囲気に、驚いて首を巡らしていると後ろでヒィー音を出し、先程入ってきた壁が自動的に閉じていく。

そちらに気を取られないと、後ろから

「いらっしゃだ

とその人物は歩き出した。悠斗は、先程の壁に一瞥すると慌ててその後を追つた。

長い廊下を歩きながら、悠斗は壁や飾り棚等に手をやる。3D絵画やら、古代風タペストリー古い花瓶など、悠斗の手には珍しい骨董品ばかりだった。

その中の3D絵画の一つを見つけて、悠斗はおもむろに足を止めた。

その絵には小さな女の子が花冠を頭に乗せ、幸せそうに微笑む姿があつた。

真正面から見ると写真のようで、左右に動いて見てみると、ちゃんと横から見た絵になつていて。

ゆっくり真正面に戻つて、その絵の中の女の子を見つめた。幼いが、これは星羅なのだろう。頭のてっぺんから少しづつ色が抜けて白銀色になっている。

絵の中の彼女は幸せそうに微笑んでいる……今は一度も笑わない彼女の面影がチラついた。

そして、すぐに涙に濡れた彼女の顔が浮かび、忘れていた怒りが込み上げてきた。堪らず拳を硬く握る。

そこへ横から低い声がした。

「これは、星羅お嬢様が三歳の頃の絵だ……」

はつと隣に田をやるとその人物は愛おしそうな眼差しで、その絵を見ている。悠呂は何も言わず、再び絵に顔を戻した。

「彼女はよく、邸を抜け出す癖がありましてね……」

いきなり隣の彼はそう切り出した。悠呂は田だけを彼にじっと向けた。その彼も目だけを悠呂に向けたまま、話を続ける。

「つい先頃、そのお嬢様の行方が知れなくなつた……私の部下によると、ある少年に攫らわれたと報告を受けた」

そう淡々と話しながら彼はじっと悠呂を見下ろしている。悠呂も無言でじっと睨み返す。

彼は暫く口を噤み、悠呂を見ていたがすぐに背を向け歩き出した。悠呂も何も言わず後をついて行く。

歩いて暫くすると再び、低い声で話しだした。

「そのお嬢様が、先程ここへ帰つてこられた」

「えっ？」

悠呂は思わず声を出してしまった。

その声に相手は、やはりと言つた視線を背中越しに向けてくる。その視線に悠呂は眉を寄せ睨み返し、無言で歩く。

田の前の彼は、悠呂から視線を逸らすと、歩くのを止めた。すつと悠呂は身構えたが、襲いかかつてくるよりはなく彼の先に田をやると一つの扉の前に立っていた。

田の前の人物は扉の横に設置されているタッチパネルの呼び出しボタンを押した。ブーとブザー音がなる。

(……するとここが)

と悠呂が扉を見つめていると、タッチパネルモニターのスピーカーから老齢の嗄れた声で応答があった。それに目の前の彼は、チラッと一度こちらを見てタッチパネルに顔を近づける、会いたい旨を伝えると、余程この彼を信用しているのか、中の相手は容易く部屋のロックを解除した。

目の前の扉がエラー音を鳴らし、静かに開いていく。悠呂は鼓動が早くなつた。もうすぐ目の前に人物と接触をする。手が汗ばんでくるのが分かつた。

先に目の前的人物が一步中に入り、こちらに体を向けると
「入れ」

と目だけで合図をしてきた。

悠呂は喉元をゴクリと鳴らし、右手を少し動かした。力チャヤリという音を聞いて手に持つていた銃に目をやつた。その銃を暫く見つめて、静かにズボンの腰にねじ込むと、ひとつ息を吐いて中に進む。

中は大きな窓があるようだが、分厚いカーテンで閉め切つてあり、少し薄暗く先程出てきた研究所の様な薬品の匂いが微かにする。

目の前には、年季の入つた書斎机がドンとあり、良くなは見えないが机の上に写真立てが置いてあつた。机の側に背の高いスタンダードランプがついている。明かりはそれひとつだつた。

一通り、首を巡らし警備兵の彼の目の前に立つと悠呂は顔を見上げた。彼は、その視線を受けると顎であそこだと示した。示された場所に目をやると、書斎机の横にもう一つ開け放したままの扉が見えた。そこから、微かなもうひとつ光りが漏れており、人の影が薄い色の絨毯に映つていて。

「修造」

と呼ばわり、横にいた警備兵の彼はその扉の中へ消えていった。

何事か話しているのだろう、絨毯に映る影が一つ動いている。

すると、すぐに一人の老人が車椅子で現れた。その後ろには先程の警備兵の彼も付き添っている。

悠臣は目を見張った。あの国立図書館の書物の中で見た人物が目の前にいる。そして、その写真の中よりえらく年老いている事にびっくりした。

今にも倒れてしまいそうな意氣消沈しきった表情、顔色は悪く土氣色であるで死人のようだった。

(これが……アスラビ・尾崎・修造――)

尾崎は入り口近くで茫然と立つ少年に目を細め認めると、傍らに立つ警備兵の彼に

「なんだ、あいつは？」

と声を掛けた。

警備兵の彼は落ち着いた様子で応える。

「修造に話があるそうだ

といひらを見た。

「何？ 私に話だと？」

と怪訝そうに尾崎は彼に聞き返した。

彼は静かに

「はい」

と答えた。

すると尾崎は、再びソファに腰を向けた。

第四十八章（後書き）

続けて投稿となりました。このシーンは構想を書いてても早く読者様の目に入つて欲しい、と思っておりました。それで頑張つて書き込み致た次第です。完結に向けて日々、苦戦しておりますが何卒応援のほどよろしくお願いします。感想、ご意見は隨時承つております

次回も楽しみにしていて下さい。

星羅は肩を震わせ泣いていると、ロツチ武田が後ろから声を掛けてきた。星羅は慌てて涙を拭き、何事もなかつたように振り向くと。

「お嬢様、ここはまだ危ないかも知れません。早々に退室して下さい」

辺りをキョロキョロしながらロツチ武田は言う。

星羅はそれに頷き、先に研究室の出口に向かうロツチ武田の後を追つて歩いた。そして、出口付近で一度振り返り目を瞑ると一つ深呼吸して部屋を出た。

部屋を出たところで星羅は、ふと疑問に思ったことをロツチ武田に訊いてみる。

「村瀬は何処に行つたのかしら？」

その質問には、彼は首を傾げて
「わかりません」

と申し訳なさそうに頭を搔いた。

仕方ないと軽く溜め息をつき、次に父親は自室にいるのかと問うとこれには頷くが、なんだか自信なさげだ。全く以て役に立たない男である……。

星羅はそんな彼を置いて、先を急いだ。

「あつ！ あつお嬢様！ お供します！」

としつこくついて来た。ロツチ武田がついて来るのも構わず、先へ先へ早足で歩きふと足を止めた。

（しまつた……近道をしようと思つたけど、彼がついて来たんじや

……）

星羅は後ろにキリッと振り返った。いきなり振り向かれた本人は、驚いた様子でその場でたらを踏む。走つてついて来ていたのか、丸い顔が真っ赤になつて滝の様に汗だくになつていた。

「あなた、もうここでいいわ」

そう言つと彼は口をアワアワして、理由を説きたがる。

「お父様と一人でお話がしたいの」

落ち着いた声色で応えると、渋々とこつた感じで星羅に背を向けて元来た道を戻つて行く。

星羅は、その背中が完全に見えなくなるまで見送ると、すつと踵を返しそく側の角を曲がつた。

数歩あるいて辺りに人がいないか確認すると、壁に手を当てるやう。

「指紋照合を開始します」

と壁から機械的な声があつたかと思つとすぐ「また

「指紋照合が完了しました」

と返つてきたので、星羅は壁が開くのを待つ。しかし、一向に開く様子がない。おかしいと思つた星羅は壁にもう一度手を当てる

「ロック確認」と声を出した。

「ロック確認します。しばらくお待ち下さい」

と機械的な声がまた応対する。

数秒待たずには再び声が返ってくる。

「只今、ロックされています。ロック者番号〇〇〇一……ロック形態種別……緊急警備……Bパターン」

星羅は機械的な声に耳を傾けながら、眉を顰めた。

しばらく壁を見つめ、軽く拳で壁を叩くと諦めたようにそのままの場を離れ奥へ歩いた。

（遠回りになるけど……仕方ない。研究員が使う通路を使つしか……）

自然、歩く速度が速くなる。気がつくと一心不乱に走っていた。

（……あの角を曲がれば、お父様の部屋に繋がる廊下に出れる）

足がもつれそうになりながら角を曲がったその時、派手に何かにぶつかった。

「やあ……」

「うう……」

星羅は勢い良くその場で尻餅をついていた。どうやらぶつかったのは人らしい……相手も同じように尻餅をついたのか痛そうに声を漏

らしている。

星羅は痛い腰をさすりながら顔を上げ相手を見た。相手も痛そうに腰の辺りを押さえ、顔を歪めている。

少年だった。歳は星羅より下のようだ。しかし、この研究所では初めてみる顔だ。

相手も一いち方に気付いたようすで、あつとこう表情をした。

端正な顔立ちに、色白でそれに映えるようなエメラルドグリーンの綺麗な瞳をした少年。

彼に見入つていると、彼が先に立ち上がり星羅に手を差し伸べた。

「あのっ……ごめんなさい。 大丈夫？」

とても耳に優しい声だった。星羅は彼の綺麗な瞳を見つめながら、手を借り立ち上ると背の低い彼の登頂が見えてはつとした。

彼のサラサラした髪色は綺麗な栗色だが、今見る登頂は色素が抜け星羅と同じ色をしている。そこですぐに彼も誰かのクローンなのだと気付いた。しかし、こんな子は星羅が見ていた子供達の中でも見たことがない。

ましてや最近生まれたのであればもっと小さじ筈だ。

見た感じ、この少年の年頃は七、八歳くらいだ。

「あなた……誰？」

星羅がきくと、きかれた本人はびっくりした表情をしたがすぐに顔を曇らせた。

「名前、ないの？」

じをくと彼は首を横に振り、

「シユウ」

とだけ呟いて俯き、また暗い顔をする。

「セツ、シユウひまつひの」

と彼の前に屈もうとした時、すぐ側のドアが開いた。

そちらに顔を向けると、一人の研究員が飛び出してきてシユウに手を止めると

「あつー、シユウーいないと思つたらまた！」

とシユウの腕を取つた。シユウはしまつたという顔をして捕まつた腕を必死に解こうともがいた。

「勝手に出ては駄目だといつたらつーまだ検査も途中なんだぞ！」

研究員は嫌がるシユウを抱き上げると、シユウはジタバタともがき、なんとか逃げようとした身を捩る。

「その子は？」

とこう質問に、やつと星羅の存在に気付く研究員は、慌てたようになつて呟つた。

「おつ……お嬢様！」

その隙にシユウは研究員の腕に噛みついた。

「あつー、」

研究員の腕から逃れたシユウは、あつかんべをしてすぐに星羅の背に隠れた。

痛そうに腕をさすりながら研究員は、星羅の背に隠れたシユウに目をやり、すぐに星羅に視線を戻した。

研究員は何か言いかけて、すぐに口を閉じてしまった。

そして無言で一礼すると、大股で星羅の後ろに行きシユウの腕をまた掴むと、暴れるシユウを小脇に抱えすぐ側のドアに消えて行つた。

悠呂は暫く無言のまま、アスラビ尾崎と対峙していた。

先に視線を逸らしたのは、アスラビ尾崎の方だった。

彼は車椅子を手元のパネルで器用に操作して書斎机に向かい、机の裏側の何かを操作した。

数秒して悠呂が立つ田の前にゆっくりと応接セットが浮上してきたのだ。

悠呂は少しその場を後退りし様子を伺つ。

アスラビ尾崎が書斎机から離れるのを見て、あの傍に控えていた老齢な警備兵が、何も指示される分けでもなくキビキビと慣れた様子で応接椅子の一つを脇へ避けた。

そこにアスラビ尾崎は車椅子ごと収まるごと、こすりに田を向け、向かいにある卵型の椅子の一つを悠呂に勧める。

悠呂はアスラビ尾崎をじっと見たまま躊躇いもせず、勧められた椅子に腰を降ろした。

悠呂が椅子に腰を掛けるのを認めるごと、アスラビ尾崎は改めてメラルドグリーンの瞳で悠呂を見つめる。

悠呂も見つめ返すが、見るからに弱りきっている人物の何処にこ

んな力強さがあるのだと疑う程、ギラギラした瞳が悠呂を捉えて離さない。

すると、アスラビ尾崎のガサガサで色の悪い唇が微かに動いた。

「随分と若い侵入者だな」

嗄れた声だった。あの老齢の警備兵と同じ科白。

しかし、じゅうらは関心した風な話し方だ。

間を於かずアスラビ尾崎は、悠呂の瞳を真っ直ぐ見たまま続ける。

「私に……話があるそつだが？」

やけに余裕のある口調だ。いや、むしろ小馬鹿にしたような……。

悠呂は小馬鹿にされたような感じがして、くつと歯を噛んだ。

アスラビ尾崎は悠呂の心えるのを、じつと待つている。

子供だから甘く見てくる。ありありと分かる態度に悠呂の怒りは増す。

その怒りが、自分でも予想だにしない言葉を発していた。

「僕が、あなたのお嬢さんを攫つた者です」

アスラビ尾崎の右眉がピクッと動いた。

悠斗は視線を逸らさずじつとエメラルドグリーンの瞳を見返す。

しかし、相手の反応はそれだけで土氣色の顔からは表情が伺いしない。

いや、もしかしたらかなりの衝撃を受けたのかもしれない。それからの会話は、お互い見つめ合つたまま無言だ。

一人が口を噤み、暫くして傍に控えていた老齢な警備兵が口を開いた。

「……間違いない。部下が言つていた特徴が一致している」

と低い声で告げると、石像のように動かなかつたアスラビ尾崎が重い溜め息を漏らし、車椅子の背もたれに体を委ねた。

「ふむ……」

そう唸つたつくり、目を閉じてしまった。

悠斗は引いてはいけないと、声を出した。

「あなたに一言いいたくて！ わざわざ、侵入者みたいな真似までして……僕は来ました」

そう話す悠斗の言葉に、アスラビ尾崎は目を開き体を起した。

「ほお～」

それで？と言わんばかりに悠臣の瞳を再び見つめてくる。

負けてたまるかと悠臣は続けた。

「僕は、あなた達が禁止区域の……ここ、地下で何をやっているか知っています！」

初めてアスラビ尾崎の表情が変わった。それも驚きの表情ではない。目を細めて興味深そうな顔だ。

怯むなど自分を叱咤しながら悠臣は続ける。

「あなた達は、法律に則った皮膚や骨等の医療用の物でないものを人間そのもののクローンを作っている！」

田の前のアスラビ尾崎は、膝の上に両手を組みそこに顎を乗せて悠臣の話をじっと聞いてくる。先を続けると言わんばかりに――。

「……」

その余裕の態度に悠臣は頭にきていた。

「……君の言いたいことはそれだけかね？」

尚も余裕な態度を見せるアスラビ尾崎。

「あなたは、自分が何をしているのか分かっているんですか！」

悠臣は思わず声を荒げてしまった。

すると、アスラビ尾崎は何を思ったのか狂ったように笑い出した。

そんな嘲け笑うアスラビ尾崎は、おもむろに火を点け紫煙を燻らせた。

ひとしきり笑うとアスラビ尾崎は、射抜くような眼を向け逆に悠呂に質問してくれる。

「私達のやつている事を知つてゐる……か。じゃあ、聞くが君には大切な者はいるかね？」

「……大切なモノ？ それが何だと言つんです？」

「君には、大切に思う人間がいるかと訊いたのだよ」

悠呂は、アスラビ尾崎が言わんとしている事を詰りかね、無言で返答を返す。

「……無言は肯定と捉えてよいのかな？」

「……」

「……まあいい。そこで本題だ。」

そう言つと、アスラビ尾崎は近くに控える老齢の警備兵に顔を向けて手をひとつふりすると、彼は書斎机から葉巻を取り出しぬるアスラビ尾崎に渡す。

肺に含んだ煙を一吐きし、話し出す。

「もし、その大切な者が理不尽な死を遂げた時……君ならどうするかね？」

「理不尽な死を遂げた時？」

悠呂は葉巻から出る煙に田を向けたまま問い返した。

アスラビ尾崎は、悠呂の言葉に触れず先を続ける。

「その大切な者が、理不尽に誰かの手によつて殺されたり、助けられるかもしれない命を助けられなかつたら……君はどうするかね？ そして、何を望むかね？」

悠呂はその言葉にやつと質問の意が分かつた。

アスラビ尾崎は、再び葉巻を吸う。

その二人の様子を傍に控える老齢の警備兵はじつと見ていた。

第五十章（後書き）

お待たせ致しました 五十章です……いや～あと五話で完結させる
ことが出来るのでしょうか…少々不安です笑

今回は、『念願叶つた対決』でしたので構想がかなり苦戦を強い
るものでした。しかも、まだ途中だしね…汗 まつ！何とか頑張りま
すので応援の程宜しくお願ひ致します！

(、 、 、) あ～また前回の章みたいにこの後書き消えるんじゃな
いだろうか？ちょっと心配……管理人さんはあの時の対応として『
修正からまた後書き書いて』て言つてたけど…私なんかその場の気
持ちで後書きかくから、いきなりまた書いてって言われても書く気
になれなくて……どうか、この後書きが消えませんように！

第五十一章（前書き）

最終話に向け、多少文字数を増やしております。読みづらくなるかもしだれませんがご了承下さい。

悠呂は静かに応える。

「例え……理不尽な死や助けられずに悔しい思いをしたとしても……僕はあなた達のようなことは……しない」

言ひ終えると急に目頭が熱くなる。それを隠すよつに悠呂は俯いた。

「ふつ……果たして、それは本当かな？ 実際その場でお前の愛しいモノが病で倒れたらば？ 友人が目の前で刺し殺されたら？ お前は今言つた答えとは違う行動をするのではないか？」

そつ言われ顔を上げた悠呂は、アスラビ・尾崎の瞳を見る。

エメラルドグリーンの瞳……綺麗な色だがどこか淋し氣で深い色。

その色と深さに惑わされたか、悠呂の脳裏に父母や兄、はじめの微笑む顔が走馬灯のように浮かんでくる。

「……愛しいモノが……」

はつと氣が付き、口を噤む。

（……何を、言つてゐるんだ！ 僕は…）

アスラビ・尾崎に目を遣ると、彼は口端を上げてこぢりを見ていた。

「君せめてひから黙つてこる事と、口にする事が相反してこるようだな？」

心を壊こぼしてられたようで、何だか悔しかった……。悠斗は硬く拳を握る。

アスラビ・尾崎は葉巻を村瀬の持つ灰皿でねじ消すと、先を続ける。

「ふふふ。 私に文句があるといいく飛び込んできた時の威勢はどういやつたのかね？」

また、馬鹿にされて……。 悠斗は怒りで頭に血が昇るのを感じ、唇を噛み締めた。

そんな悠斗の表情に一瞥すると、アスラビ・尾崎は氷のような冷ややかな瞳でいつに放つ。

「君の戯れ言に、付き合つ時間はもう終いだ。 ひとつと帰りたまえ……村瀬！」

後ろに控える村瀬に顔を向け、帰らせるとこいつに國をすると村瀬は頷きこじりに顔を向けると、ゆっくりと悠斗に近づいてくる。

(……まだ、話は終わっていない…)

悠斗は腰にねじ込んでいた銃を、素早く抜き取りアスラビ・尾崎に向けて叫んだ。

「動かないで下さい！ 撃ちますよー。」

それを田の当たりにした村瀬は、表情を一つも変えずその場で足を止めた。

銃を向けられた本人も、表情一つ変えずゆっくつこひりて振り返る。

「何のマネかね？」

抑揚のない声で問つてくる。

悠呂は重い銃口を両手で支え、アスラビ・尾崎に向けたまま力強く応える。

「まだ、話は終わってません！」

そう叫ぶ悠呂を、アスラビ・尾崎はじつと見据える。

悠呂も負けじと見つめ返す。 蹄めたのかアスラビ・尾崎はサッと右手を上げ、村瀬に下がるよう合図した。

村瀬も了承し、無言で元の位置に下がる。

悠呂は銃口をアスラビ・尾崎に向けたまま話す。

「あなたは、僕に訊きましたよね？ 大切な者はいるか？ と

アスラビ・尾崎はじつとこちらを見たまま黙つている。 悠呂は、続ける。

「今度は僕から訊きます。
あなたには大切な人がいますか？」

そう言いながら悠呂がそつと銃口を下げるといふと、彼はそれに合はせたようにゆっくり瞳を瞑つた。

「いる……はずですよね？」
あなたにとつて大切な……最愛の娘さ
んが」

アスラビ・尾崎はうつすら瞳を開け、応接机に視線を落とすと微かな声で問う。

「それで……君は、何が言いたいのかね？」

悠呂は怯まず先を続ける。

「質問を変えます。……あなたは、作られたモノの気持ちはわかりますか?」

その質問に、アスラビ・尾崎の薄らと開けていた瞳が見開かれ急に頭を上げた。

卷之三

「なつ……何？ 今、なんと？」

た。 悠呂の返答を待たず、彼はおもむろに後ろに控える村瀬に振り返つ

「お前！ またか？」

と問われたが、村瀬は無言で首を横に振った。

アスラビ・尾崎は村瀬の返答を見て、再びこひらひら顔を戻すと信じられない事を聞いたと言わんばかりの表情で肩を落とす。

暫くの間沈黙に包まれたが、程なくしてアスラビ・尾崎の微かな声が悠呂に向けられた。

「お前は……何を言つておられるのだ？ 何のことだ？」

俯いてブツブツと話すアスラビ・尾崎の反応に悠呂は、かなり驚愕していた。しきりになぜだと、呴く彼の姿を見てひとつ結論に辿り着いく。

悠呂は恐る恐る口を開いた。

「あなたは……もしかして、彼女に真実を話されてはいないのですか？」

と聞くといきなり彼は顔を上げ、手を剥き出し興奮氣味に叫ぶ。

「当たり前だつて……何故、話す必要があるーー」

その表情は阿鼻叫喚だつたーー。

（彼は……隠し通せておると思つておる。 彼女の出生の秘密を…）

悠呂は彼の憎しみに籠もつた視線が、逆にいたたまれなくなり、顔

を背けた。

（……でも、彼女は自分が何者なのか……既に気づいている——）

悠呂は固く瞳を閉じると、胸に手を当てた。

（……胸が苦しい。彼女が気付いていることは、彼以外は知っているんだろうか？）

悠呂はそつと、村瀬に視線を遣つた。

しかし、村瀬は表情ひとつ変えず、こちらの様子を見ている。

「まさか！ お前が！」

いきなり、アスラビ・尾崎に叫ばれ悠呂はハッと彼を見た。目の前の老人は、悪魔のように血走った眼で悠呂を睨みつけている。握り締められた肘置きは、シシリと悲鳴を上げる。

「村瀬！ 銃を寄越せ！」

アスラビ・尾崎は悠呂に向かってそのまま背中に控える村瀬に叫んだ。

その要求に、あの無表情だった村瀬の顔が変わる。

「しゃつ……修造つ！ しかし……」

渋る村瀬に構わず、口から泡を吹きながらアスラビ・尾崎は吠える。

「早くしろ！ 何を知ってるか知らんが、コイツをここから出しません！ 今すぐ消してやる！」

その剣幕に悠呂は、危機迫るものを感じとつて膝元に握る銃を更に硬く握り締めた。

「村瀬！ 何をしとるー。早く寄越せー。」

獸のよつて叫ぶアスラビ・尾崎に悠呂は意を決して叫ぶ。

「彼女はー。」

そう言つたといひで一人の視線は一いつ朶を向いた。

その視線を受け、悠呂は続ける。

「彼女は、自分が何者なのか気付いていますー。僕が話したのではなくて、彼女じつ……」

銃口を構える重い音がした。

「それ以上は言わせんー。」

そう言つて銃を向けてくる相手は、アスラビ・尾崎ではなく後ろに控えていた村瀬だった。

今にも引き金を引きそつた気迫に、悠呂は手に持った銃を構えた。

間をおかず、手に持っていた箒の銃が床に重い音を立てて落ちた。

「……ひつひー。」

すぐに手の甲に火傷のような痛みが走る。

痛みに歪ませ顔を上げると、村瀬は田の前に来ておりその銃口から湯気のようなものが立っていた。

「……痛いか？ これはお前が持っていた警護用電流銃ではない。殺傷能力のある最新レーザーガンだ」

そうこうと、銃口を悠岳の眉間に向けた。それを見ていたアスラビ・尾崎は狂ったように高らかに笑う。

「ひやはははははは！ 村瀬、いいぞ！ そのガキを消してしまえ！」

「……へつ」

悠岳が後ろに落ちた電流銃を田だけで確認すると、村瀬に視線を戻し意を決してそのまま体当たりを試みた。

その試みはあっさりかわされ、派手に床に転がった。

村瀬は、こちらに向き銃口を向ける。

（今だ！）

悠岳は村瀬の横、ギリギリを駆け抜け、転がるように電流銃に手を伸ばした。

光線が空気を搔き切る音が間近に聞こえる。

「うあ、ああああー！」

するとすぐに肩に鋭い痛みが走った。

肩を撃たれたようだ。悠斗は痛みで床に転げまわる。

村瀬は尚も銃口を向け、冷静な表情で床に転げ回る悠斗を追つていた。

（。 。 #） 五十一章！ 無事投稿だ「ゴルア！」

（、 、 *） あつ のつけから失礼しました えっとですね、かなり苦労をしまして、無事投稿できたことに嬉しさを表現しました いえいえ、怒っちゃないですよ

楽しみにお待ちいただいてる読者様には、毎度遅筆で逃避癖のある愁真を温かく見守つていただき、誠に有難く思います
これからも、めげずに愁真を応援していだくと鼻水垂らして号泣する程嬉しく思います（Ｔ－Ｔ）次話も首がキリンになるほど楽しみにお待ち下さい ではでは

あの『シユウ』という少年と、研究員が消えて行ったその扉を星羅は腑に落ちない氣分で暫く見据えていた。

何も教えてくれない……あの時と同じだと爪を噛み、星羅は幼い時の自分を思い出していた。

——あれは、星羅がまだハオだった頃。

父親が孤児施設の運営をしていることは幼いながらも分かっていた。

だから、研究所に沢山の子供がいることになんの疑問も持たなし、自分も遊び相手が欲しくて良く彼等の所へ遊びに行ったり、彼等もたまに星羅の邸^{やしき}に遊びに来ることもあった。

その内子供が一人、二人と居なくなることもあつたがそれも良い人の所へ養子として貰われて行つたのだと思っていた。

そんなある日、自分と同い年の男の子がゼエゼエと荒い息を吐き不調を訴えたので、星羅は彼に付き添つて医務室へ連れて行つた。

彼を医務員に見せると、その子の症状を見ただけで医務員はあか

「うわあ、青やめたのだ。

星羅の主治医も兼ねている彼なのでいつも調子で親しげに訊いてみる。

「ねえ、どう？ イサムくんの具合？」

暫く茫然とした様子だった医務員は、我に返ったよひにひかりを向くが彼の顔は引きつっていた。

「どうしたの？ イサムくんの病気、悪い病気なの？」

そつ訊くやいなや、医務員は血相を変え星羅の腕を引いて、医務室を出る。「痛つ！ 痛いよ！ ねえ、どうしたの？」

強引に引きつけられる形で医務室から離れるとい、医務員の手がサッと放される。

強く持たれた腕が少し赤くなっていたのでさすりながら星羅は、医務員を見上げた。

いつも優しく接してくれる医務員の彼……今は星羅に背を向けている。

——何だか怖い。

せつと此方に振り返つた彼は暫くじつと星羅を見下ろし、一度堅く手を開じるとゆっくり視線を合わせるよひに屈む。

「……今日は、帰りなさい。」

掠れたような声で彼はそつと星羅の頭にポンと手を置いた。何がなんだかわからない星羅は問ひ。

「え？ どうして？ だつてまだ、来たばかりだよ？」

やつ星羅に悲しそうな瞳を向け、すぐに彼は首を横に振る。

「お嬢様……お願いします。」血まで誰かに送りせまつから…

…

そう言われては帰らない訳にはいかず、星羅は渋々頷をその場を後にした。

次の日、星羅はまた子供達と遊びまつと再び研究所へやつてきた。

今日は年下の女の子とお人形遊びをしていると、傍でヒーローごっこをしていた男の子の一人がいきなり、苦しそうに咳込み始めその内その場に座り込んでしまつた。

それを見ていた、女の子は星羅にこんな事をぽつと漏らした。

「……またよ。 昨日からずっとこんな感じ」

「え？ どうして？」

そう語り返すと、その女の子は周りをチラチラ見てから声を落として話してくれた。

「昨日も……ほら、イサムくんが…。」

「あ…イサムくんか。あの子私が医務室に連れて行ってあげたんだよ。あれからどうしたのかなってずっと氣になってたんだけど…、レンメちゃん知らない？」

レンメという少女は、知らないと首を横に振った。

「……そう」

「星羅ちゃん、それだけじゃないんだよ。実はあれからまた夜にキャリーくんとタマテちゃんとコズキくんが苦しいって言つてね、医務室に行つたんだけど誰も帰つてこないの」

「え？ それ本当？」

ついつい声を上げてしまった星羅に、レンメは慌てて自身の口の前に人差し指を当てる

「いいへー！ 星羅ちゃん、声おつきこよー。」

と咎める。

「あ…『めん』

「……私、施設員さんこどうじか訊いてみたの」

そう言つてリンメは施設内の入り口に立つ施設員に目を遣つた。

先が気になる星羅は、続きを促す。

「それで？ 何て言つてたの？」

と訊くと施設員から目を外したリンメは、こちらに顔を向け真剣な眼差しで星羅を見て続ける。

「それが、いくら訊いても教えてくれないの……ただの風邪だつて

そう言つとリンメは、軽く息を吐いて人形の髪を撫でる。

そのリンメの手を見ながら星羅は何か、大人達が隠している事に不信感を抱きつつあつた……。

帰宅の時間が迫り帰り支度をしていた星羅は、先程から慌ただしく声のする方に目を遣つた。

どうやらまた、不調を訴えた子供が出たようだ。星羅は、その医務室に連れて行かれる子供をじっと見ていた。

すると、後ろから誰かに呼ばれたので振り向いてみるとそこにはあの施設員が立っていた。

星羅は呼び掛けられた意味がわからなくて首を傾げていると、その施設員の彼女は星羅と同じ視線の位置に屈み、肩に掛かる白銀の髪を後ろへ流してくれる。

「なあに？」

星羅が問うと、彼女は悲しそうに微笑み

「…………うん。 お嬢様には大変残念なお知らせがあるので……お呼び止めしました」

そういうので星羅は、じつと彼女を見た。

「…………お嬢様も、知つてらつしやるでしょ？ それで……そのつ暫く、あの子達とお遊びになるのは止めいただきかねばなりません」

「え？ どうして？ だつてリンメちゃんとか元気だつたよ？」

そう問い合わせる星羅に、施設員の彼女は困った表情を見せて

「リンメは、まだ大丈夫かもしれません……念の為といつことで

そう言つて微笑む彼女を見て星羅は何かがおかしいと感じずにはいられなかつた。

「…………わかつた」

そう彼女に告げると、星羅は出口に向けて歩いた。

—— そうあの時も皆、私に何も言わず何かを隠していた。

あの後、研究所にも入れなくなつて納得のいかなかつた私はコツソリ研究所に向かつた。そして、自分の生い立ちを知つた……。

お父様はまた、何か私に隠し事をしている……。

『うあ、あああー!』

誰かの痛みに叫ぶ声が廊下に響き星羅はハッと顔を上げた。

(……まさか。この声は!?)

声がしただらう先を見る。この方向は父親の自室……星羅は嫌な予感がして先を急いだ。

父親の自室の前に来た星羅はドアの前に立つがロツクをされていて開かず、苛立ちを露わに扉横の操作パネルを乱暴に操作して中に踏み込んだ。

星羅の突然の登場に、修造も村瀬も驚いている様子を見せる。

「お父様! 今のつ……」

と言い掛けて目をみはる。

村瀬の立つ先に、肩を押さえ呻く人物を目の当たりにし星羅の頭の

中は真っ白になってしまった。

「口口口と彼は近づき、傍に座り込むと震える手で彼の体を握る。

「あひ……ひ。 悠斗…… しつかりして

それだナヒツヒ、後は涙で声が詰まる。

彼は小さく呻くと、口を開けた。

「ひ……ひ……せ……ひ

「ひじて」と言つた葉は掠れて声にはならなかつた。

星羅は、涙を拭き彼の頬に手を添えると小さく頷いた。

そして、ゆっくり村瀬に口を遣る。

「村瀬……あなたが彼を撃つたの？」

村瀬は銃口をこちらに向けたまま、表情も動かさず何も答えない。

「何故！ 何故撃つたの！」

星羅は語氣荒く、村瀬に問う。

それでも、眉一つ動かさず彼は銃口をじりじりと向か立っている。

そこへ嗄れた声が割って入った。

「星羅、そいつから離れなさい」

星羅は声のした方へ視線を向ける。

応接セツトの一角に車椅子のまま収まる父親は、冷めた表情でこちらを見ている。

「お父様が命令したの？」

修造は軽く息をつくと、仕方のない子だと言わんばかりに星羅の名を呼ぶ。

「いいか……そいつは」

「応えてーお父様ー！」

星羅は断固離れる事を拒否するよつこ、悠然と覆い被さつながら声を荒げる。

仕方ないと言つた感じで修造は口を開く。

「ああ。私が撃つよつ命令した……やめなさい」

と言いかけたのを遮つて星羅は叫ぶ。

「何故撃つたのー。撃つ必要なんて本當はなかつたんじやないの?」

星羅の怒りを露わこじた表情に修羅が叫びはじめていた。

長らくお待たせしました、本当に申し訳ないです。

何とか仕上がりましたが、いかがでしょうか？　ちょっと簡説にしそうたかな？　といった部分がありますが……汗

もつと掘り下げた内容にしたかったのですがなんせ、纏めるのが下手なもので読みやすくなつにとだいぶ省きました笑

以前、ご指摘いただいた説明がしつこ過ぎるとこうのを組み入れてみたのですが……意味が違つたかな？（＊＊＊＊＊）

次話もお待たせしちゃうかもしれませんが、どうぞ宜しくお願ひします

第五十二章（前書き）

長らく、更新を停止していましたこと深くお詫び致します。これからは完結に向け更新してゆきますので、宜しくお願い致します。

星羅はその父親の視線を怒氣を露わにした視線で返し、静かに口を開く。

「お父様、他に私に隠してこることはありませんか？」

虚を突く質問をされ、修造は顔を強ばらせる。

「なつ……何のことだ？」

その気迫、いや質問に動搖し、修造の声は少しばかり震えてしまつた。

星羅は視線をこじらのままに、悠然に覆い被さるよつとしていた自分の体を起こし、あの少年の名を口にする。

「……シユウ」

修造の顔が更に硬くなる。

「あの子に……会つたのか？」

「……」

娘の無言。修造は星羅から視線を逸らし、車椅子を動かした。

その背に追いつがるよつて星羅は質問を浴びせる。

「彼は何？　お父様は何故私に……」

そこまで口にして、星羅はあの幼少の頃の記憶と憤りが一気に湧き上がつてくるのを感じた。そして抑えられなくなり、体中が怒りに震える。

「お父様はいつも……私に何一つ真実を教えては下さらない！　イサムくんの時だつて……お姉ちゃんのことだつて！」

もう、抑えきることができなかつた。

「私の本当の出生だつて！」

叫んでしまつて、はたと我に返り慌てて口を押さる。

はたと顔を上げ、修造を見るが彼はこりからて背中を向たままでどこか遠くをみている。

慌てて父を呼ぶと、それを遮るように静かで落ち着いた声が返つてきた。

「やうか……お前は気付いていたんだな……なにもかも」

そう駄くよつた父の背が痛ましかつた。

感情のままにぶつけてしまつた言葉に後悔しながら、星羅は修造の後ろ姿をじつと見つめる。

電動の音をさせ、車椅子をこりからに向かた修造の顔は涙に濡れていった。

——胸が痛んだ。

そして唇を震わせながら、掠れた声で修造は語り出す。

「初めは……隠すつもりではなかつた。しかし、田に田に成長するお前を見て、話さなくてよいのではないかと思うよつになつた……いや、話せなかつた。ショックを受けるお前の顔など見たくはなかつた」

修造はおもむろに自分の両の掌を見つめる。

とても愛おしそうに手を細め、先を続ける。

「失つたはずの娘が、またこの手に還つてきた。その事が本当に信じられなくて……嬉しかつた」

そう語ると堅く拳を握り、声色を変えた。

「しかしつ、お前がハつの時にあの事件が起きた！ 何もかも順調にいっていた！ そうだったんだ！ そう、思つていたのに……」

修造の目は血走り、噛み合わせた歯が悲鳴をあげる音が聞こえる。

「たつた……たつた一人の被験体が妙なウイルスにかかつたが為に……成功しかけの他の被験体までも息絶えていった……その様を見て、私は急に怖くなつた。息絶えて逝く彼等とお前が重なつて……また、この手から奪われてしまつのではないかと……」

小刻みに震える手を、龜のではないかといつ勢いで顔に当たると、
修造は嗚咽を漏らした。

——静かな部屋に父親のむせび泣く声だけが響く。

子供のよつこに震えて嘆く父の、弱く儂い部分を田の辺たりにして星羅の心は激しく揺れる。

傍で気を失い横たわる悠田に目を遣り、そつと頬に触れると強い視線で村瀬に目を遣つた。

村瀬は相変わらず涼しい瞳を此方に向けていたが、銃口は向けず足の横にだらんと持つていた。

攻撃の意志のないことを確認して星羅はゆっくり立ち上がり父の元へ歩く。

小さくなつてもせび泣く父の背にそつと手を遣り、優しく撫でてやる。

足に不自由はあるが、いつもしつかりして大きな存在だった父。

しかし、どうだらうこの手に触れる儂い感触は——。

痩せた背を撫でながら、揺れ動く心と必死に戦つ。

父の愛しい者を失う悲しみは分かる、しかし……。

星羅は悠斗が横たわる場所に目を遣つた。

——今、ここで大切な者が失われているのは違つ。

星羅は父の背中から手を離し、悠斗の元へ行こうと一步踏み出したその時、手首を強く掴まれ後ろへ引き寄せられた。

驚いて振り向くと、修造が俯いたまま手首をしつかり掴んでいる。

それに構わず振り払おうとしたが、物凄い力でそれを阻止され、驚愕した。

「……!? お父様、離して！」

離れようともがくが、離す様子は全くなく、代わりに顔をゆっくり上げた……。

その表情は羅刹のようで、背筋が凍る。

「おじい…… わが

「……行くな。星羅、行かないでくれ」

途端に表情を歪め、星羅の腰元にすがり顔を埋めた。

「……お父様」「

「お願いだ……私から、私から離れんでくれ

そう懇願する父の声の後に、鉄が擦れ合わせる冷たい音がした。

慌てて振り返ると、悠斗の胸倉を持ち、その額に銃口を突きつける
村瀬が居た。

「なつ……！？ いやつ！ やめて！」

星羅の緊張した声が飛ぶ。

激しく身を捩るが、修造はしつかり腰に縋りついたまま、一層腕
に力を込めた。

「離して！ 離して！ お父様あ！」

声を上げ懇願するが手は緩められることはない。

「こやああ！ 悠斗！ お田あ！」

声の限り、悠斗を呼ぶが彼は田を醒ます様子はない。

ぽつりと修造は嗄れた声を零す。

「——どうせ……」

「どうせ……」の研究所も終わりだ。 良くも今までやつ等は見

逃してくれていたものよ……

修造は自嘲したように不気味に顔を歪めた。

その表情に羅刹が戻ると、力づくで星羅を自分の元に寄せ跪かせる
と、娘の頬を両の手で挟んだ。

しかし、目の前の娘は自分を見て恐怖に顔を強張らせ、頬に大粒
の涙を零している。

——壊れしていく……」のまま、壊れてしまいそうだ……。

その時、修造の中の何かが崩れ落ちて壊れた音がした。

いや～、やつと更新することができました。半年も何も書けず、案が出ず苦渋な日々でした。しかし、こんな拙作でも楽しみにしてくれている方々に励まれ再び、書くといつことが出来ました。支えになつて下さつた方々には本当に感謝してもしきれないです。本当に有難うございます！あと何話が増えますが完結へ向けて頑張りますので、最後までお付き合いくつとも。

—禁止区域外—

星羅が中に入つてもう何時間が経つていた。

これからの大突入や潜入員をどう動かすか、万一の場合の準備について悠田の父、『浅乃木 比田』は清と刑事の澤田、アゲイスト入念に打ち合わせをしていた。

怪我人の為の救急はどこに控えさせておくかと話しをしている時のこと、澤田は自分の顎鬚を触り不気味に笑うと嗄れ声で質問をしてきた。

「小耳に挟んだんですがね……浅乃木さん、あんたのとこの下の倅せがれが中に居るんだってねえ？」

その質問に、その場が凍り付いた。しかし、澤田はしてやつたりといつ顔をして、濁つた目を浅乃木に向けている。

浅乃木はニヤニヤと不気味に笑う澤田を一瞥し、心の中で毒づいた。

（全く、あのタ「親父の人選センスのなまけは呆れる。 よりによつてコイツを寄越すとはな……）

澤田から視線を逸らし、まあなど応え、話を先に進めよつとする
尚も食い下がつてくる。

「浅乃木さんも大変ですね～よりによつて大事な倅がこんな事件
に巻き込まれちゃつてねえ～」

澤田の表情は面白がつてゐるといつ風だつた。しかし、浅乃木は
相手にせず話を進める。

その場の雰囲氣も氣にせず、澤田は更に続ける。

「ああ～！ もし、手違いで浅乃木さんの大事な息子さんが……」

下手な芝居を打つてくる。

「澤田刑事……」

寸出の所で助け船が出た。その主は清だつた。彼はどうやらかなり
立腹だつたらし……。

「今は、その手違いが出ないよつにと入念な打ち合せをして
るでしょ～。無駄口は慎んで下さい～」

階級下のしかも部署違ひの者に、窘められて澤田は不服そつに鼻を
鳴らした。

大体の打ち合わせを終え、ふと顔を上げると少し離れた土手に一人の少年の姿が目に入った。

澤田の濁つた目と嫌味の応酬から逃れたいのもあって、浅乃木は清の肩を叩いた。

「何ですか？ 先輩」

「清、悪いが後は頼む。 それとあのおっさんもやつつけといと」と斜め後ろを親指で差した。

「へっ？ 何言つてんすか！ まだ、打ち合わせは終わってないんですよ？ まあ… あのおっさんはやつつけちゃいたいんですけど……」

「じゃつ… 任せた！ 頑張つてくれたまえ！ スレッド・桐矢くん

「あつ… 先輩！」

後を清に任せ、その場を離れた。

青い髪の少年は、胡座をかけて手近にある草を落ち着かない様子で無造作に抜いては放りを繰り返していた。

向けられている視線の先は、禁止区域で何時間か前に星羅が消えた場所である。

余程、気掛かりなのかこちらの事には全然気付いていない様子だ。

浅乃木は彼の真後ろに立ち、暫くずつと様子を見てみたが、気付く様子がないのでひとつ溜め息をつくと、彼の頭にぽんと手を置いた。

「！？」

そこによりやく浅乃木の存在を知り、不機嫌そうに頭の手を払う。そのあまりにも彼らしい反応に噴き出しど、構わず彼の隣に腰を下ろした。

「んなつ！？ 勝手に横に座んなよ。」

憎まれ口を叩く少年をよそに、浅乃木は笑いながら胸元からタバコを出し、一本くわえると慣れた手つきで火を点けた。胸一杯に煙を吸い込むと、ゆっくり紫煙を吐き出す。

「ふう、つれないねえ。 そんなに嫌はないでよつ。 いっちゃん

ん

「いっちゃんでいいな！」

お決まりの返答が返つてきて、尚も噴き出した。

「あんまりカツカツしてると、ハゲるぞ？」

「ハゲねえよつ！ そんな話聞いたことねえ！」

「いや～ん。 「冗談だつてばん いっちゃん」

「気持ち悪いなつ！ つか、いひかやんて書つたー。」

「前から氣になつてたんだけど……漢字でいちと書くからこいつをやんなのか？ 何ではーちゃんじやないのよ？」

「知るかつ！ ひかの母ちやん」「聞けよつ！ 」

「ん……面倒くせえからこいや」

「だつたら聞くなよー。おっさん！ 」

「んまつー。今、おもなんとおつしゃつて？ おつとんつて書つたの？ ひつどーいー。悠ちゃんにも言われたことないのこつ」

と顔を覆い泣き真似をして見せる。

「だー！ うぜえ！ あつち行けよ！ まだ作戦会議の途中なんじやねえーのかよー！」

「ん？ あーお前の頼りになる従兄弟の兄ちやんに任せた」

「任せてきたつて……大丈夫なのかよ？ あんたが指揮とつてんじやねえのかよ？ 」

嫌に真面目な顔で、質問していくので浅乃木はひょつと拍子抜けした。

「……ふつ

「なつなんだよつー、何笑つてんだよー、」

とはじめは顔を赤らめた。

「いやいやつ……嫌に真面目な顔したから、つい……

はじめは、撫然とする。

「まあ～そう、怒るな。俺は指揮官じゃない、刑事が来た時点で権利は殆どあっちにある。俺等は情報を提供するだけさ……」

浅乃木は、また煙草のフィルターを口に含むと息深く煙を吸い込んだ。

「……なんだよ、それ」

はじめは煙を空に向かって、吐き出す浅乃木の横顔を見て、納得いかないという顔をする。

「俺の所属してる部署は末端に近いからな～、諜報活動が主だし……警部つて言られてたつてうちの部署内だけの効力に近い、刑事がいなけりや逮捕だつてできないってな」

そう、言つてあっけらかんと笑う浅乃木に、はじめは少し苛立ちを覚えた。

「じゃー、おじさんは何で刑事にならなかつたんだよ？」

少し怒り気味の口調に、驚いて浅乃木は仏頂面したはじめに目を遣り、微笑むと……。

「教えてやんない」とあかんべえをした。

「なつ……。ああつ！ くそつ！ ムカつく！」

よほどあかんべえが効いたのか、顔を真っ赤にしてそっぽを向いてしまった。

そんなはじめの姿に優しく目を遣り、再び紫煙をくゆらせた。

そんな時だつた。浅乃木の右腕からけたたましい音が鳴り響いた。その騒がしい音に、そっぽを向いていたはじめが、慌てたようじこちらを向ぐ。

浅乃木は、半分以上灰になつた煙草を砂利で押し消し、受信ボタンを押した。

モニター画面に現れたのは何年か中へ潜入させておいた、少し付きの良い潜入員だつた。

どうやら何か掴んだらしいと、その潜入員の表情から窺える。

「お疲れさん」

浅乃木は画面の中の潜入員に労いの言葉をかけてやる。

「お疲れ様です」

画面の中の潜入員は固い表情で返す。

浅乃木もその表情に身を引き締め、対応する。

「…何か動きがあったのか？」

浅乃木の固い口調に傍にいたはじめも緊張が高まる。

画面の中の潜入員ははい、と歯切れの良い返事をすると内容を話し始めた。

「浅乃木警部のお子さんの方ですが……秘密裏に調査させたところ、どうやらこちらに潜入しているのは確かなようですね」

その内容に浅乃木は眉根を寄せ、口に手を当てた。

会話を傍で聞いていたはじめは、いてもたってもいられず強引に浅乃木の右腕を掴むと、画面の中の潜入員に噛み付く勢いで質問した。

「それで？ 悠斗は？ 悠斗は無事なのかよつ！ 」

いきなり現れた少年の姿に、画面の中の潜入員は目を丸くする。

「あつ……浅乃木警部、この少年は？」

画面にかじりつぐ、はじめから自分の右腕を奪い返した浅乃木は、ちらりとはじめを見て……。

「ああ……気にするな。 息子の幼なじみだ」

そう画面の中の潜入員に告げるとはじめの頭に手を置き、優しい口調で語りかける。

「はじめ……心配してくれて有難うな。 だか、少し大人しくしていてくれるか？」 一緒に話を聞く分には構わないから

浅乃木のその言葉に、はじめは自分のしたことの恥ずかしさを知り、赤面して頭の上にある手を払いのけた。

潜入員の話によると、悠斗は何らかの形で研究所の深部に行つたようだ。

画面の中の潜入員は渋い顔をして、今知る放題の情報を伝える。

「自ら行つたのか、連れられて行つたのかは不明なんですが……」

「……そつか

浅乃木は無精髪を触りながら、この状況下なのに何故か、息子の突拍子もない行動に心躍らされている自分がいることに驚いた。

「それで、娘の行方は？」

との質問に潜入員は、ひとつ頷いて……。

「恐らく、ホシに接近したかと思われます」

「そうか、わかつた。」「苦労、引き続き頼む。作戦は以前教えたのと変わらずだ」

「了解しました」

失礼しますとの声で通信は切れた。

隣で心配そうに、何も映らない画面を見たままのはじめにヘッドロッカクをすると、浅乃木は彼の髪をクシャクシャと触りながら——

「大丈夫！ あとは、おっさん達に任せり！」

と元気よく声を掛け、はじめをヘッドロックから解放してやる。頭をクシャクシャにされて、撫然としているはじめに笑顔で応え、やあなど言ひと踵を返し、清達の元へと歩きだした。

第五十四章（後書き）

え～と、かなり考えに考えて書き上げました
んファンの方には嬉しい章です
完結はあと5話ほどに延びるかと思いますが、最後までお付き合
いいただければと思います

次回をお楽しみに……

第五十五章（前書き）

死に関する表現等があります、決して真似などしないようお願い致します。

——近くで何か音がある。とても重くて冷たい音。それにひやりとした感覚を額に感じる。

……微かだが誰かが呼ぶ声もある。

とても悲しそうな声……。

なんだかその声を聞いていると、この暗闇から早く抜けださなければならぬ気がする。

儂げに聞こえくる声に意識を集中して、抜け出せうと試みてみるが、しかし、抜け出すどころか肩の辺りがじりじりと燃えるように熱を帯びてくる。その感覚が少しずつ皮膚を射抜くような痛みに変わり、悠囁は暗闇からゆっくりと皿を醒ました。

ぼやける視界にまず映つたものは、額に冷たい感触のする黒く光るものだつた。

この黒光りするものが、暗闇の中で聞いた重く冷たい音なのだろうと、ぼんやりした思考で思つ。

すると、聞き覚えのある声がどこからかする。悲しそうな、少女の泣く声が今度ははつきりと聞こえる。

じじだりと鈍く首を巡らすと、少し離れた場所に一つの影が見える。ぼやけた視界では良く捉えられず、目に力をいれる。

見えたひとつの一影に見覚えがあった。

——星羅？ どうしたの？ 何故、泣いているの？

雲の上にいるかのような感覚と思考に酔いそうになる。瞼は重く、再び閉じよと命令してくるが、これに従つてしまつともう一度と開けることができなくなるような気がして、悠斗は必死に閉じようとする瞼と闘つ。

そこへ、男性の低い声が聞こえた。

「ふつ……撃たなくとも放つておけばそのまま逝きそうだな」

その声は間近に聞こえる。

声の元を探して、視線をさまよわせると、真正面に男の姿を捉えられた。

涼しげで、穢むように自分を見下ろす男。

そして、さつきから額に感じる冷たい物がしつかりしてきた視界にはっきりと映る。

その正体は、数分前に自分の肩を射抜いたあの銃だ。

悠畠は、弾かれたように身を引いた。

「……おやじ、お田覚めのようだな？ 幼き侵入者よ」

皮肉を含むその低い声は、どうでも冷たい感じがして、人を殺めることなど一切厭わぬ口振りだ。

「……おとうお父様。 やつやめて」

星羅の緊迫した声がして、悠畠は慌てて星羅の方へ振り向いた。

その光景に我が田を疑つ……。

今にも星羅の首に手をかけようとする、アスラビ・尾崎の姿——。

「やつやめやめ……」

無意識に体を動かしたが、動くことができない。

「……？」

そこで初めて自分の胸倉を相手に掴まれていることに気がついた。

「はつ……離せつ……」

掴む手を剥がそうともがくが、びくとも動かない。

「……！」

「ふつ……じつした？ もう諦めたのか？」

村瀬は小馬鹿にしたよつて口元を歪め、挑発をしてくる。

「くつ……」

悠臣は眉根を寄せ、相手を睨む。

村瀬はそんな悠臣を鼻で笑うと、彼の胸倉を引き寄せ耳元でいつ呟いた。

「君は……なぜ、そう必死になる？」

「……」

「まさか……星羅お嬢様に気がおありかな？」

その質問に動搖し、顔を赤らめると悠臣は男から顔を逸らした。

「図星か……」

村瀬は高らかに笑い、すっと表情を消すと悠臣の胸倉に力を入れ、服で気管を絞め始めた。

「くつ……」

キリキリと絞め上げられ苦しくなる。

「船せ、どひやひひんだヒーロー、」ヒをしてしまつたよ、だな

男の力はどんどん強くなり、曲の形で喉管を締め上げてこく。

「かはり……」

「ヒロインを助ける為に単身、こんな所までやつあつ……しづの
ない坊やだ」

悠臣は、この男の拘束からなんとか逃れようともがいてみるが、
その力は尋常ではなく、段々と意識が遠のいてこく。

——へり……。

『悠臣……』

遠のこてこく意識の中で、聞こえるある声がした。

『おこつー、悠臣ー、何やつてんだよー、つっかりしのぶー。』

『ほこつー、お前つて弱々なのな』

——はじめ……くん?

『なんだよつー! 深しかつたら巻き返してみろよ』

『お前、負けたまんまで悔しきなこのかよつー。』

——えつ？

『意地を見せろよー。意地をー。』

——わつわかつしるよ。

『わかつしるよつー、そればつかかよ。せんじとお前、ロばつかなのな』

——違つー。

『違つんなら、態度で示せよー。男だろつー。』

——「うわ、うわせこなあ。

『お前、やう氣あんのかよー！』

——「うわせこー！

『お前、負けたまんまかよー。それで、また逃げるのか？』

——「うわせこー！黙れ！

「ふんつ……終わりだな。呆氣ない……ものつ……ぐああつ」

氣管を圧迫する手の骨が軋む音を立てる。

「ぬあっ……に……」

その尋常じやない力の持ち主は、ぐつたりと俯いていた。村瀬の手を剥がそうと動いている。

村瀬は堪らず、彼の胸倉から手を離した。

拘束から解放された悠呂の体は、床に崩れ落りると、不足のものを一気に肺に取り込んでむせた。

「がはっ…けほっけほっ」

村瀬は、折れそつになつた手をかばいながら顔を歪める。

「くつ……しぶとい小僧だ。 あのまま絞め殺されればよかつたものを！」

村瀬はおもむろに、銃口をこちらに向けた。

悠呂は肩で息をしながら、照準を合わせてくる相手を睨みつける。

何かが空気を割く音がして、悠呂は重たい体を横に避けると先までいた辺りの床に一筋の黒い線が入つた。

継ぎざま、村瀬はレーザー銃を撃つてくるも、悠呂は間一髪のタイミングで右へ左へ転がり、躊躇ながら避けた。

「さつさつさつ……避けるので一杯一杯といった感じだな」
わざと外しているのか、高らかに笑いながら容赦なく打ち込んでくる。

——瞬、タイミングがずれた……

悠呂の頬に赤い筋がつく。

「タイミングが合つてきたかな？」

村瀬は不気味に口角を上げた。

その表情に後退りしながら悠呂は、村瀬の隙を窺う。

しかし、先程の首への圧迫で酸欠なのと銃撃から逃れる為に動き回つたせいか、これ以上体が動きそうになかった。

——どうどうしよう? もう、体力が……。

村瀬は一步一歩と銃口を向けながら、近づいてくる。

それに合わせて悠呂も一步一歩と下がる。

「や……めて……」

苦しそうな星羅の声がして、悠呂は慌ててそちらに視線を向いた。

星羅の細い首に、アスラビ・尾崎は手をかけている。

「！？ 星羅っ！」

「よそ見をしていいのかな？」

はつと我に返り、村瀬に視線を戻すと再び、自分に照準を合わせてきた。

後退ると、何かが踵に当たった。

「！？」

村瀬に気付かれないように、視線だけを足元に遣ると数時間前に弾かれたあの銃が、妖しく黒光りをしている。

まさに好機が訪れた。しかし、あの男に気付かれないようにしなければ……。

悠呂は嫌な汗をかきながら、村瀬を睨みつけた。

期間を置かず連投稿ができたのがちょっと嬉しいです

えと、小説書きというのはプロでもバンバン構想が出てきて書いて
いると思われがちですが、実際はそうではありません やはり、
波があるそうです。全く出てこなくて一年なんて方もいるらしいで
す。そんな情報を聞いて、改めて執筆というものの難しさを知りました。
まあ、文法も怪しい、素人が語る話ではなかつたですね汗
次回もお楽しみに

第五十六章（前書き）

大変、長らくお待たせ致しました。少し間が空きましたので乱文氣味です。あと、少し長くなつております。ご注意下さい。

薄闇の中、男は素早い指さばきでキーボードを叩き、ぶつぶつと呴いている。

その大画面には夥しい数字と文字が羅列し、物凄い早さで下にスクロールされていく。

部屋の中はしんとしていて、男が打つキーボードの音とコンピューター操作の解除を示す音だけが響いている。時折、不気味な笑い声を上げ口元を歪めた。

何かを打ち終え、Enterキーを押すと目の前の画面は文字の羅列から建物の見取り図に変わり、何枚か表れた。

「クツクツクツ……いいぞ、これだあ」

男は出てきた見取り図を舐めるように眺めると、顎に手を置きながら上下ボタンを操作してスクロールする。

途中いくつかの見取り図で手を止め、画面をクリックして大きくしたり、戻したりして何かを思案しているようだ。

あるひとつ見取り図を見つけ、完全に手を止めた。

「……からにするか……」

不気味に笑んで独りしゃべると、顎に置いた手を下ろし姿勢を前に戻して再び素早い指さばきでキーボードを叩き始める。

画面はみるみるうちに数字と文字の羅列が埋め尽くし、それに加え見取り図達が姿を出しては消えを繰り返していく。

そして、見取り図の一つ一つに赤いマークがついていく。

「フツ…フフツ…フハツハツハツハツ」

笑いが止まらない。

「これで終わる……俺達のすべてが……あはっ…あはは…さあ～鎮魂歌だ！ 存分に味わえ！」

勢い良くEnterキーを押した。

間を置かずに田の前の大画面は赤一色に染まり、中央に「カデカ」と「DANGER」の文字が点滅する。

するとすぐにはけたたましい警報音が鳴り、抑揚のない声が緊急アナ

ウンスを告げる。

男は含み笑うと、すくじと立ち上がりその部屋を後にした。

悠呂は後ろ、足下にある銃をどうやって我が手に取るうか？ 村瀬の様子を伺いながら思案していた。

ところが、体が飛び上がる程のじりりといった大音量が鳴り響いた。

「緊急警報、緊急警報 プランNが発令されました。直ちに所内から退避して下さー」

「なつ…何？ 緊急…警報？」

悠呂は突然の出来事に唖然としている。勿論、目の前の村瀬も同様だが彼の反応は悠呂のものとは幾分違った。

「何つプランNだと！？ 一体どうこうことだ！」

大声を上げた村瀬は、悠呂との対峙も忘れてすぐさま修造のデスクに向かつ。

どうやら彼も知らぬことらしい。

「ひやあああ……！」

いきなりの奇声にそむひて田を遣れば、アスラビ・尾崎が狂ったように頭を搔き鳶りその場に頭を抱えて突つ伏してしまった。

彼の傍には、いわれなき戒めから解放された星羅が苦しそうに咳き込みながら、倒れている。

苦しそうにしてはいるが彼女は無事らしい……。

悠呂は安堵し、小さい溜息をつくと足元の銃を拾い上げ腰元にねじ込み、彼女のもとを這いつぶつに近付いた。

「星羅、星羅？ 大丈夫？」

彼女の体をゆっくり起こしてやつながら、耳元で呼んでやる。

ぐつたりしている彼女は悠呂の声に反応し、眉根を寄せて呻いた。

良かつた、意識はあるらしい。

しかし、あのけたたましい警報音とアナウンスは今も続いている。彼女の体を支えながら、悠呂は天井を仰ぎ見た。

「私だ、これは一体どうしたことだ？」

警報音の中にある低い声が混じる。デスクでどこかに連絡を入れる村瀬に目を遣る。

「何!? 良くわからんだと? 何をしているすぐ」調べる。」

村瀬は怒鳴ると乱暴に通信機を切った。

しばらく、デスクに拳を打ちつけ肩を震わせていたが、すぐにこちらに顔を向けたので、悠呂はまたそこに星羅を庇つように後ろ背に隠し身構た。

村瀬は少し嘲笑つたように見えた。

何というか、してやられたと言つた感じで自分を嘲笑つたように思える。

そしてあの険しい顔から一転して、霸気のなくなつたような顔をして床のどこか一点を見ていた村瀬は何か意を決したように、眉根に力を入れると真っ直ぐに悠呂を見た。

悠呂は、身構える。

村瀬は真っ直ぐこちらに向かって来る。

腰元にねじ込んだ銃に手を置き、息を飲んだ。

ところが村瀬はそんな悠呂を無視し、さつきから突つ伏し訳の分からないことを呴いているアスラビ・尾崎に近づくと、憐れむような顔をしてじつと彼を見下ろした。

「……んつ、悠…呪?」

後ろから声がする、振り向くとゆづくりだが星羅が体を起こしている。

慌てて、彼女を支えて声を掛けてやる。

「大丈夫?」

「……うん、有難う

そう応えた彼女は、じつとどこかを見つめる。その視線を辿ると、どこか壊れてしまったアスラビ・尾崎が村瀬に抱えられ車椅子に座らされている姿だった。

彼女はそんな父親の姿を見ながら、ボロボロと涙を零す。

悠呪も、何とも言えない気持ちになつて唇を噛んだ。

しかし、いたたまれない思いではあつたが、先のアナウンスが気になり悠呪は気持ちを切り替えて、彼女を立ち上がらせよつとした。

その途端、大きく床が揺れお互いバランスを崩し再び座り込んでもつた。

「なつ……なに！？」

何がどうなつてているのか分からぬ星羅は、悠岳の腕にしつかり掴まりながら天井を見上げた。

「第九区、研究資料庫爆発まであと一分三十秒……」

あの抑揚のないアナウンスが非常な通告をする。

「ばつ爆発！？ この研究所が爆発だつて？」

悠岳は背中に冷たいものを感じた。

その声にアスラビ・尾崎の世話をしていた村瀬は冷静な口調で悠岳の疑問を肯定した。

「…そうだ、ここはじきに火の海になる。 ふつ……ヒーローゴッ
「も」で終わりだな。」

「あなたがやつたの？ 村瀬……」

星羅は震える声で問う。

村瀬は「ちりを見たまま何も応えない。それを見かねて、悠岳が口を開く。

「星羅……村瀬さん達もこのことは知らなかつたみたいだ」

星羅は小さくえつとりからに振り向いた。

「その少年のいう通りです。我々にも想定外の出来事です」

村瀬は、嘘偽りはないと言つた瞳で真つ直ぐ星羅を見つめた。

その瞳を受けて、星羅は息を飲む。

「じゃあ、誰がこんなこと……」

村瀬は瞳を伏せ、首を横に振る。

その時だった、大きな破裂音と共に下から突き上げてくる揺れを感じた。

悠呂達も村瀬もこの揺れに、バランスを崩しそうになる。

どこかで何かが爆発したようだつた。揺れが収まるのを待つて村瀬は再びデスクへ向かい、どこかへ連絡を入れる。

「私だ、調べはついたか?……ふむ、ふむ、先程の揺れは?　なるほどあそこか、わかつた。お前達はもういい、早くここから脱出しそう。　そうだ、どんな誤作動か知らんが自爆プログラムが作動した……わかつてゐる。　それは全て私が引き受ける。　ああ、お前達は避難しろ」

——自爆プログラム？ 悠呂は現実では有り得ない言葉を耳にして、目をみはった。

「あつ……あの」

悠呂はびっくりとか尋ねようとして、声を掛けたがそれは村瀬の怒声でかき消された。

「何をしている……早くお前達もここから脱出しき。」

「えつ……？」

村瀬の意外な言葉に悠呂は、啞然とした。

再び、大きな揺れが一同を襲う。

「……おかしい、やけに爆発のタイミングが早い」

村瀬は揺られながら、宙を見据える。

しがみついてくる星羅を抱きとめながら悠呂は天井を仰いでいると、傍に人の気配がしてはつとそちらに目を向けた。

すると村瀬がこの揺れの中、険しい顔をして「ひひ手を差し延べていた。

正直にその手を掴むと、力強く引いて立たせてくれた。

「あつ、あのつ村瀬さん」

戸惑いながら声を掛けたが、再び村瀬の声に遮られた。

「いいか、良く聞け。先程爆発したのはアナウンスにあったように恐らく第九区研究資料庫だ。資料庫は地下三階にある。ここは地下一階だ、まだ脱出するには十分時間はある。自分で傷つけておいてなんだが……時間はあるが、その足だ十分間に合つとは思うが、何せこの自爆プログラムは想定外に作動している。今度いつどこのフロアが爆発するのか我々もわからん。それだけは肝に命じておけ！」

「あつあの……」

村瀬は険しい表情から一変して、優しい顔になると悠斗の肩にぽんと手を置いて頷いた。

「お前は単身ここへ乗り込んで来た強者だ。自信を持て！」

「お嬢様を頼んだぞ」

その一言を残して、村瀬はアスラビ・尾崎の車椅子を押して先に出て行ってしまった。

「村瀬！」

星羅の呼び止める声も虚しく、一人はドアの向こうに消えてしまった。

開け放たれたドアの向こうから、研究員が逃げ惑つ騒然とした声が聞こえてくる——。

悠斗と星羅はお互に支えるように寄り添いながら、呆然とそのドアを見つめていた。

第五十六章（後書き）

我が作品を読んで頂き、誠に有難い気持ちです！

105日ぶりに更新です。いや～なかなか、ストーリーが浮かんで
こず、苦しましました笑　しかし、何でも中途半端だった自分を変え
るべく、どんなに長くなろうと完結させようと意気込んでおります。

そんな作者ではありますが、気長に応援していただければと思います。

本当にあとがきまで読んで頂き有難い気持ちです！

第五十七章（前書き）

大変長らく更新せず、申し訳ありませんでした。かなり久々の更新ですでので乱筆乱文になつていていますがどうか楽しんでいただけたらと思ひます。

それは、そろそろ動きを見せようかといつ時だった。

足元から不気味な感触の揺れを感じる。

話し合いの最中だった悠田の父、浅乃木比呂はとつと田を上げ研究所のある禁止区域に目を遣った。

微かだがどこからか、煙が上がっているのが見える。

浅乃木と同じように顔を禁止区域に向けている一同の中で、口を開いたのは刑事の澤田だった。

「……中でなにか始めやがったか

嗄れ声に面白うがる調子が混ざっている。そつ聞こえて、浅乃木は少し眉をひそめた。

傍にいた清も同じように思つたのかしかめ面を作つていて

だが、清はすぐに気持ちを切り替え腕時計型モニターで中の様子を窺う。

荒い画像に出てきた人物の背後には、白衣の人間が右往左往として混乱を極めている様子が見て取れた。

何があつたのかと問うと、潜入員も混乱しているのか少し声が上ずつていた。

「はいっ……それが、いきなり自爆プログラムが作動した……です
が……らす……」

通信をよこす潜入員の声は画像のノイズと逃げ惑う人間の声で聞き取りづらくなっている。

一同は『自爆プログラム』といつ言葉だけ聞き取り、目をみはった。

「何！？ 自爆だあ？ あの朦朧もうろうじじい、証拠といつ証拠を燃やしつくす氣でいやがるな！」

澤田は、鼻息荒く憤慨した。その様子を横目に浅乃木は顎に手を添え、何かを考え込む仕草を見せた。

浅乃木達から少し離れた場所にいたはじめも、同じように揺れを感じていた。

何事かと禁止区域に目を凝らすと、うつむいて煙が上がっているのが見えた。

慌てて立ち上がり、浅乃木達の方を見ると同様に禁止区域に目を遣つてゐる。一体、何が起こつているのか分からず歯噛みしていると、嗄れた声が何か喚いているのが聞こえた。
その言葉にはじめは、背筋が凍つた……。

確かにいま、『血爆』と聞こえたのだ——。

「なつ……なんだよ。血爆って……」
はじめは一目散に浅乃木の元に走り寄り、胸倉に掴み掛かると激しく揺らしながら喚いた。

「おじさんー、血爆って……血爆ってなんだよつー！ これも作戦なのか？ 中には……中には悠田がつ……悠田達がいんだぞつ！」

襟を閉めんばかりに詰め寄るはじめの腕を清は掴んだ。

「はじめー、落ち着け！ これは俺達が出した指示じゃない。中のヤツが勝手に始めたことだ」
そう話す清の腕を乱暴に振りほどき、悔しそうに顔を歪めると浅乃木の襟から手を離した。

力無く膝から崩れると、掠れた声で呟いた。

「なんなんだよ……どうなつてんだよ。何とか、何とかなんねえのかよお……」

手元にあつた雑草を引き抜くと乱暴に投げ捨てた。

その様子を見ていた澤田はフンと鼻を鳴らすと、しゃがみ込むはじめに毒を吐いた。

「何だ、この小僧は？ 元はと言えば、浅乃木さんの体が勝手に入り込んだのが悪いんじゃないか。 爆発に巻き込まれたって自業自得というやつや」

「んだと？」

「やめろー。はじめ！」

澤田に掴み掛からつとするはじめを清は後ろから羽交い締めにして止める。

「離せー。お前等それでも警察か？ 人を助けるのが仕事だろー！ なのに何だ！ てめえのその言ごくはー！」

凄い剣幕で吠えるはじめをはなから相手にしていないと言わんばかりに、澤田は耳を搔く仕草を見せた。

「これだから素人は話にならん。 救助活動はレスキュー隊に頼むんだな」

「何だとー。」

「やめろー。」

尚、突つかれると身を捩りながら、今度は浅乃木に突っかかる。

清の枷から逃れようと身を捩りながら、今度は浅乃木に突っかかる。

「おじさん！ あんた何黙つて見てんだよつー。わしき、俺に任せろつて言つたよな？ あれは嘘だつたのかよつー。こんなのに頭下げて、何が俺に任せろだ！」

浅乃木は、清に抑えられながら叫ぶはじめを黙したままじつと見ている。

「悠凹が！ 悠凹が死んじまつてもいいのかよつー。悠凹は、あんたの息子だろ！」

「はじめ！」

清の制止も聞かず続ける。

「……何黙つてんだよ。もしかして、あんたもコイツと同じことが言いたいのかよ。爆発に巻き込まれても仕方ないつて！」

「いい加減にしろー。はじめ！」

清は羽交い締めから、地面にはじめを押さえ込んだ。

それでも尚、暴れるはじめの背に肩を入れ込む。

「ふつ……

頭上から笑う声がして、清もはじめも何事かと見上げた。

煙草をくわえ、火を付けると煙をひとつ吐いて浅乃木は押さえ込まれているはじめの前にしゃがんだ。

「いや～あつついねえ。 こいつちゃん 」

「んなう……」

あまりにもあつかけらかんとした態度に、はじめは開いた口が塞がらなかつた。

「お前、何ひとつで熱くなつて勝手に吠えちゃつてんの？」

はじめの顔に、煙を吐きながら飄々とした態度でこやつと笑う。

「あつ……あんたつてひとつは」

と、頭に温かくて重い何かが乗つた。

「お前に言われなくとも何とかしちゃつから。 お前は大人しくここで悠閒達を待つてろ ワンワンてな」

「ワンシ……このつー！」

頭からフツと浅乃木の手が離れた。

反論してやるのと見上げたはじめは、口を噤んでしまつた。

自分を見る浅乃木の目がビームでも優しげで、微笑んでいたからだ。

「まつ、見てる」

自信に溢れた声でそう言い残すと、浅乃木は煙草を携帯灰皿に押し付け、はじめに背を向けて行ってしまった。

頭上から大仰な溜め息をつく人間が一人。

「まつそういうことだ。お前は悠呂くん達をここで待つていてやれ。なあに、先輩はいつもヘラヘラおちやうけてるけど、やるときはやる人だから……」

清ははじめに手を貸して立たせてやった。

彼の手を借りて立ち上がると、じつと禁止区域に見入っている浅乃木にはじめは目を遣った。

何も言えないでいると、清に背中をぽんと叩かれてつんのめる。

「いきなり、何すん……」

振り返ると、そこに清の姿はなく、彼も背を向けて浅乃木の元へ歩いて行ってしまった。

「なんだよ……清兄いまで」

口を尖らせて独りごちたが、すぐに口を引き締め一人並ぶ背中を見つめて微笑んだ。

作戦場に戻ると、浅乃木の顔付きは明らかに変わり、アゲイスに研究所の地図はあるかと尋ねた。

「……地図と言えるかわかりませんが、あの研究所の案内パンフなら裏から入手しましたけど」

浅乃木に話しながら、アゲイスは横にいる澤田をちらちらと気にしている。

「それでいい。見せてくれないか？」

「えつ？……えつと」

アゲイスは戸惑う様子を見せた。

「……見せてやれ」

嗄れた声で澤田は、見せるよう指示をした。アゲイスは渋々と腕時計モニターを操作し、パンフの画像を出した。

パンフと言つても、研究所の図解は大まかで地図とよべる代物ではなかつた。

それを暫く眺めて、浅乃木は口端を上げた。

「……何かわかりましたか？ 浅乃木さんよお

「どうした田で睨みながら、澤田は質問をする。

澤田を見て浅乃木は薄らと笑うと、突拍子もなこと言ひ出した。

「俺は、ここから別行動をさせちまう

約一名を除いて一回は驚愕の声を上げた。

「なつ……何!? どうした事だ! そつそんな勝手は、この指揮を委ねられている俺が許さんぞ!」

顔を紅潮させ、澤田は唾を飛ばしながら反論する。

「安心しろ、俺の部下は指示通りあんたに従う。別行動とは俺一人とこいつ」とだ

「なつ……何をするつもりですか!?」

アゲイスは信じられないと言つた表情で声を荒げる。

「はあ～……多分、こいつなんじやないかと思つてましたよ。うなると先輩は反対したって聞く耳持たないんですから」

清はお手上げと言ったジロスチャーをする。

「なつなななつ……桐矢くんまで、何を言つてるんですか！」

アゲイスは顔を真っ青にして清を見た。

「つれないですねえ先輩、俺は数に入つてないんですか？」

清は首を鳴らす。

一人のやり取りを静かに聞いていた、澤田は恐ろしく低い声で浅乃木に詰め寄る。

「お前……あの時のことを忘れたとは言わせんだ

目を血走らせながら睨む澤田に、浅乃木は表情を変えず肩をすくませた。

「覚えてますよ」

飄々と応えると、澤田は尚も詰め寄り彼の襟元を掴んだ。

「だったら、そんな勝手なことは……」

「だからどうした？ お前が親父さんのことで俺を恨んでいるのは知つてない。だが、あの事件と今にどんな関係がある？」

「浅乃木の襟元を強く引き寄せるとい、顔を紅潮させ澤田は叫んだ。

「関係あるー、お前のその身勝手で横暴な行動が周りを巻き込むんだ！」

「あわわっ……けつ警部ー！」

アゲイスが澤田を止めようとしたが、それはあっさり振り払われてしまつ。

浅乃木は尚も表情を崩さず、冷ややかな目で澤田を見下ろすと襟元を持つ彼の手を乱暴に払つた。

「俺は親として、息子を助けに行く。お前は警察としての仕事を全うしろよ」

襟元を正すと、怒りに震え自分を見据える澤田に一瞥して、すぐには歩き出した。

その後を清は小走りについて行った。

鬼の形相で一人の背中を見据える澤田に、アゲイスは恐る恐る声を掛けた。

「けつ……警部、じつじつします？」

アゲイスの質問に応えず、澤田は勝手にじりと叫びつつ鼻を鳴ら

し、二人とは反対の方向に歩き出した。

アゲイスはあたふたと澤田について行く。

(* うーう) 大変遅くなりまして……こんなことは理由にはなりませんが、長期に渡りスランプに陥りやる気も殆どなくなつております。しかし、秘密基地さんのところで気分転換にイラスト依頼をお受けしたところ、他作者様の作品に触れる機会があり、彼等の作品のアイデアや文章達に感銘して私も頑張つてみようと思うきっかけをいただきました 本当に有難いです。この場を借りてお礼申上げます。有難う こんな私ですが、下手なり頑張つていきますので応援のほど宜しくお願ひします！

第五十八章（前書き）

大変お待たせいました。
乱筆乱文気味ではありますが、お楽しみいただけるばと思います。

村瀬達が立ち去った後、一人はしばらくその場で佇んでいた。相変わらず聞こえてくるのは、ぐぐもつた爆発音と床から突き上げるような地響き。

その音が徐々に近付いて来ていることが、二人には分かつていて。

近付くこの音がいすれこの地下研究所を潰すだらう。

そうなる前になんとかここから脱出しなくてはいけない。

こうしてはおれぬと、先に行動を起こしたのは悠呂だつた。だがしかし、足を一步踏み出してみればその足は力無く崩れ、床に膝を折ってしまった。

あまりの出来事続きですっかり忘れていた。自分は村瀬に撃たれていたことを……。

彼と対峙していた時は、神経を張り詰めていた為痛みを忘れていたが、緊張の糸がすっかり切れてしま、痛みがぶり返してくる。

気のせいだらうか？少し目眩もする。

意識をなんとかはつきりさせようと、頭を振つていると真正面に星羅の顔が現れた。

大丈夫かと聞く彼女に悠呂はうんと応えたが、彼女は肩の傷を見る

なり履根を寄せ、自分の首に付けていたリボンを外すと悠里の服をたくし上げ、肩に巻いた。

「うーん、いい。今日はこれで我慢して」

そう言つてくる彼女に悠呂は薄く笑つて有難う、十分だよと応えた。

星羅も薄く笑うと、すっと悠斗の脇に身を沈め肩を貸す。

悠呂もその肩を借りて立ち上がった。

「」を出たら医務室があるから、まず那儿に向かっておこう。

それ、言って星羅は懲罰を見た。

悠斗はそれに頷くと星羅に支えられ、廊下に向けて歩き出る。

部屋から廊下の様子は大体把握できていたが、実際目になると予想をはるかに超え、そこは騒然たる有り様。

煙の立ち込める視界が、尚一層混乱の拍車となり、まさに阿鼻叫喚とはこのことだと二人は思った――

地響きのせいだろ？、天井から石クズが雨のよろに降つてくる。
逃げ惑う研究員たちも手を傘に出口があるだろ？方向へ殺到してい
る。

悠呂達も意を決し、その波に乗つて出口に向かつて行った。

しかし、歩けど歩けどそこは星羅の見知つた研究所とは様変わりしていた。あの頑丈を誇つていた建物が、嘘のようだ。通れたはずの道はものの見事に岩のよつた瓦礫で塞がれてしまつてゐる。

その行き止まりが逃げ惑つ研究員たちの動搖を更に煽つていた。

その騒然たる雰囲気に飲み込まれそうになりながらも、星羅は懸命に頭の中で他に通れた道はなかつたかと見取り図を思い浮かべ歩いた。

壁のよつた瓦礫にぶち当たり、懇願をも神頼みともつかぬ研究員の叫びを尻目に、星羅は悠呂を支えながらその道とは別のフロアの廊下に入った。

案外、このフロアは冷静さを欠かない研究員達が容易に見つけるらしく、まだらだが急ぎ足程度に星羅達を追い抜いて行く。

その中で彼女だと氣付く者もいるが大概は分かつていながら申し訳なさそうに通り過ぎて行く者が多い。

それでも、声を掛けよつてじよつかとチラチラといひながら窺つ者もいた。

そんな彼等に星羅は黙視で大丈夫だと告げてやると、すみませんと言いたげな目を寄越して一礼し先を急ぎ歩いて行く者、それでも

「お手伝いしましょうか？」と親切に声を掛けってきた者もいた。

「大丈夫だから、先に避難して下さー」

と丁重にお断りして、彼等の安全を優先させた。

しばらく歩いていると逃げる研究員の中に見知った背中があつた。

しかし、その人物は星羅の記憶ではここに存在していることが有り得ない筈の人ーー。

信じられなくて後を追おうとしたが、足がそれを拒否し追つことが出来なかつた。

悠呂は首を傾げて顔を覗き込み、呆然と一点を見詰める彼女に声を掛けた。

「どうしたの？」

悠呂の声にはつとした星羅は、戸惑いの表情を見せ何か言いたげだつたがすぐに首を横に振ると何でもないと告げる。

彼女は表情を少し曇らせたまま、俯き加減に歩みを進める。

何だかそれ以上は聞いてはならないような気がして、悠呂も黙つて歩いた。

無言のまま、一人は暫くその人がまばらな廊下を歩いていたが、いきなり星羅は道を外れ違う方向へ導いた。

「えつ？」

と声を漏らす悠斗は、星羅は少し声を落として説明する。

「傷……手当てしなきゃ。」この先に医務室に続く廊下があるのと指をさした。

このフロアはあまり被害がないのか、瓦礫も少なく塞がっているところもないようで、スムーズに目的地へ到着することができた。

「うーん」

と立ち止まつた扉のプレートには「医務室」と書かれてある。

星羅は悠斗から体を離すと、扉の脇にあるパネルを操作して扉を開ける。

先に一人で入り、電気を点けた。

悠凹は自分の足でゆっくり入り、中の様子を窺つた。

そこは白を基調とし、医務室に相応しく清潔感のある部屋になつてゐた。

ここも被害は少ないようである。整然と並ぶ白いベッドが一つ、医療器具もそのままになつていて綺麗に並べられ、いつでも軽い手術ならできただった。

奥にはガラス張りの手術室が設けられている。ここで手術をしていたのだろうか？

鉄物が触れ合う音がして、田をそちらに向けると壁に埋め込み型の戸棚があり、その前で引き出しを開けて星羅が治療器具を探していた。

ぼうとその様子を見てみると、星羅がこじりこじり気付きたとするといきなり顔を染め、悠凹のすぐ側にあるベッドを指差してそこに座つてと指示をする。

悠凹は言われるままベッドに腰を掛け、自分はそんなに彼女を見つめてしまつていたのだろうか？と照れて頭を搔いた。

一人、照れていると治療器具一式を揃えて星羅がやつてきた。近くにある椅子を引っ張り出してそこに座る。

悠呂を見ると、先より更に頬を赤らめ下を向きながら指示する。

「上の服……脱いで

言われた悠呂もなんだか恥ずかしくなつてモジモジし始めてしまつた。

そんな悠呂を知つてか知らずか、星羅も頬を赤らめたまま、手元に引き寄せた台に持つてきた治療器具一式を広げ、包帯や消毒液やらの準備を手際良くし始める。

悠呂はといつと、顔を真つ赤にして脱いだのが脱ぐまいがと服を腹の位置で上げ下げし迷つていた。

それに見かねた星羅は、まだ脱いでいなかつたのかと言つた表情で母親がするよひに、えいと脱がしてやつた。

そのじがまた、恥ずかしくて悠呂は申し訳なやうに

「すみません」

と言ひながらまた頭を搔いた。

肩の傷口はやはり、星羅のあてがつたリボンでも間に合はず、今も傷口から脈打つよひに溢れてくる。

弾丸のない銃とは言え、改良され殺傷能力は遙かに高い。

まるきり素人の星羅には、消毒とこれ以上流れぬように止血にと腕に固く三角巾で縛るといった粗末な処置しか出来なかつた。

「ありがとう」

と笑顔を向けてくる悠呂の顔色は、時間が経つにつれ悪くなつていく。

これ以上、自分ではどうすることも出来ない歯がゆさに星羅は、引きつった笑顔でそれに応えるしかなかつた。

「もう少し、休んでいきましょう。あなたも少し横になつた方がいいわ」

悠呂は星羅の提案に薄く笑みを見せ、頷くと深い溜め息ついて倒れ込むよつに横になつた。

星羅は治療器具を元に戻しながら、早くここから脱出し彼を病院に連れて行かねばと焦りを感じた。

かなり我慢しているのだろう、本当ならいつ意識を失つてもおかしくない状態ではないのだろうか？素人目でもそう感じる。

チラと彼に視線を遣ると、天井をぼんやり眺めてベッドに仰向くその胸元は上下に激しく起伏している。時折、カチカチと歯を鳴らすのは寒気がしているのだろうか？

もう少し寝かせて遣りたいが、ここにいても治る筈もない
く、ましてやここは今崩壊寸前。

下手をすれば、火の海に飲まれ一人とも命を落としてしまつ——

星羅は一度、堅く目を閉じて大きく息を吐くと意を決し力強く目を開け

「そろそろ、行こうか……」

と促した。

悠呂も顔をじぶんに向けて、薄く笑うと小さく頷いた。

第五十八章（後書き）

大変お待たせいました。第五十八章無事更新できました
か
なり行き詰まつておりましたので、文章のまとまりの悪さがかなり
気になります。早く完結をと気持ちだけは焦るのですが、どうにも
上手くいかず読者様には大変ご迷惑をおかけしているんじゃないで
しょうか……

ごめんなさい。頑張りますので、最後まで長い目でみてやっていた
だけると有り難いです。

長文になりましたが、次回をお楽しみ下さい。 B Y 憂真

第五十九章（前書き）

大変長らく更新しなかつたことを深くお詫び申し上げます。な
にぶん、長期執筆から離れておりましたのでお見苦しい点があるか
と思いますが、どうかご温情いただき読んでいただければと思いま
す。

対策チームから外れ、単独行動を選んだ浅之木と清はフェンスの近くで、自分たちが派遣し潜入させている門番の一人に事情を話していた。

「えつ！ 浅之木警部……それはどういつ

いきなりの話に門番は目を丸くしている。

「言葉の通りだよ。まつ……俺等は元々諜報員だ、人員を指揮することはもとから出来ない」

それはそうですがと門番は心配顔で浅之木、清両名の顔を窺つ。

「それでも、単独で行動なんて！ しかもこんな状況の時に……」

門番は少し躊躇う表情をして下を向いたが、何か決心したのかすぐに顔を上げ力強く応えた。

「わかりました！ この地下の隠し通路をお教えしましょう！ 但し、私も御一緒します！」

その有り難い申し出に浅之木は静かに首を振つた。

「駄目だ。お前はいいでいいの」

しかし、と食い下がる門番に清が彼の肩に手を置いた。

「申し出は有り難いが、お前はいいで自身の仕事をしていくれ」

それでもすがるような目で見る門番に、浅之木は軽く笑つて……

「だつてえ～ん、ほりあ、お前もあのタ「親父のクドい説教と山のよつな始末書を書かなきやならなくなるよ～それでも良いのかふう～」

浅之木は体全体を気持ちが悪いほどクネクネし、おどけて見せる。

門番は浅之木の気持ち悪さになのか、はたまた自分が課長に怒鳴られ、山積みの始末書を書く姿を想像したのか顔色がみるみる青ざめていく。

「……先輩」

清が少し呆れ気味で溜め息をつくり、門番に田を遣り

「まつ……そういうことだ。お前は、あの泥田の警部様の指示に従つてくれ」

清は後ろで対策を練つてゐるだらう澤田がいる場所を指した。

「は……はあ」

納得いかない様子で門番は返事をする。

「じゃつ……隠し通路とやらを教えてくれ」

浅之木はそれだけ言つと、清にチラと田を遣りフェンスの中を窺つ。

清はそのアイコンタクトにひとつ頷くと、こちらですと案内する門番について行つた。

ひとり残つた浅之木はただの原っぱにしか見えないフェンスの中をじつと眺め、煙の上がつてゐる場所、星羅が入つて行つたである

う場所を順番に確かめるように周囲を少し歩いてみた。

「……？」

浅之木はある場所で足を止めた。

確かにそこは出入り口になっていたらう地面……

その箇所は中からの振動により、深く陥没していた。

「何とこう」とだ……これじゃ

浅之木は額に手を置いた。 中には何十人という研究員、それに潜入させておいた仲間が取り残されている……

他に出口があるのかもしれないが、星羅が入つて行ったこの箇所は絶望的だった

「へつ……悠臣……無事でいてくれつ」

一方、清は門番に案内され目的の場所に辿り着いていた。正門から随分と回り込んだ、裏手の場所だ。

それに中に入れるようなものは今の時点、全く見当たらぬ。清は眉をひそめた……

「……お前、俺たちを騙したんじゃないだろ?」

そう凄む清に門番は肩を竦め

「ちよひ……ちよひと待つて下されよ。騙したりしていませんよ。」

門番はもはやのではないかとこつまど首を左右と振る。

「うひ……うひです」

門番は少し怯えながら、清の前を申し訳なさそうに横切つてフェンスの一部を押した。

するとフェンスの一部がドアのよつて動いた。

「……！？」 いつのまは

清が驚いていると門番はひとつ頷いて、先に自分が中に入り清を招いた。

「『』の隠し通路は、二十世紀時分に日常で使われていたであろう技法、いわゆる機械を使わない手動といつものを使っています」

この近年、ドアというドア、入り口という入り口は全て機械に頼つておりもし故障したとしても予備機能やら予備電源など一切、人が触れずとも入れる仕組みになっている。恐らく、今の子供達は自分の手で押したり引いたりする扉の存在はあまり馴染みがないだろう……むしろ、存在自体あまり良くわかつていかないかもしれない——

清は中に促されながら、不思議そうにフェンスを見ている。

再びこちらですと呼ばれて振り返ると、今度は、地面に片膝をついて何やら持ち上げようとしている。

重そうにしてるので、清は駆け寄り門番を手助けする。

「手伝おう

すみませんと門番は清の手を借り、地面を剥がす。

あると中には、地下に繋がる階段が現れた。

清は階段から門番に田を遺ると、彼は強く頷いた。どうやらこの六
のようないり口が地下研究所に続く、隠し通路のようだ。

「悪いが、先輩を呼んで来てくれないか

門番はわかりましたと返事をし、もと来た道を戻つて行つた。

門番がフーンスを出たすべてのところで、浅之木は立っていた。

「あつ警部、今お呼びじよつと……」

言いかけたところで浅之木はやめとこつた風に手を振つた。

「あ～今オレ、警部じゃないから 浅之木さんでいいよ

えつと驚く門番をすり抜けて、フーンスのドアをくぐりはじめて

たと立ち止まつた。

「ほつゝなかなかの仕掛けじやないか……一十世紀時分のものだな」

そつと音つてフェンスのドアを開け閉めしている。

「はいっ！ 結構単純な方が逆にわかりづらじと研究長が……あつ

「研究長か……」

そつと音つて浅之木は頭を搔いた。

「いっいや……あのつ、潜入中は我等はヤツの忠実な下僕として……つこ、くせでそのつ」

あわあわと弁解する門番に浅之木は笑つて、彼の胸元を小突くと

「氣にすんな……それがお前らの仕事だひ？」

そつと音つて、肩に軽く手を置くとすぐて背中を向け

「それで？ どうだ？ 地下に行けそうな隠し通路とやらを見つかったのか？」

と中にいる清に問いかながら、さつとフロントの中に入つて行った。

門番も慌てて浅之木の後を追う。

はい、ありましたと清は跪いて地面の穴を指差した。浅之木はゆっくりそこに近付くと、顎の無精鬚を触りほおと感心している。

暫く地下に続く階段を見ていた浅之木は躊躇もせず、自ら先頭だつて中に入つて行く。

清はそれに続かず、門番に問いつ。

「この階段を降つとどうなつへ？」

そう聞かれ、門番は真面目顔で倉庫ですと応える。

清はそうかと頷くと、薄暗い階段をひとり降りる浅之木の背中をじつと見遣っていた……

すぐに自分も後に続く。

門番は暗闇の中に溶け込む一人の背中を心配そうに見送った。

薄暗く地下に続く階段を一人は足下を探るように降りて行く。
ペンライトを灯しているが、それだけでは心許ない——

ようやく降りきった場所には、小さい入り口からしき鉄の扉が現れた。お互に目配せすると今度は清が先頭立つてそつとその扉に触れる。

冷たい感触がするだけで、自動で開く様子はない。これもフュンスの要領なのかと扉を押してみる。

しかし、びくともしない……。ペンライトで鉄扉をあて詳しく調べてみる。

真ん中の右手辺りに丸い窪みをみつけ、その中にある取っ手らしきものを軽く引っ張つてみた。

すると、扉は重く軋むような音をたてなんなく開いた。

「先輩……」

清が浅之木に目を遣ると、浅之木は行けという風に頷いた。

それを受け、清はそつと扉越しに中を窺う。

薄暗く良くわからないが、奥へと続く廊下があるのが見える。再び、浅之木に振り返り彼に頷いてみせると清はすっと胸元から銃を取り出し、胸前に構えると静かに中に入つて行く。

浅之木はそれを見てから自分も銃を取り出し、電子式になつた銃の残り残量を見た。

電子式になつたとしても殺傷能力はある拳銃——

浅之木は、はつと我に返り銃を構えると中に入つた。

たどり着いたところは、薬品の倉庫のようで薬品独特の匂いがほんのり漂つてくる。

浅之木が薄暗い天井を見上げてみると、大規模な倉庫らしく天井につくほどの大棚が整然と並んで、棚の中にはぎっしりとダンボールの箱が詰まつてゐる。

「ある意味、絶景だな」

浅之木は独り、清に目を遣つた。彼は続けて警戒しながら、辺りを見遣り地下研究所に続く入り口を探している。

浅之木は、出口の搜索を彼に任せ棚のひとつに歩み寄つた。ペンライトを箱のひとつに当てる、ラベルを確かめる……

課に配布された資料に目を通してなければ、全くわからない薬品名だ。

浅之木は箱のひとつを棚から卸し、中を開けてみた。

中からは、綺麗に袋分けされた粉末状のものがぎっしり詰まっている。

その袋にも一寧に薬品名のラベルが貼られてあった。浅之木は記憶を呼び起し、資料の内容を必死に思い出そうとした……

「……確かに、細胞を強制的に分裂させる薬……だったか?」

ラベルにペンライトをかざしながら、独り呟く。

「先輩……」

清が出口を見つけて戻つてくる。

浅之木は薬品の大袋を破り、中の小袋をひとつ取り出し後は棚に戻した。

「……？ 何ですか？」

清は浅之木の手中にあるものを覗き込んだ。

「……証拠品」

それだけを言って、袋を清に手渡した。

清は慌てて受け取ると、改めてその袋が何なのか調べてみる。 渡した張本人はフラフラとどこかへ行ってしまったので、彼が戻した箱のラベルを見てみる。

「……！？ これは資料にあった薬品……」

清はフラフラ歩く浅之木の背中を見遣り、溜め息をつくと

「たくつ……先輩は……根つから仕事人間なんだから」

浅之木の背中に呴くと、胸元から証拠品収納力プセルを出して、そこへ納めた。

第五十九章（後書き）

大変長らく更新しなくてゴメンナサイ。サイトをご存知の方はブログにて大体おわかりかと思いますが……まあふつちゃけ、スランプと創作意欲の欠如……平たく言えばやる気ナッシングだつたわけで……あははははつ汗

楽しみにしていただいている方には本当に申し訳ありませんでした
(泣) まあ~いるかどうかわかりませんが……

そうそう、あまりにもプロットより加筆し過ぎて携帯では読みづらい長さになってしましました……オマケに実はプロットはまだまだこの先があつた……なのでその分は六十章以降に組み込むことにしました！ まだいぶ間あいちゃうかもですが、気長にお付き合い下さいませ！

最終話 - ? (前書き)

大変長引いて、『無沙汰しておりました』かなりブランクがあいておりますので読みづらい文章になつていてるかと思います

それだけ『ご』承いただければ……

爆発の影響で天井からは瓦礫が雨のように降っている まだ爆発や振動は続いている

人の気配のない廊下を悠呂と星羅 一人はゆっくりとした足取りで歩いていた

悠呂の息づかいは依然として深く、支えて歩く星羅の歩みも重くなっていた 何もなければすぐにでも外へ出られるのだが、爆発の影響もあって通れる廊下に限りがあり、先から遠回りを余儀なくされている

重傷の悠呂の体力は徐々に削られて星羅が支えていなければ歩くのも困難だ、少し休ませてやりたいがここが崩れ落ちるのも時間の問題なのだ そんな状況から星羅は足を止めることが出来ずにいた

地上に近い方へと道を選び歩いてきたが果たしてこの道であるだろうか？そんな不安を思い起こさせるほどにこの地下研究所は無惨な有り様をさらしている

辺りが静かになると一人の息づかいだけがして、それが余計に不安を搔き立てる

そば近くに荒い呼吸を感じて星羅は支える体を気遣つた

「大丈夫？ しつかりして！ もう少しよ」

その声掛けに悠斗がちからなく頷くのを見て星羅は支える体を抱ぎ直し力強く歩みを進める

その先では電灯が所々壊れ、唯一残った電灯が心もとなくついたり消えたりを繰り返している

その廊下を歩きながら星羅は何かの匂いに気がついた……

良く嗅いでみると鼻につんとくる薬品の匂いだ この匂いがしていくとこいつことはあの倉庫が近い、倉庫の一角が無事ならばきた時に使つたあの隠し通路が使えるかもしれない……

星羅は少し安堵したすると自然に足が早まつた

その頃、倉庫から地下研究所に潜入した浅乃木と清両人は倉庫の扉に苦戦していた……

どうやら、この震動により自動扉が壊れ半開状態になつていて、その隙間から中をうかがうが、人の気配が感じられない。片手一本分に開いた隙間をどうにかこじ開けようと浅乃木は手を力を込めて引きむがびくともしない、諦め手を抜くとすぐ横から細長い鉄板のようなものがあらわれ隙間に収まる

「おい、これどうした?」

後ろを振り返り訊くと清は口角を上げて笑い自身の背後を指差して応える

「ここに腐るほどありますよ」

指差した場所には荷物がすべて降ろされ箇所があり、その棚の一部の天板が外されていた。それを見た浅乃木が感心した声をあげ

「ふつ……お前にそんな力があつたとはな

と茶化した

「あ、先輩、俺を見くびりましたね?」

「……お前は頭でつかちで体力のないもやしつ子だと思ったがな」

「もや……ふ、ふん！ 好きに言つて下さいよ！ それよりこれ、手伝つて下さい」

やれやれと言つたかんじで浅乃木は清を手伝つた

二人の力が加わつて扉は軋みながら少しずつ開いていく 人がひとり通れるくらいに開くと浅乃木が先に中へと侵入した 清もその後につづく、扉から出るとそこは廊下の途中で左右には奥につづく長い廊下があり壁は白くて所々に何かの部屋だろう扉がいくつもある

浅乃木と清はまわりを気にしつつ、部屋をひとつひとつ開け中を確かめていく、しかしどの部屋も誰もおらずもぬけの殻だった 脱出したのか、はたまた地下へ潜つたのか

「おい！ 清、そつちはどうだ？」

だが、期待した返事はかえってこなかつた 廊下の先にはひとつのみ扉、奥につながつてゐるらしい……

浅乃木と清はお互ひの顔を見合わせ、その扉に手をかけた - -

扉はこちらも壊れていて自動では開かず、二人で力任せにこじ開ける 開いたその先は今までいた場所と比べものにならないほど崩壊していた

「いじや、また……」

浅乃木も清も呆然とする

「想像以上の崩壊ですね……」これは、早く悠田くんたちを見つけて脱出しなきゃ俺ら共々生き埋めですよ

そう言って清は先に入り、道を作るため瓦礫をよけ始めた

浅乃木も全くだと呟いて清に倣う

何分、何時間この作業をしていたのだろうか 浅乃木はふと自分たちがつくった道を振り返る

入ってきた扉が遠くに見えた 額の汗を拭い、違うほうへ行つた清の背中に呼びかける

「おーい！ 下につながるような道は見つかったか？」

数秒おくれて、いいえという応えが返ってきた 仕方ないので違う道を模索しようとしたその時、どこからか物音がした

「おい！ 清！！ ひつちだ！」

清を呼び戻し、物音がした場所を一人は探す

何やらぐぐもつた女のような声がどこからかする 一人は手当たり次第に瓦礫をどけ小さな隙間の開いた岩をみつけた

その岩に挟まる小さな隙間の上の石は大き過ぎて一人ではどうしようもなかつた とりあえず岩の向こうの相手へと浅乃木は声を掛け

てみた

「おい！ 誰かそこにいるのか？」

相手は自分たちの存在に警戒したのか応えなかつた

構わず浅乃木は続けた

「おい！ どうした！ そこにいるのか？」

返答はやはり返つてこなかつたが相手が身動きしたのがわかつた

しまつた逃げられたかと思つた瞬間……

「おじつ…… わせ…………？」

と粗手が反応した、「この声は……

「ん？ その声は、星羅お嬢様か？」

また身動きしたのがわかる、ビーフやソーセージばかりの六でこちらが見える、うう……

「君がここのとこにいるとは、悠咲は？ 悠咲は一緒にいるのか？」

一瞬の沈黙があつた 浅乃木は嫌な予感がした

「おじわせー！ 悠咲が………… 悠咲が」

彼女の切迫したその声音が予感を的中したのだと浅乃木は思つた……信じたくないという思いが一瞬言葉を詰まらせ、しかしそだ希望があるかもしれないと縋る気持ちで星羅に問いかける

「悠凹が……どうした？ そこに……星羅お嬢様の傍にいるんだな？」
できれば次の言葉は聞きたくなかった……が、星羅が涙ながら告げる

「悠凹が……悠凹が……息を……息をしていない……」

その言葉に浅乃木は田の前が真っ白になり、次の言葉が出てこない

それを見かねた清が瓦礫の向こうの星羅に悠凹の状態を聞いたあまり良くないよつて星羅の嗚咽だけが聞こえる

清は彼女にしつかりするよつて告げると的確に心肺蘇生の手順を教えた

心肺蘇生をそのまま続けるように告げると清は足下で意氣消沈している浅乃木の背を思いつきり叩いた その拍子によろけながら見上げる浅乃木に清は強く言った

「先輩！ 何年この仕事してんです！ こうなるだろ！」とは予想できていたはずでしょ！ しつかりして下さいよ！ 何のためにあのドロロ刑事から外れてまでここに潜ったんすか！」

真剣な強い眼差しを向けられながら浅乃木は掠れた声で応えた

「…………ああ」

「生きますよ！ 先輩は俺と違う方向へ！ 絶対、一人を助け出しましょー！」

今度は強く肩を叩かれ浅乃木は顔を引き締めた

力強く走り出した清の背中を見送りながら、立ち上るとその背中とは反対に浅乃木も走り出した

お田代しづか美也子

さくら、みのりかねばねの樂しみやう

—数時間前……

どれだけ歩いてきたのだろうか？ そう思わせるほど研究所の崩壊は凄まじい……

遠回りしてようやく嗅ぎつけた薬品の匂いだがそこへ続くはずの廊下が瓦礫に埋もれて先に進めず、迂回を続け道を探し探しに進んできた。悠臣と星羅一人は疲労困ぱいでほとんど無意識で歩いている——

懸命にまえに進んできたが、どうしても限界を感じその場に一人倒れ込むように座り込んだ

悠臣はすぐに上体をずらし横になる形で寝転び荒く呼吸をする星羅も瓦礫の破片だらう岩を挟み込み半開した扉に背を預けこちらを息荒く天井を仰ぎ見た

—果たして自分たちは無事にここを出られるのだろうか？

そんな一抹の不安を感じ始めていた 星羅は隣で横たわる悠呂に視線をむけた、肩口の出血が酷く応急手当した箇所から再び鮮血が染み出ていた

顔色も段々血の氣を失ってきていた 星羅ははたと何かの違和感に気付く……

先ほどまで呼吸荒く肩で息をしていた悠呂だが、今は静かになつている 寝てしまつたのだろうかとも思ったが嫌な予感がして星羅は飛びつくなつに悠呂の傍に寄り口元に手を近づけてみた……

一気に血の氣がひいた……

呼吸が……ない

「 ゆ、悠呂ー！ ねえ！ 起きてー！ 息をしてー！」

激しく揺さぶが反応はない……

「 い…いや……悠呂… …… 悠呂… ……

星羅はどうしていいのかわからず、彼の胸に突つ伏して何度も名前を呼び続けた

するといつからか」もつた声のよつなものが聞けた。星羅は一瞬、身を強ばらせ辺りを窺つた

「おこー 誰かそこにあるのか?」

じつやいら部中の方から囁いてくる…………星羅はひつと壁から部中を外す

「おこー じうしたー! そこいるのか?」

「……どこかで聴いた声

星羅は声が聞こえる箇所を慎重に探し、小さな瓦礫のひとつを取り除くとそこから覗いてみた相手は「ちらに」気付いていないようだが、間違いなく星羅の見知った顔だった

安堵からか溜め息のよつに声が漏れる

「おじ……わめ……」

その声に浅乃木は「ちらが見えないのかあさつての方向を向きながら反応した

「ん？ その声は、星羅お嬢様か？」

助かるかもしれないといつ喜びで星羅は瓦礫の壁にすがりついた

「君がこことこへ」とせ、悠凹は、悠凹せ一緒になのか？」

やつ訊かれて、星羅はまつと壁から顔をあげ悠凹を振り返った

「ねじね、悠凹が、悠凹が、」

震える声が相手に今の状況を伝えてしまつてこるのか、一瞬沈黙が
おつる

「悠凹が、びつした？ あいつはソーリー……星羅お嬢様の傍
にこらむんだな？」

浅乃木の沈んだ低い声で訊かれ星羅はいたたまれなくなり、嗚咽混
じりに先を告げる

「えつぐ、おじ、やめ、や、や、悠凹が、悠凹が、いつ、いつ、
いつ、ぐ、息、息を、を、して、して、していない、の、」

再び、沈黙がおりた - -

すぐに浅乃木とは違う別の声が尋ねてきた

「星羅さん、落ち着いて！ 悠呂くんは今どんな状況か詳しく教えてくれるかい？」

そう訊かれるが、星羅は涙がとめどなく流れ应えようにも声がまともに出てこない

「星羅さんー！ 泣いてる場合じゃないー！ しつじつている間にも悠呂くんの蘇生率が下がっていくんだ！ 的確な処置が間に合えば助かるかもしれないんだー！ しつかりしろ！」

壁の向こうから一喝され、星羅は涙を拭つて「めんなさ」と返事を返した

「よし、少しば落ち着いたかい？」

落ち着いた優しい聲音で問われ星羅はひとつ大きく息を吸うと「はい、大丈夫です」と気持ちを切り替えた

壁の向こうからの質問が始まる相手はあくまでも冷静沈着に質問をしてくるので星羅も動搖せずに的確に相手に伝えていく

「そうか、じゃあ今から僕が言つ通りにやつて下さいね」

「はい」

「まずは、肩口の方からだこれ以上の出血は危ない…………君、ハンカチか何か細長い布のようなものは持つてないかい?」

「…………布」

星羅はスカートのポケットを探るが何もなく、どうしたものかと忙しく自分の服などを見て思考する

仕方なしに目についたのはスカート…………そつとスカートに手をあて意を決すると裾の方からびりびりと破り、すねまであつた白いスカートは見事に膝上までになつた

「ありました」

「大丈夫かい? なんか破ける音がしたけど…………」

「お嬢になじらなこで下せー」

「う、うん……じゃあ、それを悠斗くんの肩口に縛つてちゅうと隙間をあけてそこに棒きれか何かを入れて捻るんだ」

「棒きれ」と言われ、肩口に自分のスカートの布を縛りつけながら辺りを窺つ

瓦礫から飛び出る鉄筋に目がつき引き抜こうとするがやはり無理で、他にいかと探し見つけたのが何かの折れた木の棒で少し細くて頼りないがそれを布に差し込むと、ネジを巻くよつて捻つた

「やつました

「うん、じゃあ次は彼の首が手首に触れてみてくれないか

言われるまま、星羅は悠斗の頸動脈辺りを触る……脈はない

「どうだい？ 脈はふれるかい？」

「…………ふれません」

次の指示がすぐに返つてこない

「…………わかった、じゃ、悠西くんの額に手をおいて、反対の手の指先をあご先にあてて、あご先を持ち上げながら頭を後ろにそらして」

指示とおりに試み、頭を後ろにそらしてやると悠西のくちが自然に開いた

「やつました」

「いいかい、今から心肺蘇生に入る」

「はい」

「大丈夫、指示どおりにしてくれたらうまくいくよ いいね?」

「はい……」

星羅は清の指導のもと心肺蘇生を開始する

「君は悠呂くんの意識が戻るよう努力して!! 僕たちはそちらに行ける道がないか探しすぐにそちらに向かう いいね?」

星羅の返事を待たず壁の向こうは静まり返った - -

その静けさが不安をよぎらせたが、不安な気持ちに負けまいと必死に悠呂の心肺蘇生を続ける蘇生を行いながら悠呂の顔を見るが依然として息を吹き返す様子がなく、星羅の視界がみるみる涙でぼやけた

「お願い悠呂..... 戻ってきて、 - -

星羅の涙がひと粒、悠呂の頬に落ちずっと流れた

最終話 - ? (前書き)

最終話が長くなってしまったので大変申し訳ありません

では、お楽しみ下さい

星羅に悠斗をまかせ、動き出した浅乃木と清は向こうへ通ずる道はないかと一手にわかれ探し始めた

奥に進めば進むほどさきほじまでいた場所が嘘のように足場が悪くなつていいく……

瓦礫の除去に躍起になつている浅乃木のもとに雑音混じりの通信が入つた

「先輩……」いらです

「清、いまどこだ?」

「…………のつて……左手に……こてきたの……を……」

雑音が酷すぎてよく聞き取れない

「あ? すまん、もう一度たのむ

「やつやの……つて……扉を……その先に俺のネクタイ……そり……」

み……いつて……すぐ……

「…………わかった、また連絡する」

よくわからなかつたが、とりあえずきた道を戻り、ここへ入つてき
たときに使つた扉まで来たところでこちらから通信を試みる

「おい、清！ 入つてきた扉まで来た、ここからどう行けばいい？」

依然雑音が入るが今度はちゃんと聞き取れる

「その扉の道を少し行つて……左手……俺のネクタイ……置いてる
んで……右に来て……」

「わかった、すぐに行く」

言われた通り清が瓦礫をよけて作った道を行くと、手に別れた場所
が現れ、さらに聞いた通りに大きな瓦礫の岩に紺色のネクタイが挟
んだあつたので右に行つてみた。そこを曲がると見覚えのある背中
がそこらにあつた一本だろうか、鉄の棒のようなもので半壊してい
るドアにあてがいこじ開けようと格闘していた

「……か？」

浅乃木が声を掛けるとこちらに振り向いた清は、ドアとの格闘をやめ「おそらく」と零した

浅乃木は半壊したドアに近づき扉の具合を確かめると、自身も手頃な棒はないかと探し、瓦礫と瓦礫の間に刺さる少し太めの鉄のパイプを見つけた手にした

「おっしー 一気にやるぞ

浅乃木の気合いの入った一声に清は頷くと、力を込めた。浅乃木もドアに鉄パイプを差し込むと清とは逆の扉へ負荷をかけた、ドアは耳障りな鈍い音をたてながら徐々に開いていく

ちょうど人がひとり入れそうな隙間が出来た

「清……行け」

「了解……」

清は素早くドアのなかに入り、一人を探しに入った。浅乃木はその後ろ姿を見送ると田だけで辺りをさぐり何かの拍子で閉じてしまつても隙間ができるくらいの手頃な石はないかと探した

ちゅうじ足下に大きな岩があつたので、パイプをドアに挟んでその間に手をかけた

腰が抜けそつになるくらいの重量だ、足をふらつかせながら何とかドアに挟み込み、自身も清の後を追つて走つた……

* * * * *

星羅は無我夢中で悠凹に心肺蘇生を続ける 悠凹の胸を圧す腕が段々重く感じ、もう限界だと諦めかけたとき息を吹き返し咳き込んだ

星羅は慌てて悠凹を横向きの姿勢にし背中をひきしめる

悠凹は咳き込みながら、ついついと口を開けた

「せこ……ひ

星羅は悠凹の顔を覗き込んで声にならない声で一言「うさん」と応えた

「……僕は……一体？」

まだ意識がもうろうとしながら訊いてくる しかし、しつかり星羅と視線は合っていた

「……少しの間、呼吸止まつてたの」

何故だか涙が溢れ、嗚咽混じりに星羅は説明していた

「もうか……」

もうひうとした意識でむせび泣く星羅を気遣い、「もう、大丈夫だよ」と弱々しく微笑んでみせた

それに応えようと星羅も涙でぐしゃぐしゃな顔で笑んだ

それを見て安心した悠臣は、鉛のように重たい体を横向きから自分でなんとかあお向けに戻し大きく息をついた

星羅はそんな悠臣の横顔を見て涙を拭いながら「あのね」と続けた

「……悠呂を助ける方法をね……おじ様たちに教わったのよ」とぼつり話す

「おじ様？」

まだ、意識がはっきりしない頭で言われピンとこないよつて天井を見つめたまま悠呂は口を噤んでしまった

星羅はくすりと笑つて応えてあげた

「あなたのお父様よ」

「ヒハ…… もん」

悠呂は天井を見つめたまま呪文のよつて呟いた

どこのか遠くで誰かが走つてくる音がしてくる

悠呂はこれもぼつとする頭のせいではないかと思つていると

「悠呂くん……無事か……？」

と声が聞こえてきた、幻聴か、はたまた夢なのかと疑い目を上げてみると薄暗い闇の中に淡い青が目に入った

「……意識はとつとめたんだな？ 蘇生して何分くらいかわかるかな？」

傍にいる星羅に話しつけながら清は悠呂の顔を覗き込んだ

薄闇で良くはわからなかつたが、どうやら助けがきてくれたのだとわかると悠呂は安心してしまつたのか再び目を閉じてしまつた

「……そんなに経つてないかと……つこせつとき目が覚めて……悠呂……」

星羅は再び目を閉じてしまつてこる悠呂を見て驚き動搖した

その視線を追つて清は悠呂を見やり、にこりと笑うと落ち着いた聲音で星羅に言った

「……ん、大丈夫だよ ほら、胸を見て、じらじらとゅっくりだけじ上下に動いてくるだろ？ ちゃんと息はしてこる 助けがきたんで安心

して寝てしまったんだろ？

そう星羅に説明しながら清は躍つしまつた悠呂を背中に背負い始めた

星羅も慌てて駆け寄り、手助けをしてやる

「ありがとう、君は大丈夫かい？ 走れるか？」

「はい」

「じゃ、時間がない 行くぞー。」

清は悠呂を背負つてもと来た道を走り出した、星羅もそのあとを必死についていく

時折、大きな揺れがきてすでに脆くなっている天井から小さい瓦礫が降ってきてそのたびに足を止める星羅に清は振り返り叫んだ

「急げ！ 立ち止まつてゐる場合じゃないーーー！」

「はいー。」

清に強く促され、星羅は必死に後を追つた

なんとかましな場所にたどり着くと

「清！！」

と呼ぶ声がして声の主を探すと、浅乃木が険しい顔で待っていた

「先輩！！」

そう駆け寄った清の背中に背負われる悠斗を見るなり安堵したような苦く厳しい表情をした

「大丈夫ですよ、眠っているだけですから」

「あ、ああ……さっきの出口は一応確保してあるが、この揺れだあのドアが開いている保障はない 急ぐぞ！－

浅乃木はすぐに背を向け、自身が先頭にたつて走り出す 清は星羅を振り返りひとつ頷くと後を追つて走りだした……星羅もすぐにつづく

揺れは一向におさまらず、時には大きな瓦礫が三人を襲う。この研究所が崩壊するのも時間の問題だ、自然と三人の足は早くなる

先ほど差し込むんでおいた太い鉄のパイプは見事に折れ曲がり下に転がり落ちていた……

保険にと嘯ましておいた大きな岩の瓦礫がなんとか閉まらずに保たれていた

その隙間に躊躇なく浅乃木は自身の体をねじ込み、足で半壊の扉をこじ開けると叫ぶ

「清、行け！！」
「はいっ！！」

清は背中の悠呂を氣遣いながらしゃがみ、浅乃木の足下をくぐり抜けドアの外に出きつたとき再び大きな揺れに襲われる

ドアはこの大きな揺れに嫌な音を立て足で押さえる浅乃木を凄い力で圧し戻し始めた

「う……がー！」

「おじ様……」

「先輩……」

何とか浅乃木は踏ん張り、迫りくるドアを力の限り押し戻すがその負荷は尋常ではなく、限界に達し始めた。苦しい表情のまま星羅に顔を向けて叫んだ

「わう……わたん、は、はやく……」

星羅は今にも泣きそうな顔をして困惑している

「ぐあー、は、はやく……するんだ！」

扉は軋む音をさせ今にも挟み潰す勢いだ

「先輩……」

清は悠斗を背負いながら浅乃木の身を案じ叫んだ

「お嬢さん……はやく……」

星羅は慌てて駆け寄ってきたので、浅乃木は力の限りドアを押し戻すつもりで足に力を入れるとその足にそつと手が触れた……

「な、なにを……」

星羅は優しく笑って首を横に振ると おじ様、ありがとうございました

どんーー

「なつ……」

星羅は力強く浅乃木の体を清のいる方へ押しやった

地面に倒れ込んだ浅乃木はすぐさま立ち上がり、ドアに駆け寄るが
軋む凄い音とともにドアは勢いよく閉まってしまった……

大きな揺れと、天井から落ちてくる砂ぼこり……

そのなかで浅乃木も、清も、完全に閉まりきったドアをしばらく見つめていた……

ヘルローゲ（前書き）

長くなりましたが、これで完結です

では、お楽しみ下さい

- - - 数週間後 - - -

はじめは、修理に出していたコラルロッジにまたがりエンジンをかけた 機体を浮上させると家の敷地から出ていつも通り慣れた通学路へと走らせる

大きな通りに入ると、コラルロッジに乗る学生達がずらりと機体を並べて通学していた

はじめもその流れに乗り、少しスピードを落としながらその群れに混じった

今日の風は一段と暖かく心地よかつた、トレーデマークだったつんつん頭をやめたりと青い髪が風に揺れる

「おつー、かじめ

横から声を掛けられ、そちらに顔を向けるとこかにも改造コテコテのコラルロッジにまだがり、真ん中だけ白く染め髪はピンク色の巖

つい顔が居た

「おー！ ヤジー うーす」

はじめが気安く挨拶をすると、厳ついピンク頭が一ヤリと不気味に笑って、改造コラルロッジを離してきた

「なあ、こまからどうか行かね？ いい店みつけよお

はじめは、田舎を縋るふりがりがりに応える

「行かねー

「ああ？ 何でだよー！」

「行かねーつたら行かねえの、じゃあな

ヤジと呼ばれたピンク頭のコラルロッジを振り切ってはじめはスピードを上げた

他の学生達の間をぬって、先に進んでると例の研究所があつた場所にさしかかった

研究所だった場所には、黄色いテープが張られ、まだに警察が出入りしていて物々しい雰囲気だ

はじめは無言で研究所跡を通り過ぎた

例の研究所跡の道を抜けると、学生達が真っ直ぐ進むのに対しはじめはひとり道を外れて緑の生い茂る敷地にコラルロードを走らせる

緑が続く道を草木の匂いに包まれながらはじめは大きく息を吸った
その先に白い大きな建物が見え、そのなかに入つて行った

入り口らしきところでコラルロードを止め、エンジンをきり降りると機体のある地面に丸い円の切れ目が現れ自動的に地下へと吸い込まれていった

はじめは乱れた自身の髪を手ぐしでさうと整え、建物のなかに入つていく

「よひー、気分はどうだ?」

いつものように鬱陶しこぼび明るい声に悠斗は田を開ける ベッドの横の椅子にはじめはがそつに座った

「…………毎日、毎日、来てくれなくてもいいよ」

「つるやり顔ではじめをねめける

「なんだよー セツかく毎日けなげに見舞いにきてやつてんのにその顔はよ」

悠斗はむつつとした表情で手元のボタンを操作し、上体を起こした

「どうせ、学校に行かずサボる口実でここへ来たんだじょ…………」

「ひひ……」

「痛いとこ」を突かれてはじめは顔色をかえる

「大丈夫なの? そろそろ中間テストが近いんでしょう?」

「「つ、まあ……そつ、なんだけど」」

はじめは苦し紛れに頭を搔いた

「だけど?」

悠斗のいたゞい視線を外して

ゆつくり立ち上がり、窓際に歩くと外を眺めながらはじめは静かな口調で先をつづけた

「…………あんなことがあつて、その……お前大丈夫なのかなつて心配になつてしまつて……そつ思つたらテスト勉強どじがじやなくつてさ」

その言葉に、はじめの心中から視線を外した悠斗は俯いた

「…………あの日

氣を失うように眠ってしまった悠呂は、何も知らずに助け出され病院へすぐに搬送されたがしばらく昏睡状態がつづき、目が覚めたときには白いベッドの上で数日が経つており、泣きながら覗き込む母親と母親の後ろで安堵したよつた、苦こよつな表情をした浅乃木の顔があつた

星羅が死んだとこつ事実を知らされたのはそこから更に七日後のこと……

「う……嘘だ！」

「嘘じやない」

悠呂は浅乃木を睨みつけた、その目を受け止めるよつに浅乃木も睨み返す

「嘘だ……だつて」

「嘘じやない……俺は……いや、俺達は星羅お嬢さんがその命をかけて助けてくれたよつなものだ」

やつ言つて浅乃木は自身の膝に目を落とし、手をそつとのせた

「……それって、どうこつ」と

浅乃木はじつと自身の膝に目を落としたまま、黙つていたがきゅつ

と膝の上で拳をつくると顔を上げ、悠哉を真つ直ぐみつめた

「聞くか……彼女の最期を」

そう言って浅乃木は星羅の最期を話し始めた

浅乃木の話す内容が全て何かの物語でおきた出来事のようで、とても信じ難かった

でも、想像できてしまつ……ドア軋む音をさせて閉まつていく隙間から見えた星羅の最期の柔らかい笑顔 - -

気がつけば、溢れんばかりの涙が布団を濡らしていた

今思う……あんな短期間な出逢いだつたけど、自分は彼女の事が好きだった

彼女を助けるためにしてことなのに、その彼女を失つてしまつた……さらに、彼女の命と引き替えに自分たちが助かってしまった

「うう……」

涙はとめどなく頬をつたい流れ、気がつけば息も出来ないほどに泣いていた

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
ぐるしい、ああこのまま息をしなければこの気持ちを伝えに行けるのに

そう思った瞬間、目の前が真っ暗になった

「おい！ 悠呂、大丈夫か？」
はつと我に返つて顔を上げると心配そうな顔をしたはじめが覗き込んでいた

「へ、うん、」めん平氣.. 大丈夫」

「あせつた~また、過呼吸になつたんかと思つた」

そつ言ひて、はじめは大仰にベッドに前のめりに倒れ込んできた

「！」めん、もう大丈夫だから」

利き手とは違う手ではじめの肩に手をかけると、布団から顔を上げたはじめはその手をみるなり眉根を寄せて布団に声をこもらせながらせつと叫んだ

「なあ、その腕本当に治れないのか？」

そつ詫がれて悠団ははじめの肩にのせた手を離し、自身の動かなくなつた右腕をさすつた

「うそ」

「うそって、今の医学は進歩しまくつてんだぞ？治せんのになんで？」

悠団は右腕をあやつと掴んで、薄く笑つてみせた

「」されは、その進歩しそうな医学に対してもおつけなんだ

「はあ？」

困惑顔のはじめに笑んで悠斗はつづける

「考へてもみて、本来、神でもなんでもない人間が勝手に神の領域に触れていよいと思つ？」

その質問にはじめは苦い顔をして質問で応えた

「それ、星羅たちのこと言つてんのか？」

「…………星羅たちみたいな子供は創っちゃいけないんだよ」

やつ言つて悠斗は悲しそうに頭を伏せた

はじめは黙りこむ

「僕は、その過ちを未来の人間に伝えたい！ 同じ過ちをおかして

欲しくないから…………だから、」の腕は治せない

悠斗の力強く、晴れやかな表情をみてはじめはふつと笑んだ

「…………おひ」

「命の尊さを…………個人の尊厳を僕たちが伝えなきや」

はじめは腕を組み、楽しそうに笑つて「おひ」と相づちを打つた

「僕たちが生きる明日へ…………」

完

ヒュローゲ（後書き）

大変長引いて無沙汰しておりました、色々ありなかなか手がつけられず今になつてしましました（笑）

しかし、ようやくこの物語を終わらせてやれることが出来ました

私にとっては本当に処女作なので思い入れのある作品です

今までヒュローゲと読んで下さった読者さま、小説のなんたるかを教えてくれた作家仲間の方々本当にありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0592a/>

僕達が生きる明日へ

2011年6月10日12時43分発行